
きみの物語

りいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみの物語

【Nコード】

N8196E

【作者名】

りいち

【あらすじ】

高校最後の夏休み。気付けば私は別世界にいた。口の悪い美少年に天然素材の優しい青年。自己中なナルシストとそれに従う家政婦。脳内ピンク色のホストと頭のネジが外れたボス。個性豊かな殺し屋たちとの普通じゃない生活が始まる。果たして私は元の世界に帰れるのか。

第1話：世界は幾つもあるらしい

海に、来ていたはずだった。

お母さんと二つ下の妹と家族三人、仲睦まじく夏休みを使って珍しく遠出した。お父さん？そんなものは物心ついた時からすでない。

飛行機で約二時間。都会から離れ着いたところはゆっくりと時間が流れる田舎の県。静かな並木道をレンタカーを借りて移動し、時々妹とお弁当を分け合ったりなんかしながら目的地である海へ到着したのだ。それは高校三年生である私にとっては最後の夏休み。それはとてもとても貴重で、誰にも侵す権利はないはず。なのに。

「苦し、い」

ざばーんざばーんという規則正しい波の音が耳に入る。胸が苦しくて苦しくて何度も咳き込んだ。私の口からとめどなく吐き出される液体が真っ白な砂にじわじわと染み込んでいった。

胃の中に侵入していた海水を全て吐き出した頃、ようやく静まった胸の苦しみを抑えて顔を上げれば、視界いっぱい広がる青い空。加えて椰子の木、ジャングル、大きな流木。まさにそこは、南国だった。

砂浜に両手と腰をついたまま、私はただただ目の前の有り得ない現実に愕然とする。立ち上がることもすらできず、また少しだけ咳をした。

「……何で」

全く意味が分からない。何がどうなっただろうなっただのか。

混乱する頭を無理矢理冷静になるよう持っていき、順序よく今日あった出来事を追った。そう確か車の中で水着に着替えて、砂浜には私たち三人しかいなくて、お母さんは木陰で座ってて、私は妹とどっちが遠くの沖まで泳げるか競争してて……それで。

「……あ、溺れたんだっけ」

そうかそうか、私は溺れたのか。それできつと気を失ってぶくぶくと波に吞まれていつの間にかこの島に打ち上げられたんだな、うん。だからこんな海水いっぱい飲んでやってたんだ。あー良かった良かった、これで全部話の辻褄が……って。

「ダメじゃん……」

なに安心してんの私。何も解決してないよ。海水飲んだよ、だから何だよ。

(もしかして、死んだ?)

一瞬そんな考えが頭をよぎった。

そういえばこの緑豊かな島だって、天国という名の楽園に見えなくもない。きつと私は死んで天国に来ちゃったんだな、多分。そう自己完結するもすぐに違う違うと首を振って否定した。そもそも私は天国というものを見たことがないのだ。ここを天国だと決めつけるにはまだ早い。それに、本当にビキニで隠す必要があるのかどうか疑わしいこの貧相な胸も手足も間違はなく私のものだ。どこも透けてない。だから私はまだ死んでない、はず。いや、やっぱり自信ない。首をうなだれ、心の中であれやこれやと試行錯誤を繰り返す私。すると突然、頭上で声がした。

「誰だ、テメエ」

その言葉を聞き、反射的に後ろを振り向いた。

乱暴な物言いで私を見下ろしていたのは、一人の少年。それもべらぼうに格好いい美少年だ。年は十代後半くらいだろうか。いかにも気だるく眠そうな印象を与える垂れ気味の目がより魅力的に思えた。それに何より最も目を引くのは少し癖があり触れると柔らかさうな濃い灰色の髪の毛。

これはもしか、

「原住民……」

思わず呟けば彼は怪訝そうに眉をひそめて「ああ？」と、田舎のヤンキー並に凄んできた。端正な顔立ちに似合わず若干よろしくない口の効き方。いやむしろ悪い、何という口の悪さだろう。性格の悪さが滲み出ているようだ。私はこういう奴が、大嫌い。

彼は濡れた前髪をかき上げ再度私を見下ろした。一連の仕草のそれはそれは色っぽいこと。

「テメエこんな所で何してやがる」

「えーと、あのですね」

「早く答えねえとぶっ殺すぞ」

「……」

この言葉に、決して広くない私の心はイラっときた。誰だって初対面の相手にぶっ殺すなんて暴言吐かれたら腹が立つだろう。

気付けば私は立ち上がり、美少年相手にメンチを切っていた。

5

「ちょっと何、アンタ。いたいけな少女が困ってるのにその言い方」

「あぁん？テメエその貧相な胸で女を語るとはいい度胸してやがるな」

「うわ、何こいつ。最低だよ。セクハラだよ。訴えるよ」

いつの間にか両者譲らぬ言い争いに発展していた。馬鹿だのマヌケだの、貧乳だの癖毛だの、レベルの低い言葉が容赦なく飛び交う。太陽が爆発しようが地球が滅びようが関係なく永遠に続くかと思われたその争いは第三者の登場によって呆気なく遮られた。

「なーにしてんだよ、こんな所で」

何とも気の抜けた声が聞こえたと思いきや、その声の主はいつの間にか私の隣に立っていた。癖毛の少年は「よう」と慣れた様子で私の隣の青年に片手を挙げる。

私よりも少し年上であろう背の高い青年は長めの黒髪を後ろでちよこんと結んでいた。癖毛の少年とは対症的な、少しつり上がった大きな瞳が私を捉える。

「誰だい、アంత」

青年の質問に答えようと口を開くがすぐに癖毛が割って入ってきた。そして私のことをただの頭のおかしい馬鹿女だと説明すると意地悪くニヤリと笑う。わざと聞こえるように舌打ちしてやったが空振りさんしーん、見事にスルーされた。

「どっから来たんだい」

優しい、落ち着いた声で青年が聞く。人当たりの良さそうな笑顔を見るとなぜか胸の奥がほっとした。

とにかく思いつく限り全てのことを二人に話した。自分のこと、家族のこと、今は夏休みで旅行にきていること、溺れたこと、気付いたらこの島に着いていたこと。二人はただ黙って私の話に耳を傾け、時折不思議そうな表情で首を傾げる。

全て話し終わった時、いつの間にか辺りは夕陽でオレンジ色に染まっていた。波は相変わらず規則正しく行ったり来たりを繰り返している。

「それで、私が流れついたこの島は一体なに？」

その質問に対して、二人は困ったように顔を見合わせた。さっきまで馬鹿だ馬鹿だと罵り合っていた癡毛の少年まで、哀れむような視線を私に送ってくる。

少しの沈黙を見送ったあと、口を開いたのはつり目の青年だった。

「残酷なことを言うようだけど」

「……なに」

「多分、こことアンタの住んでる世界は違う」

へ？と思わず気の抜けた声が出た。いきなり住んでる世界が違うなんて言われても何と返せばいいのか分からない。はいそうですか、

失礼しました。と言って去るべきなのか、だけどそれなら一体どうやって私の住む世界とやらに帰ればいいのだ。そもそも世界って何？世界は世界、ひとつでしょう。世界なんていう大それたもんがそんなに幾つもあるはずがないのだ。

「意味が、分からないんだけど……」

混乱した頭でやっと出た言葉がそれだった。立っているのがしんどくて、その場にペタリと座り込んで砂を掴んだ。ぎゅっと握ったその砂は紛れもなく本物で、私の知っている世界と何も変わらなないのだ。なのに目の前の男は違う世界だと言う。それなら決定な証拠を見せやがれと叫ぶ気力も失った私はただただこみ上げてくる涙を必死で抑えるのだった。

「海にな、あるんだよ。小さく渦巻いてる所が」

「……」

「そこは時空の歪みってやつが原因でできた渦でな、ごく稀にお前みたいな何もしらない奴がこの島に紛れ込んでくるんだ」

「なにそれ……」

時空の歪み？渦？そんな下手な映画みたいな話聞いたことがない。益々眉をしかめる私に対して癖毛の少年が言った。

「そんな顔したって仕方ねえだろ」

「……それって、帰れるの？」

「さあな」

あまりに大きな絶望を前にして、寸前まで押し寄せてきていた私の涙は引っ込んだ。浮かんでくるのは先ほどまで一緒にいた家族の顔、それに学校の友達や先生。今頃私のことを心配して捜してるんだろうな。ああどうしよう、すごく帰りたい。

「とにかく、ここにいられちゃ困る。ここは俺たちのアジトだからな」

「アジト……って何の？」

「拠点みたいなもんだ」

「だから何の？」

癖毛の少年は少し考えるように頭を掻いたあと、「仕事、かな」と言葉を濁した。そんな言い方されちゃ余計に気になる。何の仕事なのか更に問い詰めれば、うるせえと怒鳴られた。しかしそんなことでへこたれる私じゃない。しつこく問いただしていると、つり目の青年が呆れたように口を開いた。

「殺し屋だよ」

さらりと言ったその一言に驚いた私はあんぐりと口を開けたまま、まばたきひとつせず二人を見る。

殺し屋、この二人が。とてもじゃないけどそんな風に見えない。

口を割ったことが気に入らなかつたのか、癖毛の少年は不機嫌そうに舌打ちをしたあと「俺は知らねえぞ」と青年を睨む。

そりゃそうだ。

職業は殺し屋です、なんてあまり大きな声で言えることじゃない。そもそも殺し屋なんて初めて見た。

二人共まだ若いのに随分苦労してるんだとなぜか感心する。ここは別世界だと言われた私の頭は、二人が殺し屋なのだという事実を驚く程すんなりと受け入れてしまった。もうこれ以上何を言われても大して驚かないだろう。別世界だろうが殺し屋だろうがもうどうにでもなれと若干自暴自棄に陥っていた。

「赤の他人にあっさり教えやがって馬鹿が。あとでボスにどやされども知らねえぞ」

「大丈夫だつて、要は赤の他人じゃなけりゃいいんだろ？」

「デメエ、まさか……」

会話を進める二人の傍らで私は一人、ジャングルの向こうに沈んでいく夕陽を追っていた。するといきなり手を握られ、体をびくりと反応させれば目の前のつり目がニヤリと笑った。何かと思っ

ていると、彼はとんでもないことを口にする。

「お前も俺たちのアジトに来いよ」

「……え」

瞳を輝かせ、笑顔でそう言う青年の隣りで癖毛の少年は深い深い溜め息をついた。

「い、や……だよ」

どもりながら答える私。その瞬間、つり目の青年はおもちゃをとられた子供のように悲しそうな表情になった。騙されるな私、こんな可愛い顔でも殺し屋なんだ。そのアジトに行くなんて命が幾つあっても足りない。

「楽しいぞ、メンバー全員個性的で」

「余計不安だよ」

「でも行く所ないんだろ？それにこの島は俺たち組織が作った人工島だ。仲間にならないなら追い出すしかなくなるんだけど」

「まじかよ」

それは困る。物凄く困る。迷っている私に手を差し伸べ、一緒に行こうと笑う青年。どうやら私にはこの手をとるしか選択肢が残されていないらしい。癖毛の少年が若干不機嫌なのは置いといて。

「どうするんだよ、貧乳女。お前ずっとこんな所にいるつもりか」

「貧乳は余計だよ」

「いいからさっさと決めろ」

「……」

睨むように私を見る癖毛と、穏やかに微笑むつり目。悩んだ挙げ句、私は立ち上がった。癖毛の少年の言う通りずっとこんな誰もいない砂浜で座っているわけにはいかないのだ。身体についた砂を払い、二人のあとに着いて行く。

「そここなくちゃ」

青年が笑った。

「まあ、何とかなるだろ」

そう言っつて癖毛の少年も少しだけ微笑んだ。
初めて見るその笑顔が予想以上に魅力的で、危うく私の胸キュン
スイッチがオンになるところだった。危ない。

第2話：愉快的殺し屋たち

人工島とは思えない程に険しいジャングルの中をかき分け歩くこと約十分。それは堂々と木々の真ん中であつた。

いかにもアジトらしいその建物は灰色のコンクリートに覆われた大きな大きな四角い箱のようだった。まるで誰かの落とし物のように無造作に置かれてある。明らかに浮いていた。見れば《アジトへようこそ》と書かれた馬鹿っぱい立て札まである。何だこのセンス。

「いいの？殺し屋組織のアジトがこんなに堂々としてて」

「大丈夫。そもそも普通の人がこの島を見つけること自体不可能だからな。例外もいるけど」

「あーすいませんね、例外で」

「褒めてるんだよ」

「絶対嘘だよ、この人」

二人の後ろでぶつぶつ文句をこぼしながらも着いて行く。

建物の中はこれまた普通の家と何も変わらない造りでつい気が抜けた。

広くもなく狭くもない居間の中には卓袱台があり、ソファーがあり、テレビがあり。その奥にあるのれんの向こうは恐らく台所だろ

う。無駄な家具は一切なく、なんとも和風なその居間は、よくお笑いコントなんかで使われるようなあつさりしたものだっ。

在るものは私の知っているものばかり。なのにどうして、違う世界なんだろう。本当に私の住んでいた世界とここは違うんだろうか。

「そついやテメエ、名前は何て言うんだよ」

癖毛の少年がソファアにどっかりと腰を下ろして聞く。

「……浅野レン」

「ふうん。レン、ね。俺はグンゼだ」

「よろしくな、レン。俺はアル」

えーと。癖毛の少年がグンゼでつり目の青年が、アルか。思わず変な名前、と口を滑らしそうになった。そんなことを言ったらアルはともかくグンゼに殺されそうだ。とか思っただけ、嫌みっけらしくグンゼが言った。

「しかしレン、男みてえだな。名前と胸が」

「黙れよ癖毛。どっちも既に手遅れなんだから改めて言われるとアルにへこむよ」

「あー悪い悪い。変えようのない事実だもんな、特に胸は」

うわ、完璧私のこと嫌ってるよこいつ。なんて嫌なやつ。
それならこつちだって遠慮はしない。偉そうに見据えてくるゲン
ゼの前に仁王立ちで見下ろしてやった。

「なんならアンタの頭丸刈りにしてさらっさらのストレートが生え
てくるか試してみようか」

「うるせえ。これはあえての無造作へアーなんだよ馬鹿女」

「え、じゃあわざとですかその癖毛。わざとそんな風にくしゃって
してるんですか。あ、もしかしてお洒落ですか。それはそれは気付
きませんでしたごめんなさ、」

言い終わる前に頭を思いっきり叩かれた。

思わず奇声を発するがあまりの痛さに何が起こったのかしばらく
理解出来ず、ただ頭を抱えてしゃがみ込む。

大丈夫か、と数秒遅れでアルが寄ってくる。

「ゲンゼ、いくら何でも叩くのは……」

「いや、悪い。何かムカついたから手が勝手に」

無表情でそう言うゲンゼを思いっきり睨みつけ、私は立ち上がった。

文句を言ってやろうと口を開いた瞬間、背後で扉の開く音がした。
やっと帰ってきたか、とゲンゼが溜め息をつく。つられて後ろを

振り向けば、

「あ、誰ですか。その女の子」

「……」

居間へ入ってきたのは一人の大男。身長190センチはありそう
だ。夏場隣りにいられるとちよつと暑苦しい感じ。目が小さく、離
れており魚のような顔だ。顔色も異様に白くて気持ち悪いし加えて
年齢不詳。本当に人間か疑ってしまう。

まじまじと観察しているとまた別の声が出た。

「どこで拾ってきたんだ、こんな小娘」

そう言つて大男の後ろから姿を現したのは細身の男性。歳はアル
より年上に見える。アルやグンゼとはまた違い、すごく落ち着いた
雰囲気の人だ。斜めに流した前髪がすごく似合う。色白で中性的な
綺麗な男の人だった。この人も殺し屋なのか……。

「あの、はじめまして」

これまでのいきさつをどう説明すればいいのか迷っていると、意
外と気の利くグンゼが代わりに説明してくれた。別世界のことも、
そして私をこのアジトに住ませるということも。

大男の方は見た目とは裏腹に意外と腰が低く、ただただグンゼの

言葉に驚くだけ。けどもつ一人の方は違った。明らかに私がここに
いることに反対している。

「こんな水着一枚のふしだらな女を信用しろと言つのか」

「それは……」

そう言えば私、水着のままだった。

アルとグンゼが顔を見合わせ苦笑いをする。

「大丈夫だつてミナミ。ちょっと怪しいけどレンは悪い奴じゃない。
本当に困ってるんだ」

アルが必死で説得すると、ミナミと呼ばれたその色白美人はまじ
まじと私を観察する。それはもう頭のとっぺんから足先まで。

しばらく無言のまま私を見たあとミナミは、ふっと鼻で笑った。
その笑い方が明らかに馬鹿にしているようでイラっとしたが、とり
あえず黙っておいた。

「まあ、この程度の女なら問題ないだろう」

「どついつ意味よ」

「もしお前が色仕掛けを使って俺たちをたぶらかそうとしている他
の組織のスパイだとしても、お前程度なら問題ないという意味だが。

何か」

「……」

信用されたのやらされていないのやら。

このミナミという男もゲンゼに負けず劣らず嫌な性格だよ。この世界じゃ美形はみんな性格悪いのか。確かに私は飛び抜けて美人というわけじゃない極々普通の顔立ちだし、スタイルだってモデル並みにいいわけじゃない。だからってそんな言い方しなくてもいいんじゃないか。

「ミナミはこういう奴だから」とフォローを入れるアルの言葉に軽く頷き返す。

「私レンっていうの。よろしく」

とりあえず名前だけでも、そう思って自己紹介をしてみると、「ミナミだ」と彼は素っ気なく応えた。
すると今度は大男が私の前に立つ。

「私は鬼大キタイと言います」

随分と丁寧な言葉使いの鬼大。名前も見た目も一番凶暴そうなのに実は一番気が弱いらしい。

「おい鬼大、何かレンに羽織るものを持ってきてやれ」

「あ、はい」

ミナミの命令で鬼大はすぐさま居間を出る。話によれば鬼大はその気の弱さが災いし、メンバーから全雑用を押し付けられているらしい。その中でも一番鬼大をこき使うのがミナミという話だ。やっぱりただ者じゃない。

「殺し屋って、これで全員？」

「いや、あとボスと……もう一人メンバーがいるんだけどまだ帰ってきてないんだよな」

「ボス……」

殺し屋組織のボスなんて絶対怖いに決まってる。はたして私は生きて帰れるのだろうか。そう思えば思う程妙な不安感に襲われ一瞬目眩がした。

窓がないから外のようなようすは分からないけど、恐らく辺りはもう真っ暗だろう。

私の心配を感じとったのか、ソファアに腰かけたままのゲンゼが軽く笑った。

「びびってんのか、馬鹿女」

「そんなことないよ……」

「大丈夫だって、お前が思う程怖い組織じゃねえよ」

「だから違っつてば」

間もなくして鬼大が大きなバスタオルを持ってきてくれた。綺麗に折り畳まれたそれを受け取り肩から被る。何故か少しだけ安心した。

「すみませんレンさん。バスタオルくらいしかなくて」

「いや、全然大丈夫」

本当にいい奴だよ、鬼大。

茶を入れる、和菓子をいせ、肩を揉め、などと次から次へと下されるミナミからの命令にも手際よく応えていく。本当に、彼の完璧と言っても過言じゃないほどの家政婦っぷりは思わず私に感心の溜め息を漏らさせた。いや、それにしてもミナミは自己中だ。

ふいに壁にかかっている時計を見たグンゼが「そろそろだな」と呟く。その瞬間、まるでその言葉に合わせたかのように居間の扉が勢い良く乱暴に開いた。扉が壁に当たる音に驚いて、つい肩をびくりと反応させる。

入ってきたのは一人の若い男。中に着ているワイシャツを除くと、全身真っ黒なスーツに身を包んで立っている。ネクタイは歪み、随分疲れた表情をしていた。加えてホスト顔負けの端正な顔立ち。金

色がかったその前髪の奥に揺れる鋭い眼光に射抜かれた私は、思わずハッと息を呑んだ。

「…………女じゃねエか」

ホスト顔が近づいてくる。それと同時に酷い鉄の臭いが鼻をかすめた。これは知っている、血の臭いだ。

私は思わず後ずさった。血の臭いを引き連れて歩くこの男を見て、初めて恐怖というものを感じたのだ。

「レン」

さっと手が伸びたかと思うと、すかさずアルが自分の背中に私を隠した。男は途端に顔を歪める。目が虚ろで焦点が定まっていない。すると今度は、それまで座っていたグンゼが急に立ち上がった。男の腕を掴む。凡人の私でも分かるくらい、空気がピリピリしていた。鳥肌が両腕を走る。

「血の臭いつけて帰ってくんなくて、前にも言っただろうが」

「何だグンゼ、指図すんのか俺に」

「馬鹿が。テメエまだ目が醒めてねえのか」

「あ…………？」

途端、グンゼの拳が男のみぞおちに思いっきりめり込んだ。かすれた声を出して男はその場に崩れ落ちる。口から胃液を吐くとその上に自分の顔をつけて倒れた。

人が人を殴る、という光景を初めて見た私は叫びそうになった口を両手で抑え、必死に我慢した。それほど強烈だったのだ。

さすが殺し屋、他のメンバーは慣れた様子でそれを見る。

「悪いなレン、驚いたか」

何度も頷き目を見開く。倒れたままの男に視線をやれば、目を瞑ったままびくりともしなかった。まさか、死んでないよね。

「こいつの名前は飛翔^{ひしやう}。これでも俺たちの仲間だ。無類の戦闘好きでな、一度戦闘モードに入ったら人格変わっちゃうんだよ。普段はただのバカだけど」

「……大丈夫なの」

「これ位じゃ死なねえよ」

それを聞いてほっと安心した。死体なんか見せられたらたまったもんじゃない。ああ、それにしても怖かったな。この人。

足元に転がっている肩幅の広い男を見ると、背中の筋辺りがぞくぞくとした。

「腹減ったな、鬼大何か作れよ」

「はい」

従順な鬼大はグンゼの言葉に文句ひとつこぼさず台所へ消えていった。

「あ、ミナミ。そういやひとつ部屋開いてたよな」

「ああ、奥の部屋がな」

「よし。俺が案内してやるからレン、着いて来いよ」

アルが何の迷いもなく私の腕を引っ張った。思わず胸がどきりとする。男の子と手繋ぐなんて久しぶりだよコノヤロー。好きになったら責任取れよ。いや、むしろお願いします。

私の気も知らず、アルは無邪気に笑いかけてくる。少年のようなその笑顔につられ、私も思わず頬を緩めた。

「アル、どさくさに紛れて襲うなよ」

「お前と一緒にするなよ、ミナミ」

居間から廊下に出る。そこは薄暗く、いくつも扉が並んでいた。どうやらメンバーひとりひとりの部屋らしい。

相変わらず私の腕を掴んだままのアルがお構いなしに前を歩く。私より少しだけ背が高い彼のその背中が意外に広がった。

やがて一番奥にあるドアの前に立つと、アルは迷いなく扉を開けた。

「ここが今日からレンの部屋だ」

「……え」

普通の部屋かと思われたそこは悪趣味なエロポスターやビデオ、本などが散乱していた。

アルも驚いたのか、こんなはずじゃないと言うように慌ててドアを閉める。バタン、という音が響いたあと、私たちの間に至極気まぜい空気が流れたの言うまでもない。

何だかこつちが恥ずかしくなり、途端に熱を帯びてきた私。同じく顔を真っ赤にしたアルが問いかける。

「……見た？」

「そりゃ見たよ……」

「くそ、絶対アイツのせいだ……」

アルの言うアイツが誰なのか分からないけど、とにかく私たちは

居間へと戻った。

意外に早く戻った私たちを見て、ミナミとグンゼが不思議そうな顔をする……ていうかまだ飛翔とかいう奴、転がってるよ。誰か移動させてやれよ。

「どうしたんだよ。二人して顔赤いぞ」

「まさかアル……お前あの短時間でレンを」

「いや違うから」

ミナミの馬鹿な妄想を軽く流し、アルは溜め息をつく。そして転がったままの飛翔を思いつきり睨んだ。

「空き部屋がエロ本で埋め尽くされてたぞ。絶対飛翔のせいだろ」

「あ？エロ本？」

その言葉に反応したのはグンゼ。少し考えるように一点を見つめたあと、何かを思い出したように「ああ、「とこぼした。

「アル、それ違う。飛翔じゃなくて、確かボスがエロ本の置き場所無くなったとか言いながらあの部屋に移動してたんだ。すっかり忘れてたぜ」

「ボスカよ……」

呆れ顔のアルに、ヘラヘラと笑うゲンゼ。

というかこのボス、エロ本どんだけ持ってんの。飯にもボスでしよ。もう会う前からイメージ最悪なんですけど。

「大体アイツ今日帰ってくるのかよ」

「さあ、ボスは気まぐれだからな」

「帰って来ないんじゃない？今朝どでかい荷物持って出てっただろ。仕事とか言ってたけどありや確実女のそこだな」

「ああ、間違いない」

部下からの信用全くないよ、このボス。

私の部屋はそのボスとやらが帰ってきてから考えるところとして、とりあえず今日のところは居間で寝ろ、とミナミから命令された。

「ええ、やだよ居間で寝るなんて。ミナミ代わってよ」

「ふざけるな小娘。居候のくせに凶々しい」

「女の子が一人でこんな所に寝てたら襲われるじゃん」

「お前は大丈夫」

「言い切ったよコイツ、うぜー」

「俺たちにも選ぶ権利はある」

そう言ったミナミの言葉を聞き、同意したように頷くゲンゼとアル。なんて失礼な奴ら。いや、別に襲って欲しいわけじゃないんだけどね。

その時鬼大がお盆を持って居間に戻ってきた。魚を焼いたようないい匂いを嗅いだ瞬間、それにつられてお腹が鳴った。

卓袱台に集まる三人につられて私もちゃっかり間に座る。

こつちの世界の料理はどんなもんかと少々心配していた私だけど、運ばれてきたのは焼き魚に煮物という極々普通の料理だった。

「なんか、私の住んでる世界と変わらないんだけど。本当にこつちで別世界なのかな……」

ポツリと呟けば、ゲンゼがめんどくさそうに答えた。

「まあ……そのうち分かるだろ」

「……」

その時のゲンゼの言葉が何故か妙に意味深だった。

気にしないふりをするために

「いただきます」と両手を合わせて煮物に手を付けた。食べた途端、驚かされる。結構、いやかなりいける。

「うわ、おいしいじゃん」

「何ですかその意外そうな言い方」

「だってまさか鬼大が料理上手とは……」

「家事生活長いですからね……」

そう言って表情を曇らせた。哀れだよ、鬼大。

「まあこの馬鹿は家事しか取り柄がないからな。使ってやるだけ有り難いと思え、カスが」

「アンタまるで悪魔だよ、ミナミ」

「黙れ貧乳女。俺の美しさに嫉妬か」

「うわー……」

絶対ナルシストだよ、こいつ。自己中の上にナルシストっているんな意味で最強だよ。言い返さない鬼大も鬼大だけど。

黙々と箸を進めるみんなの傍らで一人、相変わらず転がったままの男に目をやる。

心配になり、隣に座っているアルに問いかけてみた。

「ねえ、あの人まだ起きないけど大丈夫なの」

「ああ、そういえば邪魔だな。飛翔のやつ起こしてやれよ、グンゼ」

アルに言われたグンゼは渋々重い腰を上げて立ち上がった。めんどくさそうに頭をかきながら飛翔のそばまで行く。何をするかと思いきや「起きろ」と極々落ち着いた声で言いながら無抵抗の彼の背中を思いつきり蹴った。その瞬間飛び起きる飛翔。何が起こったか分からないとでも言うように目を見開いている。ただしその目は初めに見たような恐怖を感じる目ではなかった。至って普通の、ただし寝起きの目だ。

「やっと起きたか。こんな所で寝やがって」

いや、アンタのせいだよ。

「あ……グンゼ。俺、寝てた？」

うわ、こいつも馬鹿だよ。完璧忘れてるよ。便利な性格だなオイ。呆れながら見ていると、先ほど起きたばかりの男とばかりの男とばかり目が合った。飛翔は私を見て眉をしかめたあと、

「誰だ？」と問いかける。ああ、やっぱりそれも覚えてないんだね。

「えーと、レンです」

とりあえず名前だけ言えば、男は戸惑いながら「飛翔」と短く答えた。

まだ寝ぼけているのか、それともイマイチ状況が把握できていないからなのか、頭を抱えて大きく息を吐いたあと、

「つーか、腹減った」と呟く。

「飛翔、テメエ血の臭いつけて帰ってくんなって前にも腐る程言っただろ」

「え、俺また血つけて帰ってたか？」

「そうだよ。そのせいでレンの奴がびびっちゃまってんだろっが」

「うわ、やべー。全然覚えてねえ」

悪い悪い、と全く悪びれた様子もなく私に向かって言う飛翔。軽い。絶対平気で浮気するタイプだなこいつ、と私は瞬時に分析した。謝ってスッキリしたのか、彼は軽く背中を伸ばしたあとどっかりと私の隣に腰を下ろす。居酒屋によくいる質の悪いオヤジのように片膝を立て、飯を持ってこいと鬼大に命令した。せつかくのルツクスとスーツが台無しだ。

「で、何で女がこんな所にいるんだよ。しかも水着じゃねえか。やる気満々だなア、オイ」

「変なところ触んな変態！」

「うわ、意外と言っなア」

助けを求めると、見かねたアルが席を代わってくれた。飛翔はチツと舌打ちし、ふてくされたように夕食に手を付ける。ミナミとゲンゼに至っては、巻き込まれたくないとも言っようにただ黙って魚をつついていた。

「レンは渦に吞まれて偶然この島に流されてきたんだ。行き場所が無いから連れてきたんだよ」

「へえ……珍しい。あの渦になア。それじゃああれか、この女は別世界の人間か」

「ああ、別にいいだろ？」

「俺は構わねえよ。だがレンはいいのか？こんな殺し屋のアジトなんかについて」

「……」

わざと脅すような言い方につい口を閉ざした。だけど馬鹿にされるのが悔しくて「平気だよ」と強がり言う。大した女だ、と飛翔は下品に笑った。

「まあ、島の外に出るよりはまだマシかもな。もし流れついたのでここじゃなかったら今頃……」

「やめろ、飛翔」

突然グンゼが言葉を遮った。はいはい、と答える飛翔にそれ以上は何も言わないグンゼ。アルも黙っている。私だけが何も分からずただみんなの顔を順番に見ていた。

「気にしないで下さいレンさん。きっと帰れますよ」

「……うん」

優しい、だけど誤魔化すような鬼大の言葉に、私はただ頷くしかなかった。一体この島の向こうでは何が起きているのか、私が必要を知るのもう少し先になる。

彼らの就寝は意外と早い。アル曰わく、寝れる時に早く寝ておか

ないといけならしい。殺し屋も忙しいんだなと感心した。

次々と自室へ戻るみんな。壁の時計はちょうど九時をさしている。これは小学生の寝る時間だと試しに言ってみたが、小学生というも自体が何なのか分かっていないようだった。やはり、別世界。

「私やっぱり居間で寝るの……？」

「ああ、じゃあな」

素っ気なく答えるグンゼにさっさと居間を出て行く殺し屋メンバ
！。
すると優しい鬼大が毛布を持ってきてくれた。

「レンさん、これ使って下さい」

「私は捨て犬か」

薄情な奴らの去り行く背中を見ながら毛布をぎゅっと握り締める。
すると今度はミナミがやって着て、私にTシャツ一枚と短パンを
貸してくれた。男物でサイズは少し大きいけど、水着よりはだいぶ
マシだ。というかこういうものはもっと早く持ってきて欲しかった
よ。

「着替える」

「あ、りがとう。あのさミナミ」

「部屋は貸さん。じゃあな」

「……」

ぼつんと一人居間に残された私はさつさと着替えて仕方なくソファアにごろんと転がった。固いし寝心地悪いし何か毛布も埃臭い。絶対押し入れとかの奥に入ってた奴引つ張り出してきたんだよ、あの家政婦。

いつの間にか怒りの矛先は鬼大へ。八つ当たり？そんなの知らない。

そのうち馴れると思っていたが、あまりにも埃臭くていつまでも眠れなかった。仕方なく毛布をソファアから蹴落とし、縮こまって寝ることにした。くそ、もしこれで風邪引いたらアイツら全員訴えてやる。

ちようどいい感じにうとうとしてきた頃、再び誰かが居間に入ってくる気配がした。「おい、」と声をかけられたので、ぱっと目を開ければそこには灰色の髪的美少年が。

「あ、ゲンゼ……」

「そこ、どけ」

「は？」

こいつ私を居間へ残した拳げ句ソファアまで奪おうとするなんて

信じられない。

絶対やだ、と言って顔を伏せれば次の台詞は至極意外なものだった。

「どけよ。部屋代わってやるから」

え、と間抜けな声を出して顔を上げれば早くしろ、と怒られた。とりあえず起き上がってソファから降りれば、入れ替わるように今度はグンゼが横になる。

「俺の部屋、手前から三番目。今日だけ貸してやるよ」

「いいの」

「但し余計なもん触るんじゃねえぞ」

「うん」

私は笑顔で部屋へ向かう。居間を出る瞬間、立ち止まって振り向いてみた。グンゼは仰向けになり、もうすでに目を閉じている。

「グンゼ、」

「……」

「ありがとう」

「……おやすみ」

呟くようなその返事に、私は小さく頷き返し居間を後にした。

もうみんな寝ているのか、廊下では物音ひとつ聞こえなかった。言われた通り手前から三番目のドアをそっと開ける。電気がついていない薄暗いその部屋はベッドがひとつと、びっしり本の詰まった大きな棚だけというすごくシンプルなものだった。

私は迷わずベッドに潜り込む。

(あ、グンゼの匂い)

心地良いその匂いは私の心を幾分静かにさせてくれた。次第に瞼が重くなっていく。

なんだ、意外といい奴じゃん)

そしてゆっくり、夢の中へと墜ちて行った。

第3話：ヤンキー美青年と海を越えて

「お、やっと起きたか」

「…………え、」

朝、目を覚ますと目の前には上半身裸の男が同じ布団に入っていた。思考が追いつかずにこやかに微笑む男の顔をよく見ればどこかで見たことのある顔。

「アンタ誰だっけ、と問えば相手の男は「忘れたのかよオ」と随分大袈裟なりアクションをしたのち私の頭を軽く叩いた。そもそも、ここどこ？」

「お前昨日グンゼに部屋代わってもらったんだろオ」

「グンゼ…………？」

ええと、グンゼグンゼ。誰だっけ。確かに聞き覚えのあるその名前を必死で探る。起きたばかりの私の脳はまだ正常に働いていないらしい。周りを見渡せばシンプルな男物の部屋。あれ、私の部屋ってこんなに片付けてたっけ。

「まだ寝ぼけてんのかア？レンちゃんよオ」

名前を呼ばれてハツと我に帰った。そうだ、シンプルなこの部屋も、軽い口調のこの男も見覚えがある。

そう。私は今別世界の、しかも殺し屋組織のアジトにいるのだ。全て思い出した瞬間、無意識に重い溜め息が出た。

「とりあえず何で飛翔がここにいるわけ。不法侵入だよ、ブタ箱にぶち込むよ、痴漢は罪が重いよ」

「起こしに来てやったに決まってるだろオ。それに俺もう既に犯罪者だし」

「だったら何でわざわざ上着脱いでんの」

「この方が雰囲気出るかと思って」

「何の雰囲気だよ」

とりあえず飛翔をベッドから蹴り落とし、背中を伸ばして息をついた。うん、朝だ。爽やかな朝。

床に腰をついた飛翔を無視し、部屋を出ようと立ち上がる。すると笑いを含んだ声音でホスト顔の変態は言った。

「涎垂らしてたぜ、レン」

「げ、」

何勝手に寝顔見てんだコノヤロー。もういつそ死ねばいいのにド変態。何だよそのいやらしい笑い方は。涎垂らして悪いかこらアアアアアアア。

死ねよ、と一言捨て台詞を吐いて部屋を出た。わざと乱暴にドアを閉め、居間へと急ぐ。

居間に入るともうみんな食卓についていた。味噌汁のいい匂いがする、爽やかな朝のーコマ。

不機嫌な顔をした私に、どうかしたかと問いかけてくるアル。

「何で君が起こしに来てくれなかったのさあ」

「え、いや。飛翔が行くって言ったから」

「……」

戸惑うアル。彼に怒っても仕方ないと本日何回目かの溜め息を吐いた。全部、悪いのはあの変態なのだから。

気を取り直して私も食卓につく。ピンクのエプロンをした鬼大の姿に吐き気を覚えながらも朝の挨拶を交わす。なぜ、なぜピンク？あれは一体何？誰の趣味？他に違うのなかったの？と脳内を忙しく駆け巡るそんな疑問たちも、温かい味噌汁を飲めば瞬時にどこかへ飛んでいった。

そんな私の気持ちも知らず、一足先に食べ終わったみんなの食器を片付けながら鬼大は至極事務的に言った。

「今日は全員朝から一日中仕事ですので、レンさんは留守番して
て下さい」

「え、うん。嫌だよ」

「即答ですか」

困りましたね、と呆れながら呟いた。

だって、こんな知らない土地で一日ずっと一人きりだなんてそんなの絶対に耐えられない。なんせ殺し屋のアジト、怨みを持った浮かばれない何やかんやが出てきたらどうすればいいのよ。

「私も連れて行って」

「駄目です」

「大人しくするから」

「駄目ですってば」

私と鬼大が言い合いをしている間、他のみんなはいそいそと仕事へ行く準備をしていた。居間と自室を往復したりと随分忙しそうだ。私もそろそろ準備を……という鬼大を引き止め何とか説得を試みる。だけど返事は「駄目です」の一点張りだった。

それならばと今度はアルに頼んでみる。優しいアルは少し考えるように首を捻っていた。

「どうする……?」

アルが他のみんなを見る。

ミナミは「俺に聞くな」と目をそらし、グンゼは「今忙しいんだ」と取り合わない。飛翔は「別にいいんじゃないねエ」といかにも何にも考えて無さそうな台詞を投げてスーツのジャケットに袖を通した。

「お願い」

低く唸りながら悩んだあと、まあ、いいだろうとアルは笑った。
一人猛反対していた鬼大は「知りませんからね」と少しふてくされているようだった。

「但し仕事の邪魔すんなよ、馬鹿女」

「……分かってるよ」

「そう言う奴が一番信用ならねえ」

「じゃあ何て答えたらいいのさ」

「……それもそうだな」

「馬鹿はお前だよ」

昨夜の優しかったグンゼは何処へやら。相変わらず、口悪い。いや、それは私も同じなただけ。

見た目的に歳が近いせいもあるのか、グンゼとは特に小競り合いが絶えなかった。実際の年齢を聞いてないからよく分からないんだけど、きっと同じくらいだろう。

というかこの人達みんな年齢不詳だった。全員が全員ため口だから年齢の上下がいまいち把握できないのだ。まさか全員同い年、ということはないはず。

「そういえばレン。お前着替えも何もないんだろ」

「あ、そういえばそうだった」

思わず今の自分の格好を見て苦笑いを零した。昨日ミナミに借りたままのTシャツとズボン。サイズが合っていないせいで今なら間抜けさ増量中、みたいな。

呆然と立ち尽くす私。グンゼに鼻で笑われたのは言うまでもない。

「お前その服で一緒に行くなんて抜かしてんのか」

「いや、それは……」

「グンゼの言うとおりだ。何だその……だらしない格好は。女の風

上にもおけんな」

「いや、これあなたの服だよ、ミナミ」

くそー、ほんとム力つくなぁミナミは。無表情でそんなこと言われたら余計傷つくよ。美形だから許すけどこれがもし不細工だったらとつくに目潰ししてるよ。

ふと、グンゼの視線に気づき、何ですかと聞けば「今から買いに行くか」と呟いた。あまりにも突発的なその意見に一瞬着いて行けず、思わず気の抜けた声で聞き返してしまった。

他のメンバーも至極意外そうに、私とグンゼを交互に見た。いち早く反応したのは鬼大。

「何言ってるんですか、グンゼさん。今から仕事ですよ!」

「ああ?家政婦の分際で俺様に意見する気か」

「え……いや、だって仕事サボってボスにバレたら」

「心配するな、あいつバカだからどうせバレねえよ」

行くぞ、とそう言ってグンゼは私の手首を乱暴に掴んだ。そのままアジトの出口へとずんずん進んで行く。鬼大が止めるのも無視し、私はただグンゼに引っ張られるがまま着いて行く。アジトが出る瞬間見えたのは、言葉を失い呆然と立ち尽くすみんなの姿だった。ていうか、手首痛い。

「ちょっと、いきなりどうしたわけ？」

「別に。仕事サボりたかっただけだ」

「……」

パツと手を離し、目をそらしたままグンゼは頭を掻く。照れているように、見えなくもない。何こいつ。昨日の夜といい今といい、もしかして私のこと好きなんじゃないの？うわー、まじで。まさかの展開？ラブストーリーは突然に？

「グンゼさあ、もしかして私のこと……」

「言っとくが変な勘違いするなよ」

「え、」

「俺がお前のこと好きなんてありえねえからな」

「……まだ何も言っていないじゃん」

「どうせ下らねえこと考えてたんだろ。全く顔もブスなら性格もひでえ妄想癖だな」

「とりあえず死ねよお前」

前言撤回。一瞬でも心ときめかせた私がバカだった。

さつさと歩け、と頭を叩かれ仕方なく険しいジャングルをかき分けて進む。ああ、くそ！だいたい何でジャングルの真ん中にアジト建ててるんだよ。不便で仕方ないよ。

イライラを募らせながら歩くこと10分。ようやく私は砂浜へ出ることができた。その瞬間丸裸の太陽が肌を刺す。思わず「うわあ……」と呟いてしまう程暑かった。そんな私とは正反対に、いかにも暑苦しそうなパーカーを羽織っているにも関わらずグンゼはさすがに馴れた様子でケロツとしていた。それがまた、ムカつく。どんだけ寒がりなんだ、この青年は。

「この島に服なんて売ってんの？」

「いや、ここは俺たちのアジトの為にボスが作った島だからな。買い出しは全部島の向こうだ」

「どっつやって行くの？」

まさかこの広い広い海を漫画に出てくるような丸太ボートで渡るって言うんじゃないよね。そう言うとお前はアホだと呆れられた。

とりあえず彼の後に黙って着いて砂浜を歩く。つい昨日私が打ち上げられた砂浜には、今日も流木がゴロゴロと転がっていた。纏わりついてくる砂の上をなんとか器用に歩きながらグンゼの背中を追いかけた。深い灰色の髪の毛が太陽に照らされ幾分か明るく見えた。不思議な色だ、地毛かな。

歩けど歩けど砂浜ばかり。近い近い太陽の下をこんなに歩かせて殺す気か、この男は。

やっとグンゼの歩みが止まる。そこには数台の乗り物らしき物体

が置かれてあった。どれもこれも少し変わった形をしている。ハンドルがついた、バイクに近いデザインの二人乗り用ボードで、これに乗って島を出るのだと彼は言う。

まずはグンゼが飛び乗りエンジンをかける。その瞬間、機体全体が物凄いエンジン音を鳴らしながら地面から数十センチ程浮いた。

「すごいね、初めて見たよこんな乗り物」

「いいから後ろ乗れ」

言われた通りグンゼの後ろに乗る。乗ってみると普通のバイクみたいだ。これが海の上を走るのか、すごい世界にきちゃったな、私。乗ったはいいものの、手をどうすればいいか分からない。一人オロオロしていれば、腰に回せよとグンゼが言う。その口調があまりにも普通だったので、それならばと遠慮なく腰に掴まった。

「飛ばされんなよ」

「え、」

「……殺す気ですか、あなた」

「何だよあれくらいで、情けない女だな」

とりあえず早くなつた鼓動が落ち着くのを待つ。何度も深呼吸して額に滲んだ冷や汗を拭つた。

乗つたはいいけどあの水上バイク、スピードが半端じゃない。確実に軽く時速200キロは出ているだろうスピードの中、しかも海のと真ん中、風に吹き飛ばされないように必死でグンゼの背中に引つ付けていた。もう違う意味でドキドキしっぱなしだよ。

「ジェットコースターよりひどいよ……」

「ジェットコースターって何だ？」

「あ、分かんないならいいです……」

何で平気なんだ、こいつ。こつちの世界の人間と私では、やっぱりどこか違うらしい。風で乱れた髪の毛を適当に整え、気を取り直して立ち上がった。

海を渡つて着いたそこは港。大なり小なりの船がズラリと並び、人も半端なく多い。随分栄えたこの島は、よく買い出しなんかで利用する場所らしい。

その港を抜けてすぐに街はあつた。随分と賑やかな街だ。色とりどりの店が並び、行き交う人々は男も女も綺麗に着飾っている。日本ではなく、どちらかと言うとパリやロンドンのようなお洒落な雰囲気のある街だ。まあパリもロンドンも実際に行ったことがないからよく分からないんだけど。私は店のウィンドーに映る自分の姿を見て

急に恥ずかしくなった。

「どうかしたか」

「いや、別に」

「なら早く来い」

ぶっきらぼうに言い放つと、グンゼは早足で前を歩き始める。私もはぐれないよう急いでグンゼの隣に並べば、街行く人が不思議そうに私たちを交互に見比べる。それもそうだろう。かたや美青年、かたや上下部屋着の女なのだから。そんな二人と一緒に歩くなんて何かのネタにしか思えない。うわ、帰りたくなってきた。

「入りたい店あったら言えよ」

「この格好でか」

「何だよ、そんなこと気にしてんのか」

「気にするよ……」

私だつて曲がりなりにも女の子だ。いくら貧乳と言われようが馬鹿だと罵られようが年頃の女の子なのだ。この無神経男には分からないだろうけどね！

するとグンゼが何を思ったのかある店へ入って行った。そこはお

洒落な女物のシヨップ。とても部屋着の女が入って良いような場所ではない。入り口で躊躇していると、早く来ないと殺す、と言われすぐさま足を踏み入れた。ピンクや真っ白な小物がキラキラ光り眩しい店内にはズラリと並んだ大量の服。店員さんの営業スマイルすら輝いて見える。

「ん、これ着てみる」

はい？と返事をしたものの無理矢理、グンゼの選んだ服と共に試着室へ押し込まれた。カーテン一枚で仕切られたその狭い空間で、上下部屋着の私は呆然とする。すぐ近くからグンゼと店員さんの話し声が聞こえた。

「可愛い彼女さんですね。今日はデートですか？」

「彼女じゃねえよ、うるせえな」

うん、口の効き方最悪だね。店員さんごめんなさい。何かごめんなさい。

これ以上店員さんに負担をかけては気の毒だと思い、急いで服を着替えた。一枚でサラリと着れる夏らしいワンピース。意外にいいやつ選ぶじゃないかと半ば関心していると、予告もなしにカーテンが開かれた。

「お、着たか」

「いきなり開けんな変態！」

「お前が遅いからだろうが」

着替えたあとだから良かったものの、急に開けるなんて脳みそ腐ってるよ確実に。少しも悪びれずグンゼはだるそうに頭をかきながら私のワンピース姿を見た。「まあ、見れなくもないな」と憎たらしく嫌みを吐くとさっさと部屋着を拾い、私の手首を再び引つ張った。

「え、ちょっと、」

「金ならもう払っておいた。次は靴だな」

「え、え、え」

ありがとうごさいましたー、という店員さんの声を背中に店をあとにした。

歩きたびにひらひらと舞うスカート。こついうのもいいかな、と少しだけ思った。何より街の人の視線だって、もう気にしなくて済む。

「グンゼ、靴なんていいよ」

「ああ？そのだっせえビーチサンダルですつといるつもりか」

「だつせえつて言つな、癖毛」

「殺すぞ貧乳」

下らない言い合いをしたのち、結局引つ張られるように店を回った。結局服に始まり靴やらサンダルやら着替えやら、とにかくこれから私が生活していく上で必要な何やかんやを全て買ってもらった。勿論下着は私一人で買いに行ったけど。当然の如く代金は全てゲンゼ持ち。私の住んでた世界とはお金の単位が全く違うから仕方ないとしても何だか申し訳なかった。

気付けばもう夕刻。両手にたくさん荷物を抱えた私とゲンゼはすっかり疲れ果てていた。帰るか。そうだね。なんていう短いやりとりの後、くたくたになった足で港へ戻った。

「お願いだからあんまりスピード出さないでよ……」

「心配しなくても俺だってそんな元気もうねえよ」

溜め息混じりに言った言葉を信じてボートの後ろに乗った。行きと同じように物凄い音をたてながら機体は浮いた。ゲンゼが器用にハンドルを動かせば海の上を走り出す。潮の匂いが混じった風を受け、思わず瞳を閉じた。穏やかで広い海をこの小さく不思議なボードが飛ぶ。次に目を開ければ、地平線の向こうが夕日で真っ赤に染まっていた。

「綺麗だね……」

「あ？」

何が、と聞くグンゼに何でもないと思える私。変な奴だと笑われたのでアンタがね、と言いつ返しておいた。

「ねーグンゼ」

「何だよ」

「殺し屋って大変？」

「まあな」

ふいに後ろを振り返った。先ほどまで荷物両手に歩き回っていたあの大きな島が、今では米粒くらいに見えた。

「ねー」

「今度は何だよ」

「えーと」

「早く言え」

「その、ありがとね」

「……おう」

機体は少しだけスピード上げ、風を切って走りつづけた。

第4話：戦場で、泣いた

この世界に来て一週間が過ぎた。相変わらずハチャメチャなメンバーと毎日楽しく、時には第二次世界大戦並みの喧嘩も交えながら過ごしている。

不思議なことに、初めはどうなることかと思ったこの世界も慣れれば何てことない、あまり私のいた世界と変わらなかった。勿論元の世界の家族や友達に会いたいという気持ちは相変わらずだけど、こっちの世界で暮らすのもいいかな、と思ってしまふ時があるのも本音。

「鬼大ー、お腹すいたよー」

「さっきつまみ食いでたでしょ。あんただんだけ食うんですか」

呆れながら今日も鬼大はみんなの朝ご飯を作る。こいつのピンクエプロンにもいい加減慣れてきた。

朝の居間にはみんなが集合する。新聞を読んだりテレビを見たり鏡で自分の姿をチェックしたりと殺し屋らしからぬ普通の光景。

「うん、今日も俺は美しいな」

「また始まった、ミナミの病気が」

「ほつとけよ、アル。ツツこむのも疲れるぜ」

飛翔にまで言われる始末。ミナミは気にせず鏡に映る自分を見る。前に一度だけミナミの部屋を覗いたことがあったけど、手鏡だけでも5つは置いてあった。どんだけ自分好きなのコイツ。ナルシスト越えてただの痛い人だよ。

そう思いながらミナミをじっと見ていると、何を勘違いしたのか「見とれるのも仕方ない」と呟きはじめた。

「見とれてないよ、呆れてるんだよ」

「黙れバカ女」

「うわー、無表情で言われると更にムカつくよ」

ミナミめ、いつか殺してやる。あ、さすがに殺し屋を殺すのは無理か。それじゃあ、えーと……うん、あいつの部屋の鏡全部割ってやる。

いろいろとミナミへの仕返しを考えていると鬼大がトーストやら目玉焼きやらを持ってきた。全員待つてましたと言わんばかりの勢いで卓袱台に座る。

「鬼大、料理だけではできるもんね。あとはアレだけど」

「アレって何ですか、失礼な人ですね」

すると当然の如く口を挟むメンバー。

「不細工つてことだ、哀れな奴め」

「間違いねえ」

「諦めるよ鬼大」

「黙って家政婦してやがれ」

可哀相な鬼大を庇う奴は一人もいない。こんないじられキャラでも殺し屋だなんて、世間つてよく分かんないな。

あんたら悪魔ですか、と言う鬼大に「お前の顔がな」と返す性格の悪いミナミ。

「レンもだいぶこの暮らしに慣れてきたな」

隣りに座っているアルが、トースト片手に笑顔で言う。その表情が可愛すぎて危うく口の中の物が出そうになった。「う、うん」と片手で口を抑えながら応えればそれを見ていたグンゼが「図太いつて得だな、すぐ馴染めて」と呟いた。悔しいけど凶星だけに言い返せない。

「ねえアル、君は今日も仕事だよな」

「ああ、今日は飛翔とグンゼと一緒にだ」

「ふーん……。私も連れてって」

「え？」

「だから、私も一緒に行ってみたい」

アルは困ったように私を見た。これが他の奴だったらきつと2秒で拒否されるに違いない。優しいアルだからこそ頼んだのだ。

「いや、それは……。危ないし」

「お願い！邪魔しないから！」

別にいいんじゃないかねえのと頭を掻く飛翔に、絶対駄目だの一点張りで相手にしてくれないグンゼ。困ったように頭を捻るアル。迷惑だとは分かっているけど私だってこのアジトにいる以上殺し屋という職業を知ってみたいのだ。今私を動かしているのはただ単純に呑気な好奇心のみ。その先に何かあるのかなんて、バカな私は少しも考えていなかった。

アルに詰め寄りしつこいくらいにお願いする。最初は言葉を濁してばかりのアルだったが、私の本気っぷりに半ば諦めたように溜め息をついた。

「わ、分かったよ……」

「やったあ!」

「但し勝手な行動するなよ、危ないから」

「うん、ありがとう」

完全に浮かれていた。これでまた一步、私もみんなの仲間になれたと思っただのだ。

いつてきます、と機嫌良くアジトを出る。今日も変わらず鬱陶しいくらい照りつける太陽の中、グンゼだけが納得いかないような顔で私を見ていた。

「レンはこれ乗ったことあるよな」

水上バイクの置かれた砂浜に着くとアルが言った。頷くと、じゃあ後ろに乗れよと明るい笑顔で言う。

飛翔とグンゼがもう一台に二人で乗り、私も失礼します、とアルの背中に掴まった。

「相変わらずエンジンの音すごいね」

「怖いかな?」

「うん、ちょっとね」

「大丈夫だ。俺、レンは絶対落とさないから」

なんて出来た子なんだろう、アル。顔も可愛くて性格もいいなんて反則だよ。初乗りだったのに時速200キロで走りやがったグンゼとは大違いだね。

風の強い海の上を快走している時、ふと隣りを走る飛翔とグンゼを見る。飛翔はバカ面丸出しで意味の分からない歌を大声で歌い、グンゼはいつもの眠たそうな目で運転していた。私の視線に気がついたので、前を見たまま言う。

「アルも甘いな、こんな足手まとい連れて来るとは」

「まあまあいいじゃん、グンゼ。レンの事は俺が責任持って守るからよ」

「……」

グンゼは少しも納得しなかった。余計に眉をひそめ、アルを見据えたあと「それが気に食わねえんだよ」とポツリと呟いた。だけどその小さな呟きは飛翔の歌い声と風の音にかき消され、アルの耳には届いていないようだった。

小一時間程で目的地に着いた。見るからに小さな島で、本当に人が住んでるのか疑ってしまうくらい静かだった。この間ゲンゼと買い物に行ったあの街とはえらい違いだ。

地上へ降りてみんなのあとを着いて行く。ここで待ってる、というゲンゼの言うことも聞かずに。

島の奥にはこれまた小さな村があった。よく日本昔話なんかに出てくるような民家がポツポツと立ち並ぶ。相変わらず、人の姿は見えない。あまりの静けさに一瞬身震いした。

「ねえ、今日の仕事って？」

私の質問には誰も答えなかった。ゲンゼは兎に角、いつもはお調子者の飛翔も、優しいアルさえも無表情で村を見渡している。私も仕方なく黙って立っていた。

「……………」

何分そうしていただろう、みんなじつと観察するように辺りを見ている。

最初に口を開いたのは飛翔だった。

「よし、俺ア先に行くぜ」

あーめんどくせえ、と愚痴をこぼしながら飛翔が一人歩き出す。アジトにいる時とは違い、真っ黒なスーツを着ているせいか飛翔の背中がいつもより広く見えた。

「レン、お前は向こうの林に隠れてろ」

村の奥には確かに雑木林があった。真剣な表情の二人に、私は分かったと頷く。仕事が終わったら行くから、とアルがいつもの笑顔で言ってくれた。

「一応これ、持っとけ」

渡されたのはナイフ。銀色の刃がキラリと光った。感じたことのない感触に思わず落としそうになる。

「いれ……」

「まあ必要ないだろうが、一応な」

「……」

ありがと、と短く言っただけで私は走った。民家を何軒も通り過ぎ、逃げように林へ転がり込む。それを確認した二人はそれぞれ違う方向へ歩いて行った。仕事をする為に。

「うわ、本物だ。はは……」

ナイフの柄をぎゅっと握りしめた。生まれて初めて握った、人を傷つける為だけに作られた道具を。

一人になると急に不安になった。ナイフをしっかりと握ったまま、木に寄りかかる。

じつと身を縮めていると、間もなくして飛翔のものであるう高笑いがかげこえてきた。何か壊れたような笑い声の数秒後、かすれたような誰かの悲鳴。それを聞いた瞬間に両腕を鳥肌が走る。耳を塞ぐより先に二人目の悲鳴がかげこえた。三人、四人とその叫び声が続く。切れることはない。中には女の人の声も混ざっていた。そして、子供の泣き声も。

(怖い……)

急いで耳を塞ぎ、目を瞑っても聞こえてくる悲鳴、それに爆発音。逃げ出したくてもどこへ逃げればいいのかも分からない。ただただしやがみ込み、息を殺してじっとしていた。

どれくらいの間が経つただろう。相変わらず近くからは叫び声や爆発音がする。覗いてみる勇氣は、ない。

すると背後で落ち葉を踏む乾いた音が聞こえた。心臓がどくんと大きく跳ねたあと、激しく波打つ。じわりと額に汗が滲んだ。体全体が強ばったまま振り向くことができず、再度ナイフを握り直した。足音がこちらへゆっくり近づく。飛翔？アル？グンゼ？お願いだから三人の誰かであつて。

「お前、この村の人間じゃないだろう」

頭上から降ってきた声は三人の中の誰とも違っていた。低く、敵意のあるしゃがれた声だ。僅かな期待は打ち砕かれ、一瞬間が真っ白になる。

ずっと縮こまってるわけにはいかない、と意を決して振り向いた。

「誰だ、お前」

「……」

村人だろうか、顎髭を生やした四十代くらいの男だ。怪我をしたのか、右脚を引きずっており、そこから血がポタポタと滴り落ちていた。

私はとっさに立ち上がる。逃げようと一步を踏み出したその瞬間、背中を突き飛ばされて思いつきり前へ転けてしまった。世界が反転したような感覚を味わったあと、すかさずのしかかる男の体重。

「…………嫌だ！」

「お前もあの殺し屋共の仲間だろう」

「……………」

「お前らが俺の家族を……………」

男はうつ伏せで倒れた私の体を無理矢理こちらへ向けた。その時、男の目から涙が零れ落ちるのを確かに見た。その冷たい涙は私の頬に静かに落ちた。

男の両手が私の首にかかる。ぎゅっと瞼を閉じて、もう駄目だと諦めかけた心とは裏腹に私の両手は自然と前へ伸びていた。ナイフを握った、その両手が。

「…………え」

嫌な感覚が両手から全身へ伝わる。生温い何か液体のようなものが拳を伝ってきたのを感じ目を開ければ、喉にざつくりとナイフが刺さった男の姿。

喉が潰れるくらい、兎に角叫んだ。言葉にならない自分でも耳を塞ぎたくなる程の叫び。それでもしないと得体の知らない何かに吞

み込まれてしまう気がしたのだ。

倒れかかってきた男の下敷きになり、必死で這いずり出ると男は仰向けになった。見開かれた目は何の光もなく、何も映していない。

「嫌だ……嘘」

怖くて怖くてどうしようもなく、これを引き抜いたら男は生き返ってくれるんじゃないかという有り得ない考えが頭をよぎり、思わず刺さったナイフを引き抜いた。その瞬間顔に飛び散る真っ赤な血。当然男が生き返るはずもなく、今度は血を止めようとその傷口を両手で抑えた。

「お願い、止まって、止まってよう……」

生温い液体の感触。心臓が今までにないくらい早い。

涙が溢れて止まらなかった。ごめんなさいごめんなさい、と何度呟いても男が生き返ることはない。

私が殺したんだ。私が奪ったんだ、この人の人生を。

「レン？」

名前を呼ばれて振り向くとそこには同じく返り血を浴びたアルが立っていた。彼の‘仕事’は終わったのだろう。酷い鉄の臭いが鼻をかすめた。

男の死体と酷い泣き顔の私を見て、何かを悟ったように「ああ、
と呟くアル。

「どうしよう。私、人を殺しちゃったよ……」

「レン、大丈夫だから」

アルは私の腕を掴み立ち上がらせると、無理矢理男から引き離した。情けなく震える私の肩をぎゅっと抑え、目を閉じると言う。

「どうしよう……どうしよう……」

「レン、いいから目を閉じて」

「私、殺すつもりなんて……」

「目を閉じろって言うてるだろ！」

初めて聞くアルの怒鳴り声。それでも止まらない涙に、相変わらず震える私の体。自分の両手を見ると、血で真っ赤に染まっていた。ぐにやりと視界が歪み、同時に吐き気に襲われた。

ふと視界に入ってきた、アルの体の返り血も酷く恐ろしいものに見え、思わず後退りをする。

「……嫌、寄らないで」

「おい、どろしたんだよ」

「私のことも、」

「……」

「そっやって殺すの？」

第5話：優しい殺し屋

殺し屋、という職業を私は解っていなかった。

「……大丈夫だよ。帰ろう」

差し伸べてくるアルの手を反射的に振り払う。彼は驚いた表情をしたあと、悲しそうに視線をそらした。

違う。違うんだよ、アル。嫌いだとかそういうことじゃなくて、ただ怖いのだ。

「何やってんだア」

足音もなく、突然現れた飛翔に身体をびくりと震わせる。彼はアルの近くまで来ると眉をひそめて私を見た。いや、正確には私にっいている返り血を見たのだ。そして後ろに転がっている死体を確認すると、口角を釣り上げた。初めて会った時と同じく虚ろで鋭い眼をした飛翔に、私は心の底から恐怖を覚えた。

「テメエが殺ったのか……」

「あ……」

「やるじゃねエか」

飛翔はそう言って、自分の指についていた血をペロリと舐める。やめるよ、とアルが止めに入るものの一度スイッチの入ってしまった飛翔はその言葉に耳を貸そうとしない。私に近づき血で汚れた手を伸ばしてきた。恐怖で動けず、歯がカタカタと音を立てて情けなく震える。

「これでお前も、俺たちと同じだなア」

飛翔の指先が私の頬に触れた瞬間、突然横から人影が現れた。あ、と声を漏らすより先にその人物は飛翔のこめかみ目掛けて拳を振り上げ、そのまま殴った。それはそれはかなりの力で。何せ殴られた飛翔は不意打ちとはいえ数メートル吹っ飛んだのだから。

殴った人物、グンゼは軽く息を切らしながら倒れた飛翔を見下ろす。そして少し離れた所にいるアルを睨んだ。

「何ポケットとしてんだ阿呆。今俺が止めてなかったらレンは死んでたぞ」

「……」
「……」

アルが申し訳無さそうに私を見る。その視線に耐えきれず、思わ

ず目を逸らした。

飛翔の身体がぴくりと動く。彼はゆっくりと身体を起こすと何事もなかったかのように座り込んだ。その表情がいつもの飛翔であることにホッと胸を撫で下ろす。

「あれ？何で俺倒れて……え、レン？お前服にすげー血ついてんぞ」
「……」

何も言わない私に、更に困ったように飛翔は辺りを見渡す。

「さっきお前、レンのこと殺そうとしたんだよ」

「は？俺が？うわ、やべー……また記憶飛んでるわア。悪いな、レンちゃんよオ」

ヘラヘラと笑ったあと、飛翔は立ち上がって背筋を伸ばす。「今日もよく働いたぜ」と満足そうに言うと、改めて私たちを見た。

「……帰らねエの、お前ら」

「いせ、」

行くこう、とアルは静かに言い飛翔と共に歩き出す。私はその後ろ

をトポトポと着いて行った。グンゼはわざと歩く速度を私に合わせ、隣にいてくれた。

帰る途中、誰も口を開かなかった。あの飛翔でさえ空気を読んだのか、時折わざとらしく口笛を吹くものの、それ以上は何も言わない。

アジトに到着し、お帰りなさいと言う鬼大に返事もせず一直線に洗面所へ向かった。血のついた顔と手を洗う。皮膚が真っ赤になるくらい、ひたすら洗い続けた。

そして男の死体を思い出しては、吐いた。

「どうかしたんですか、レンさん」

慌てて駆けつけてきた鬼大の声。深く呼吸をしたあと、何でもないと呟いた。

タオルを掴み乱暴に拭いたあと、鬼大の顔も見ないまま洗面所を出る。

「疲れたから、寝るね」

私は廊下の一番奥の部屋へ入った。一週間前は卑猥な本で埋め尽くされていたこの部屋も、今じゃすっかり私使用の普通の部屋。服を脱ぎ捨てゴミ箱に投げる。引き出しから適当に着替えを取り出し力なく袖を通した。

「私が……殺したんだ」

幾ら血を洗っても服を着替えても、耳に残る何人もの悲鳴。手は刺した時のあの感触を覚えてる。男の死に顔が目に焼き付いて離れない。顔に散った生ぬるい液体。最期に流した男の冷たい涙も、全てがしっかりと記憶に刻まれている。

「ごめんなさい……」

謝っても時間は戻らない。死んだ人間は二度と生き返らないのだ。涙なんか流したって、誰にも届かない。

私はベッドにもたれかかり、混乱した頭でどれほどの時間を過ごしただろう。窓から見える外はすっかり暗くなり、同時に虫の音が聞こえてきていた。

いつもなら夕飯の時間。だけど食べる気力がない。動く力もない。再びベッドに顔をうずめた時、ドアが三回ノックされた。

「レン、ちょっといいか」

アルの声だった。落ち着いた、いつもの声。無視を決め込んだ私は返事をしなかった。にもかかわらず鍵のついていないドアは勝手に開かれる。入ってきたのはやはりアル。

「話がしたいんだ」

そう言って私の正面に腰を下ろした。

暫くの沈黙のあと、アルは言う。

「レンは悪くないよ。あんな所に一人にした俺が悪かった。本当なら連れてくるべきじゃなかったのに甘かったよ……ごめん」

「違うよ……私が勝手に着いて行ったただだよ」

「怖かっただろ。もう絶対あんな目に合わせないから……だから」

「……」

「普通に接してくれるか？」

私は何も答えなかった。アルが悪いとかじゃない。悪いのは10パーセント私だ。アルが謝る理由はない。だけど、

「……アルは、平気？」

「え？」

「人を殺して……アルは平気なの？」

今度はアルが黙り込んだ。言葉を探しているようで、困ったように下を向く。

「私は嫌、だよ。何でみんな平気で、人を殺せるの？」

「それは……」

少しの沈黙を見送ったあと、アルは顔を上げた。私の目を真っ直ぐに見てはつきりと言っ。

「それが俺たちの生きる手段だから。それしか生きる方法を持ってない」

「……」

「それがどんなに悪いことでも」

私は何も言えなかった。これ以上彼らの生き方を否定するなんて出来なかった。だって私は、アルの過去を知らない。アルだけじゃ

なく他のみんなの過去も。

どうしたらいいのか分からずに、私はただただ無言で俯いた。

「俺も、初めて人を殺した日は眠れなかった」

「……え」

「14歳の時だよ。殺したのは自分の親だ」

思わず息を飲んだ。十五歳の時の私なんて、高校受験で愚痴を零してたくらい。なのにアルは……。それも親だなんて信じられない。怖いとは思わなかった。だって今のアルはすごく優しくしてくれるのだ。だけど、ショックだった。

「……弟が一人いたんだ。でも両親に殺された。殺らなきゃきっと俺が殺られてた」

「嘘……」

「本当だよ。その日から人殺しを生業にしてずっと一人で生きてきた。このアジトに来たのは16歳。今のボスに声かけられたんだ」

「……」

「いつそ死んでしまいたかった。でも死ぬ勇気がなかった。だから変わりに人を殺したんだ。誰かを殺す度に、自分も死んだような気分になったよ。今じゃもう、何も感じないけど」

アルの瞳から涙が頬を一筋伝った。それを見た私は気付けば彼を抱きしめていた。たとえ偽善者だと言われても、抱きしめずにはいられなかったのだ。何も感じない、なんて嘘に決まってる。人を殺すのは辛いよ。いくら馴れたって言っても、胸の奥がチクチクして痛い筈だよ。その涙を見れば解る。

アルは驚いたように「え？」と声を漏らす。私は構わず、先程よりも強く抱きしめた。

「ごめんね、アル」

「何で、レンが謝ってんだよ」

「私何も知らないのにあんな事言って。これが君たちの生き方なんだよね」

「……うん」

アルは静かに頷いた。

私はアルの体から離れると、改めて彼の顔を見る。驚く程綺麗な目をしている。愛嬌のある笑顔も優しい心もアルなんだ。殺し屋でも、アルはアルなんだ。私かとやかく言うことじゃない。だってここは別世界で、アルは私なんかとは全く違う人生を歩んでるわけだから、だからそれが君たちの生き方だって言うなら私はもう、何も言わないよ。

「殺し屋なんて、俺みたいな境遇の奴ばっかだよ。ここにいるメンバーだってもっと辛い過去を持つてる。あの飛翔が仕事の時だけ人

格を変えるのだって、そうでもしないと人を殺せないからだ。誰も好き好んでこの仕事を選んではいけない」

「……」

「根本的な所では、みんな同じだよ。誰もそんなこと口には出さないけど……」

みんなそれぞれ背負ってるものが違うんだ。強いな……本当に。

「もう二度と、レンにはあんな事させない。約束する」

アルは笑顔でそう言った。

第6話：クローゼットの奥の過去

目覚めは最悪だった。夢にあの男が出てきて私を睨みつけたのだ。寝汗をびっしょりとかいてしまったせいで髪の毛が顔に貼り付く。鏡を覗くと頬には涙の跡が残っていた。服も汗で濡れてしまい、着替えようと体を起こした時、急にドアが開いた。

「よう」

「……何がようだ、コラ癩毛」

ノックもせずに入ってくるとは相変わらずの無神経。しかしグンゼは悪びれるどころか「ああん？」とデカい態度で私を睨みつけ、堂々とベッドまで寄ってきた。

私を見ると、途端に顔をしかめた。

「汗だくじゃねえか、気持ち悪いな」

「ほっとけよ、平気で部屋に入ってくるあんたの方が気持ち悪いよ」

いつもならもつと言い返してくるグンゼだが、なぜかそれ以上は言わなかった。ズボンのポケットに両手をつ込み、偉そうに上から私の顔をじつと見る。何を言い出すかと思えば出てきたのは「無

理すんなよ」という至極意外な言葉。

「お前は俺たちと違って弱虫なんだからよ」

「なにそれ」

「昨日も夕飯来なかったろ、他の奴らも気にしてたぞ。あんま心配かけんなよ」

「……うん」

「だからその顔を止めろって。俺が苛めてるみてえじゃねえか」

めんどくせえな、と舌打ちをするグンゼ。いきなり部屋に来て説教、拳げ句めんどくせえとは何事だ、こいつ。昨日のアルとは正反対だなとつくづく思った。

「言っちゃあ何だがよ、お前のいた世界とここは似てるらしいが全然違うんだぜ。ここには殺し屋なんて俺たち以外にも沢山いる。それにあの時殺らなきゃお前が殺られてた、そうだろ。いちいち傷つけてめそめそ泣いてたらキリねえぞ」

「……」

「強くなれよ、レン」

「……そうだね」

言い方はキツイけど、これがグンゼなりの優しさなんだと分かっていた。

私は甘えてたんだ、みんな優しいから。この世界が私の住んでいた世界と似てるから。だから、ずっとここで暮らすのもいいかもなんていう安易な考えを持ってしまっていた。私には生きる覚悟が、足りなかったんだよ。ここは別世界、グンゼの言葉でそのことを気付かされた。

「…ありがとう」

「おう、分かったらとっと起きて朝飯食いに来い」

「ねえ、ひとつ聞いていい？」

「いいけど。なんだよ」

グンゼを見た。濃い灰色の髪の毛。起きたばかりなのか後ろ髪が跳ねている。目は少し垂れ目で、四六時中眠たそう。背は私よりも少し高いくらい。グンゼだって、普通の少年なんだ。

「初めて人を殺した時、君は泣いた？」

「……」

グンゼの表情が少しだけ悲しみの色を見せた瞬間、私は聞いたことを後悔した。だけど遅い、聞いてしまったものは仕方ないのだ。彼はまるで感情を隠すかのように、いつものだるそうな表情に戻った。そしてくるりと背中を向けて言ったのだ。

「忘れたよ、そんな昔のこと」

「おはよー」

居間へ来た私をみんなは快く迎えてくれた。昨日夕飯時に行かなかったただけなのに何だか凄く久しぶりに感じる。

卓袱台の上にはしっかりと私の分の朝食が用意されていた。それが嬉しくてついにやけてしまう。するとすかさず、気持ち悪い女だとミナミに嫌みを言われた。うっせえよナルシスト。

「ようようレンちゃん、元気になったかア」

「うん、もう大丈夫だよ飛翔。なにさり気なく腰に手回してんの」

「にしても昨日は悪かったなア。何せスイッチ入ったら記憶飛んじまうからよオ」

「うん、分かったからその手を退けろって言ってるんだろ変態」

相変わらずお調子者の飛翔をやんわり（？）とかわして食卓につく。アルはまだ食べている途中らしく、私を見ると柔らかく微笑んだ。口の中に含んだトーストのせいでハムスターのような顔になっているのがまた可愛い。もしかしてわざとか、確信犯か。

「あれ、グンゼは？」

「さあ、部屋じゃない？」

「朝から仕事のはずなのにな」

ブツブツ言いながらアルは残りのトーストをつまんだ。

アルとグンゼは何かと相性がいらしくよく一緒に仕事をすることが多いらしい。協調性のある鬼大はその都度違うメンバーと仕事を組み、逆に自我の強い飛翔やミナミなんかは個人での仕事が殆どだと言う。それも全てボスが決めるみたいなのだが私はまだそのボスとやらに会ったことがない。

それをみんなに言つと、「まあそのうち会えるんじゃない」的な曖昧な返事を頂いた。

「今日はみんな朝から仕事？」

「あ、うん……」

アルが申し訳なさそうに言葉を濁したのは、きっと私をアジトに一人で残すことを気にしてるんだろう。心配させてはいけないといつもより明るく努めた。

「私なら全然平気。何なら夕飯作って待ってようか？」

「え、レン料理できるのか？」

「当たり前じゃん」

嘘だ、料理なんて滅多にしない。卵焼きが限界だ。けど私の言葉を鵜呑みにしたアルは嬉しそうに目を輝かせた。うん、完全に信じてるね、可哀想に。

「じゃあ楽しみにしてるからな！」

「え、」

「レンちゃんの手料理ねエ。いい加減鬼大の料理にも飽きてきたしなア」

「ちょっと、」

「不味かったら殺すぞ小娘」

「ミナミまで……」

やばいよ、完全に殿方たち信じてらっしやる。今更嘘だって言ったら確実殺されるだろうな……ナルシストに。

その後勢いにまかせて本当に夕飯を作る約束をしてしまった。まあ、どうにかなるよね。多分。

只今朝10時。

みんな仕事で誰もいなくなった居間は無駄に広く感じた。ぼつんと一人ソファーに座ったままぐるりと見回す。安っぽい箱型テレビも使い込んだ卓袱台も、長い間みんながここで暮らしている証拠だ。突然私が転がり込んできて、みんなの中では何か変わったのだろうか。

(何だかな……)

話し相手がないのはキツイ。この島で今私は一人っきりなのだ。家族はおるか、知り合いなんてこの島には……いや、この世界には

一人だっっていない。

そう思うと急に寂しくなってきた。ふと胸の中にざわついた感情が浮かぶ。何かで気を紛らわさないと。

……あ。そうだ。

「みんなのお部屋チエック」

悪趣味だと言っなら言えはいい、どうせ誰もいないんだと私の中の悪魔が囁いた。秘密のことをするというのはなぜこんなにもワクワクするのだろうか。

すぐさまソファから飛び降り、みんなの部屋へと向かった。

まずは一番手前の鬼大の部屋へ、そう思ってドアノブを回すが残念ながら鍵がかかっていた。くそ、家政婦のくせに用心深い。

仕方なく諦め次のドアへ。飛翔の部屋だ。

「……………うわ」

散乱するエロ本にエロビデオ。わぁ、お、とよくテレビなんかであるようなピンクの音が聞こえてきそうだ。ガサ入れする気にもなれず、終了。

気を取り直して次はグンゼの部屋。この部屋は一度だけ入ったことがある。そつとドアを開けると相変わらず几帳面に整理されたシンプルな部屋だった。面白くない。けどどういう奴に限っているいろと隠しているもの、そう思った私は遠慮無くガサ入れを始めた。

だけど本棚の裏にも、ベッドの下にもエロ本は隠されていない。その代わりクローゼットの中には大量の拳銃やナイフが隠されていた。うん、リアルに嫌だよ。

「つまんないの」

　　クローゼットを閉めようとしたその時、上から何かが落ちてきた。私の足元に落下したそれを拾い上げる。一枚の写真だった。写真に写っているのはゲンゼとアル、そして2人に挟まれるようにして立っている一人の女の人。

「誰だろう……」

　　この組織に女はいないはず。なのに間違いなくこの写真はアジトの前で撮られている。私はじつと写真を見つめた。両側の2人よりも幾分か背が低く、小顔で、白い肌に栗色のショートカットがよく似合う。薄い唇を少しだけ上げて笑う写真の女は、つい見とれてしまう程綺麗だった。右側にいるアルはまさに無邪気という言葉がぴったりな笑顔で、彼女の肩に手を置いている。反対側のゲンゼは……

「……」

　　笑っていた。それはアルのような目一杯の笑顔ではないけれど、

どこか嬉しそうに、薄く笑顔を浮かべていた。いつもふてぶてしい態度で私に暴言を吐くグンゼとは到底違い、何ていうか……まさに美少年？

こういう表情もするんだ、と感心した反面なぜか少しだけ切なかった。

そして2人共、今より少し幼い感じがする。

「グンゼもいつもこんな風に笑ってたら格好良いのに、勿体無いなあ……」

ははは、と笑いながら何気なく写真の裏を見る。真っ白な裏には、女の人の丁寧な文字で、小さくメッセージが書いてあった。

《貴方を忘れない。

愛を込めて》

どくん、と胸が高鳴った。絶対に見てはいけないものを見た気がして私は急いで写真をクローゼットの奥に隠しあ。扉を閉めて一目散に部屋を出る。

何故だろう……あのメッセージを見た瞬間、ひどく泣きたい気持ちになったのは。

あれはきつと、グンゼかアルどちらかへのメッセージ。でもグンゼの部屋にあるってことは……。

廊下を出た時もう一度グンゼの部屋を振り返った。あのグンゼが
たった一枚の写真をクローゼットの奥なんか隠しているなんてか
なり意外だった。

ふと写真の中のある笑顔を思い出す。グンゼはあの女の人のこと
が好きだったんだろうか。

あいつも……そういう想いするんだ。

「へえ……」

(勝手に見てごめんね、グンゼ)

第7話：はじめまして、ボスさん

誰もいない居間は相変わらずしんとしていた。喉が渴いたわけじゃないのに水を一杯飲み、息をつく。どうせやることもないのだから一眠りして起きたら夕飯でも作ってみようかなと思い、ごろんとソファーに寝転んだ。

目を瞑り、静かな空間の中で呼吸を整える。寒くもなく、暑くもない丁度良い気温が私を心地よい眠りへと導いてくれた。

次第に意識が離れていく。眠りに落ちようとするまさにその瞬間、どこかで聞いたことのある男の声がして意識を戻した。おい、と呼ぶその声は低く怒っている。

驚いて目を開けた。その瞬間頬に生温い液体がぼたぼたと落ちてきた。悲鳴をあげるより先に目に飛び込んできたのは、私が生まれて初めて殺したあの男。首からとめどなく流れ落ちる血も怒りに満ちた敵意ある男の表情も全てがああの時と同じ。目の前の男と記憶がぴったりと一致し、音もなく涙が零れた。全身から汗が吹き出し触れられているわけでもないのに身体がピクリともしない。

「あ………」

血に濡れた男の手が首元へと伸びてくる。振り払うこともできず、思わず目を瞑った。夢だ夢だと呪文のように唱えながら男が消えてくれるのをじっと待つ。

「おい、女」

首元へと伸びてきていた手は予想外に頬に触れた。声も先ほどのようなかすれたものとは違うはつきりした声。

不思議に思いながらも、閉じていた目をゆっくり開ければそこには私が殺した男ではなく、全く知らない男がいた。もちろん、落ちてきていたはずの血も消えている。

夢か幻覚か、しばらく停止した私の思考を余所に知らない男はいきなり私の上に馬乗りになった。

「あの、」

「ん？」

「なにしてるの……ですか」

「いや、とりあえずキスでもと」

いやいやいやいやおかしいよね、何言ってるのこの人。っていうかあの男は？……やっぱり、夢？

男のサラサラした真っ黒な髪の毛が頬にかかる。瞳まで深い深い黒色をしている、その目を見ているとつい引き込まれそうになった。男の顔が近づく。何とか死守しようと必死で唇を手で隠したが呆気なく押さえつけられた。

「ちょ、あの、やめて」

「大丈夫大丈夫」

「いやいや、あの、」

「いいからいいから」

「いや何ひとつ良くないよ。まじで退いて下さいお願いします。ちよーミラクルスーパーダイナマイト素敵なお兄さん」

「……無表情で言う台詞ではないよね」

男がひるんだその瞬間、私はカツと目を見開きグーで思いつきり男の大事な部分を殴ってやった。

声にならない声をあげながら男は私から床へ転がり落ちる。股間を押さえてのた打ち回るその姿は哀れで仕方ない。写真にでもおさめたい気分だったが生憎カメラなど持ち合わせていなかった。それにしてこの間抜けなクソ野郎はどこのごいつだ。

「もう一発入れところかな」

「やめ……許し……死ぬ！」

「許して欲しかったら切腹のひとつでもしてみろよ」

「それ許す気ないよね、確実に」

男が痛みに耐えている間、私はソファ―に座ってその様子をじっと見ていた。

初対面に馬乗りになられて挙げ句キスまで奪われることなんてそうない。当然ながら初対面の男の股間を潰したのも初めてだ。我ながらよくやったな、としみじみ思う。

「……まだじんじんするんだけど」

「そのまま使い物にならなくなればいいのに」

「……」

だいぶ痛みが収まったのか、男はふいに立ち上がった。さてと、と私の目の前に仁王立ちになると懐から素早く取り出した光り物の刃先を私の額にピタリと合わせた。

「え、」

「お前は誰だ」

「……」

まさかの形勢逆転。鋭い刃は私の額にピタリと合わせられていて、微動だにしない。そして先ほどまで床を転げ回っていた男とは思えない程余裕たつぷりの表情。何て言うか……目が本気だ。

真っ黒な背広姿の男にナイフを突きつけられている私。気の利い

た言葉なんてひとつも思い浮かばず金魚のように口をパクパクさせていると、「ご、よん、さん、にい、と男の口が秒数を刻み始めた。ヤバい、私の命あと2秒弱。

「いや、あの、怪しい者じゃないんだよ！確かに股間殴ったのは悪かったけど。ほんと私居候みたいなもんで……っっていうかあんたこそ誰？」

「俺か？」

少し考えるように男の視線が私からそらされた。けれども向けられた刃が緩むことはない。ゴクリと生唾を飲み込む。

「俺はアレだ」

「アレ？」

「ボス。殺し屋の」

「……」

ああ、アンタが噂の……。部下からの信用が全くないボス様でしたか。

その瞬間私の中の何かが崩れた。殺し屋組織のボスなんてもつとゴツくてデカくて坊主で、何より寡黙な男を想像していたのだ。だけれど目の前の男はいかにもちゃらんぼらんばんな風貌。ビシッと着こな

した真つ黒なスーツが泣いている。同じく真つ黒な髪の毛は無造作に立てられ、何より若い。どこにでもいそうなただの若造だ。それでもグンゼやアルよりは大人なんだろうけど。

「ボス……」

「うん、そう」

「この人がエロ本大量に隠し持ってて尚且つ部下になめられまくってる殺し屋組織のボスかあ……」

「おいコラ、考えてることがそのままストレートに口に出てるぞ」

「すみません……」

男の刃が更に額を押しした。いてて、血出るよ、血。嫁入り前の娘の額に傷つけるつもりだよコイツ。

「まあいい」

そこで男はやっとナイフを懐にしまった。ふう、と私も息を吐き冷や汗を拭う。男は頭を押さえながら私の隣に腰を降ろした。何だか随分お疲れの様子だ。

目頭を抑えたまま男は言った。

「居候ってどういうこと？ 俺、アイツらから何も聞いてないけど」

「あの、実はですね……」

私は大まかないきさつを話した。

渦に吞まれてこの島についたこと、実は違う世界の人間だと言うこと。グンゼとアルに拾われてこのアジトにお世話になっていること。

ボスは驚くこともなく、さほど興味があるわけでも無さそうな返事をして私を見た。

「その話、俺が信じれる証拠はある？」

「証拠……は、ない」

「……」

「でも本当だよ！みんなが帰ってくれば分かるから……」

必死でそう訴えた。てつきりまたナイフを向けられるかと思っただけ、ボスは「あ、そう」と一言頷く。

「俺がいない間にえらいもん拾ってきたんだな、アイツら」

「人を捨て犬みたいに言わないでよ」

「あ、もしかしてもう誰かとやっちゃったとか」

「死ねよ、セクハラだよ」

「……狂犬だね、こりゃ」

苦笑いしたあと、再びこめかみを押さえた。私の方を見ないまま、
「もう大丈夫？」とよく分からないことを聞く。
何が、と問えば眉間を押さえていた手を私の頭に寄せ、何を考え
ているか分からない無表情で私を見据えた。

「うなされてたよ」

「あ……」

そういえば夢見てたんだっけ。血まみれのあの男の、夢。

「嫌な夢、見ちゃって」

「ふうん、どんな」

「……」

黙っていると、ボスは全てを見透かしたかのような言い方で「殺した奴でも出てきた？」と呟いた。

「何で分かったの……」

「分かるよ、殺し屋だし。人を殺した事のある人間くらいすぐ分かる」

「……そっか」

「怖いよね、そういう夢」

そう言ったボスの表情は、何とも言えず少し寂しそうだった。哀れむように私の頭をポンポンと撫でる。何故かひどく安心した。

「夢に出るのは君が罪の意識を感じてるからだろうね。でも大丈夫だよ、死人は何も語らないし君を呪い殺すこともしない。もし呪いなんてものがあるなら俺はとっくに死んでるよ」

「……」

黙り込んでいると、ボスは更に口を開いた。そして言ったのだ。克服する方法を教えてやると。

「人殺しを、繰り返す」

「え……」

「そしたら怖くなくなるよ」

「……無理だよ」

あんな思いをするのはもう嫌だった。確かに繰り返していけば、ここにいるみんなのように……目の前の男のように恐怖を感じなくなるのかもしれない。だけど心をなくしてまで恐怖から逃れようとは思わない。

そう言つと、ボスはにこりと微笑んだ。いい子だね、と言つて笑つたその表情は殺し屋とは思えない程柔らかいものだった。

しかしその笑顔もすぐに引つ込み、再びソファーに首をもたげる。腹減つた、というので何か作つてあげることにした。いつの間にか夕方近くなつていたし、夕飯を作るとミナミに約束してしまったのだ。

「よし、頑張れ私」

「奥さん奥さん、言ってるそばから包丁こつち向いてるよ。何？材料は俺？」

「やだなあ、冗談だよ……」

気を取り直して台所へ向かう。鬼大が買い置きしてるおかげで材料はたくさんあった。

とりあえずカレーくらいなら作れるかな、と自信満々で冷蔵庫から材料を引っ張り出した。

陽もすっかり落ち、辺りが真つ暗になった頃続々とメンバー達が帰ってきた。みんなくたびれた表情で居間へ入ってきたが、漂うカリーの匂いと意外な人物を見て目を見開いた。

そう、意外な人物とはもちろんボス。背広とネクタイをそこらへんに脱ぎ、ソファーに横たわっているボス、意識はない。そしてその側に寄り添うようにして座る私。

「帰ってたのかよ、ボス！」

最初に声を上げたのはアル。続いて他のメンバーも近づいてくる。しかし寝ているため、ボスから返事はない。

お帰り、と私も引きつった笑顔で出迎えた。やば、冷や汗出てきた。

「ボロボボスガね、昼間帰ってきたんですけどね、ななななんか疲れちゃってたみたいだね、寝ているのですよ」

「うん。とりあえず落ち着け」

飛翔はそう言うのとボスの寝顔を覗き込んだ。異変に気付いた彼は、アレ？と首をひねる。

「泡吹いてね、コレ。何か白目向いてね？」

「そんな事ないよ！ デタラメ言わないでよ！ いらならその目ン玉くり抜くよ！」

「何さり気なく恐ろしいこと言ってるだよ、お前」

「っーか何か隠してるだろ」

「隠してないよ！ 癖毛は黙れよ！」

「んだとコラア！ 癖毛差別かあ？」

「もう相手するのも疲れるよ……」

「うわ、すげえ殺したい」

グンゼといつものように言い合っていると、いつの間にか鬼大が台所へと移動していた。鍋に入ったカレーを発見したようだ。似合わないくらい甲高い声で「レンさんが作ったんですか」と無駄に興奮しながら鍋を持ってきた。

ミナミも感心したように、ほう、と息を漏らす。「カレーか。やるな、小娘」と珍しくお褒めの言葉を頂いた。

「ちょ、駄目だつてそれ……」

何故ならボスが泡を吹いて白目を向いているのはそのカレーを食べたからなのだ。ちなみに私は食べていない。目の前で人が気絶したのを見て食べるバカはいない。

私が止めるのも聞かず、鬼大は嬉しそうにメンバーの数だけ皿を用意した。慣れた様子で取り分けていく。くそ、家政婦め余計なことを。

もついいやと半ば諦め浮かれ気味のメンバー達をただぼーっと見ている。これから地獄に落ちるとも知らずにバカな奴らだよ。

「うまそうじゃん」

一番最初に手をつけたのはアル。その無邪気さが仇になった。スプーンを口に入れたその瞬間、カツと開かれるアルの瞳孔。

「うわ、アルが白目向いてんぞ！」

水だ水だと叫ぶグンゼに素早く動く鬼大。ミナミはあと一歩で口の中に入る予定だったスプーンを静かに皿に戻し、飛翔はソファで寝転んでいるボスをチラリと見て苦笑いを零した。

私はというと既に土下座の態勢に入っている。

「毒殺する気がレン……」

「すみませんでした」

グンゼと鬼大の迅速な処置のおかげで何とか一命を取り留めたアル。

優しい彼はさほど怒らず許してくれた。食べたのが短気なグンゼやネチネチしつこいミナミじゃなくて本当に良かった。

「ボスが倒れてるのもカレーのせいですか」

「左様でございます」

「まあ、それは良いとして……夕飯どうします？」

あ、いいんだ。軽く流されちゃったよボス。夕飯に負けたよボス。するとグンゼとミナミが無言で立ち上がり、倒れているボスに近付く。何をするかと思えば何の迷いもなくボスの懐を探り始めた。

「あつたか？グンゼ」

「ねーなあ……そっちは？」

「いや、あ……」

ミナミが何かを見つけた。取り出したのはボスの財布。なんて部下だよ、こいつら。

「これでみんなが飢え死にしないで済むな」

「そんな真つ直ぐした瞳で言われても……」

やっぱり鬼だよ、ミナミ。

「いいんだよレン、こいつ俺らの給料ろくに払わねえくせに金持ちだから」

「……ふうん」

散々言われてますよ、ボスさん。しかもあのバカの代名詞、飛翔に。

ミナミはどこから取り出したのか銀色に光る流線型の物体を手で持つ。どうやらこの世界にも携帯電話はあるらしい。

何をするかと思えば、彼は出前を取り始めた。

するとソファアールから低い声が。やっとボスが目を覚ましたのだ。

「あれ……帰ってたのか、お前ら」

目をこすりながら体を起こしてメンバーを見る。「よう」「やら」「おう」やら軽く挨拶が飛び交う中、私も何事もなかったかのように笑顔でボスを見た。

ボス自身が何故意識を失っていたのか思い出せないようだ、バカで良かったよ。

あ、とボスが何かに気付く。まさかカレーのこと思い出したのかと一瞬どきりとするがそうじゃなかった。

「何でお前ら仕事帰りなのに私服なんだよ！仕事の際は黒スーツが絶対だろ！守ってるの飛翔だけじゃん！少しは俺の言うこと聞けよ！」

「うるせーな、暑苦しいんだよ黒スーツなんて。すぐシワになるしよお」

「服装くらい自由にさせろ」

「そーだ、給料払え」

うわあ、悲惨だよボス。

何でそんなに黒スーツにこだわるか聞けば、何か格好いいからという頭の悪い答えを頂いた。

言うことを聞かないメンバーに、ボスはソファァーから飛び起きるといかに黒スーツが素晴らしいかを熱弁し始めた。

「黒スーツの美男子達が揃ってたら目立つだろ！何か渋いだろ！モテるだろ！あとアレだ、何かアレだ」

「何ひとつ分かんねえよバカ」

「はいボス、鬼大は美男子ではありません。前言撤回を要求します」

「本人目の前にして何てこと言っんですか、ミナミさん」

「よし俺が悪かった！ 鬼大は例外だあ！」

「……もう辞めたいんですけど、この組織」

うん……私もそれがいいと思うよ、鬼大。

第8話・寝てる時にそ注意しろ

「という事で、やりますか」

「は？」

寿司も食べてお腹もいい感じに張った頃、ボスがドン、と一升瓶を取り出し床に置いた。

この時ばかりは待つてましたと言わんばかりの勢いでみんな準備を進める。どうやらボスはたまにしかアジトに帰って来ない為、帰るたびにみんなで飲み会をするのが定番らしいのだ。仲が良いのやら悪いのやら。いや、何だかんだでいいんだらうな。

「つまみ出せー、つまみ」

「冷蔵庫に酒あつたら、取ってこい鬼大」

「はい、ミナミさん」

みんな楽しそうだ。私も紙コップを渡され、酒を注がれる。真ん中に立つのは勿論ボス。

「えー、本日はわたくしの為にお集まり頂きまして誠に」

「かんぱーい！」

「いえーい！」

「……解雇しようかな、全員」

残念ながらボスの挨拶はみんなのテンションにかき消された。みんなただ酒が飲みたいだけなのだ。

決して強い方じゃないけど私もチョビチョビと口をつける。それにしてもみんなのペースの早いこと。バスケのスタメン選手が試合終了後に飲むスポーツドリンクとほぼ同じペースでガブガブと飲み続けている。

飲み始めてから三十分。どんだけ酒強いんだよ、と思って見るとアルやミナミなんかはもう既に顔が真っ赤になっていた。

そうかと思えばボスと鬼大が二人で日頃の愚痴を零しており、その傍らでは飛翔とグンゼが一気飲みの勝負をしている。ある意味戦場だよ。

すると既に目の座ったミナミが近付いてきた。

「おい小娘、何か芸をして俺を楽しませろ」

「アンタ何王国の何王様？」

「そうだな、例えば鬼大の額をかち割って脳みそを噴水のように…

…」

「話を聞けよ。ていうかそれ既に私じゃなくて鬼大の芸だよ」

すると今度はベロベロに酔いまくった飛翔がにじり寄ってきた。
うわ、酒臭いよ。

「レンちゃんよオ、飲んでるかア」

「ぎゃー！変なところ触んな変態！」

「んだよオ、貧乳がこれ以上小さくなるわけじゃねエだろオ」

「なつてたまるか」

飛翔の頭を一発叩き、フンと背中を向ける。だいたい貧乳貧乳うつせんだよこの組織。そんなに巨乳が好きならお前らの胸筋にシリコン死ぬほど詰め込んでやるから一生それ揉んどけば……ってヤバいよ私も酔ってるかも。

「吐きそう……」

「うわ、アルが危険だぞー」

「きたねーなア、吐くならトイレ行けよ」

「弱いくせに無理して飲むからだろ」

苦しむアルに誰も手を貸そうとしない。何て冷たい奴らだよ。大丈夫？とアルの背中をさする。すると半泣き状態で抱きついてきた。その真つ赤な顔が可愛くて思わず心を奪われそうになった。これ立場逆だよな、普通。

「レン〜気持ち悪い〜」

そう言っすぎてすがりついてくるアル。その時突然誰かの蹴りがアルのわき腹にヒットした。うっ、と吐きそうになったアルは何とか口を手で抑え、最悪のケースは逃れた。

蹴りを入れた犯人、それは組織で一番の暴れん坊將軍、ゲンゼ。アルを睨みつけると「見苦しいんだよ」と一言、空の酒瓶を投げつけた。

「ちょっとひどいよゲンゼ！アルが可哀想だよ！」

「うっせえブス」

「んだとコラ。やんのかハゲ」

「誰がハゲだクソブス。表出るや」

「上等だよ。丸刈りにしてやるから覚悟しろよ」

やっぱり始まるゲンゼとの言い合い。既に苦しむアルはそっこの

こっぴつして時間はあっという間に過ぎていった。

どれくらい時間が経っただろう。いつの間にか外は明るく、窓からは朝の光が差し込んでいた。

むくりと起き上がり居間を見渡す。体がだるくて頭が異様に重い。グンゼと言い合いしてたとこまでは覚えてるんだけどそこから先の記憶がない。

倒れた酒瓶に気絶したように眠る一同。チツ、誰だよイビキうつせえの。ていうか部屋汚い。ソファアの位置ズレてる。つまみもお酒も巻き散らかしてる。鬼大の仕事がまた増えた。

一向に起きる気配のない一同を見て、私も一眠りしようとして再びゴロンと横になる。しかしボスの姿がないことに気付いた。不思議に思った私は再び起き上がる。死体のようにゴロゴロ転がっているみんなの身体をよけながら居間から脱出した。

「ボス……?」

廊下を抜けて玄関のドアを開ける。いつもと同じジャングルが広がるそこには一人、ボスが立っていた。

暑い日差しが私を照らす。上を見ると随分と高い位置まで太陽がのぼっていた。こんな時までボスは黒スーツだ。日光の吸収すごいよね、確実に。

後ろから声をかけると、私がいる事に気づいていたのかゆっくり

振り向くボス。

「起きたのか」

「まあね。何してんの？」

「俺は仕事。また何週間かアジト開けるから、よろしくな」

「……多忙だねえ」

「今日は休んでいってアイツらに伝えといてくれるか」

「うん」

ありがとう、と短く言っただけでボスは背中を向けた。去ろうとするその背中に、私は思わず問いかける。

「私のこと、信じてくれたの？疑ってるんでしょ、居候なんて」

ボスは立ち止まり、ゆっくりこちらを向いた。

「俺は仲間以外は誰も信じないよ、君のことも全然信用してない」

「……」

「でもアイツらが君のこと気に入ってるみたいだから。あんな楽しそうな顔久しぶりに見れたから、だったらまあいいかなって思ってた」

そう言つとまた微笑んだ。何も言わない私に小さく手をふる。

「よろしくね。ひと癖もふた癖もある奴らだけど、助けてやってね。特に……」

「……」

「……ま、いいや」

ボスは今度こそ背中を向けて歩き出した。もう振り向くことはなかった。まるで子供達を残して出稼ぎに行く父親みたいだ。あんな子供ら、私は絶対嫌だけど。

ここがボスの帰る場所なんだ。ここがあるからボスは頑張つて、仕事、できるのか……。

最後の言葉は気になったけど、気にしないことにした。いつかボスが心から私のことを信用してくれた時、話してもらおう。

「もっかい寝よつと」

私は大きな欠伸をひとつこぼし、背伸びをする。太陽を十分に浴びてから、ボスの大事な大事なアジトへ戻って行った。

(飲み会の準備して、みんなで帰ってくるの待ってるからね)

「おい、バカ。押すな」

「悪い、悪い」

「ほんつとバカだなこいつ」

微妙にかかる顔への圧力と耳に入る意味不明な会話で目を覚ました。ぼんやりと映るそこには人影が三つ。思考が追いつかずしばらく薄目を開けたままぼーっとしてしていると、三人の中の誰かが「あ、起きた」と笑い混じりに言った。

「なに………?」

だんだんはつきりしてくる視界。私の顔を覗いていたのは飛翔、アル、ミナミの三人。何してるのかと聞けば三人揃って何でもない、と笑顔で返ってきた。怪しすぎる。

とりあえず身体を起こし、背中を伸ばす。壁にかかっている時計を見るともう夕方だった。随分寝ていたらしい。部屋の中はすっかり片付いて元通り。台所からは美味しそうな匂いが漂っている。き

つと鬼大が夕飯でも作ってるんだろう。

あ、そういえば……

「朝ね、リーダーが仕事行くからまた何週間かアジト開けるって」

「おう、いつものことだ」

そう言うものの飛翔は私と目を合わそうとしない。不思議に思い他の二人に目をやると、やはりそらされる。何なんだ、一体。

「……ま、いいや」

シャワーでも浴びようと思い三人を残して居間を出た。そういえばグンゼの姿がなかった。……部屋かな。

風呂場に入り、ふいに脱衣所にある鏡をしてみる。自分の顔を見た瞬間、血の気が引いた。

「アイツら……」

顔には油性ペンでバカやら貧乳やら鼻毛やらを書かれていた。こんなレベルの低いイタズラをするアイツらの脳みそを一度覗いてみたい。きつとシワひとつないツルツルの脳みそなんだろうけど。

鏡に映った間抜けな顔をしばらく見つめたあと、奥の奥から湧き上がる怒り。

すぐにその場を飛び出し居間へと戻った。勢いよく戸を開ければ、待ってましたと言わんばかりに笑い転げる三人。

「お、やっと鏡見たかア？」

「見たよ、見ましたとも。随分素敵なお顔にしてくれたじゃありませんか」

そう言って相変わらず笑っている三人のみぞおちに一発ずつ蹴りを入れた。うっ、とくぐもった声を漏らしたものの、私の顔を見ると再び笑い出した。

「女の子の顔に落書きなんて信じられないよ！もうお嫁に行けないよ！」

「落ち着けレン、心配しなくても既に手遅れ……」

「黙れよナルシスト」

ミナミの胸ぐらを掴んでメンチを切っていると後ろで戸の開く音がした。「あ、グンゼ」というアルの言葉に反射的に振り向く。

居間に入ってきたグンゼ。目が合った瞬間、彼は不快そうに眉をしかめた。ただでさえ仏頂面なのに。

「新手的嫌がらせか、バカ女」

「何でだよ。明らかに私が被害者だよ」

やっと笑いのおさまった三人。笑いすぎでヒーヒー言いながら、ごめんごめんと謝っている。

グンゼは卓袱台のそばにどっかりと座り、置いてあったお茶を一杯飲んだ。溜め息をつきながらもう一度私を見る。

「油性だよこれ！最低だよこいつら！悪魔だよ！」

「大して変わらねーよ、元がブスなんだから」

「今夜のグンゼの晩御飯、毒でも盛つところかな」

「そんなもんが俺に効くかよ」

そう捨て台詞を吐いてグンゼは再び居間を出た。憎たらしいその背中に舌を突き出し、少し遅れて私も居間から出る。

向かった先はもちろん風呂場。そもそも目的だったシャワーを浴びたいし、何より早くこの忌々しい落書きを落とさなくては。その前に落ちるかな、油性だし……。

服を脱ごうとした時、勢いよく開く扉。

グンゼだった。本当にノックという言葉を知らないのか、この男は。

「覗きは犯罪だよ」

「安心しろ、貧相な胸に興味はない」

「うわー、言っちゃったよそれ」

何の用よ、と聞けばふてぶてしくある物を差し出してきた。

「これ、やる」

「何これ。石鹸？」

「ミナミ専用の洗顔。何か知らんけどすげえ高いやつらしい。あいつ自分にかかる金だけは惜しまねえから」

「……ふーん」

「これだったらその落書きも消えるんじゃないかね？」

ほら、とそう言っつて私の手に洗顔を無理矢理のせる。ゲンゼの意外な行動に戸惑った私はお礼を言うのも忘れ、ただ手の平にかかるずしりとした重みを確かめていた。

「よくあのミナミが貸してくれたね」

「んなわけねーだろ。勝手に部屋から取ってきたんだよ」

「やっぱり」

「使い終わったら見つからねえようにこっそり戻しとけよ」

「うん」

頷いたあとにありがとう、という一言が素直に出せず不自然に流れる沈黙。とにかく何か言わなければと焦って出た言葉が「たまにはいいことするじゃん」という可愛くないものだった。

言った直後、やばいと思ったけど、グンゼは私の皮肉を軽く鼻で笑っただけだった。

「ほんっと可愛くねー」

長風呂すんなよ、と言ってグンゼは風呂場から出た。バタンと扉が小さく音をたてて閉まる。

手のひらの小さな石鹸を無意識に握り、小さな声でお礼を言った。

「……………ありがとうね」

こんな簡単な言葉が、何ですぐに出てこないのかな。

ゲンゼの言った通り、ミナミの高級洗顔は驚く程綺麗に落ちた。それはもう見事ツルツルンのたまご肌。さすがは組織一のナルシスト、ミナミ。美への追求は半端じゃない。

とりあえず洗顔は返さなきゃいけない。早々にスウェットに着替えると、首にタオルをかけ濡れた髪のまま風呂場を飛び出した。

薄暗い廊下は幸い誰もいない。ミナミはきつとまだアルや飛翔と一緒に居間にいるだろうし。

「お、ここだ」

ミナミの部屋は私の部屋の向かい側にある。誰もいないかも一度確認したあと緊張する手を抑え、そつとドアを開けた。

男の部屋とは思えない、小綺麗な部屋だった。一度だけミナミの部屋を覗いた時があつたけど、奥までは見ていなかったのだ。

綺麗に整えられた真っ白なベッドシーツはシワひとつできてない。棚にはよく分からない美容器具がズラリと並べられてあつた。全身鏡以外に手鏡も何個か置いてある。

「何だよこの部屋。男のくせに気持ち悪いな。だいたいナルシストなんだよね、あいつって性格も鬼だし……」

「鬼で悪かったな」

「え、」

背中から伝わる声に血の気が引いた。恐る恐る振り向くとそこには冷たい表情で私を見下ろすミナミが。鬼、鬼だよ。本物の鬼がいるよ。

あまりの迫力に圧された私はすぐさま土下座の態勢に入った。上から私の頭をペシペシと叩きながら怒り混じりの声でミナミが言う。

「人の部屋で何をしてるんだ、何を」

「す、みません……」

「不法侵入は立派な犯罪だぞ、小娘」

「殺し屋って時点であなとも既に犯罪者ですけど」

「……」

「……すみません」

何をしてたんだ、という彼の問いに、私は洗顔を差し出した。その瞬間ミナミの顔色がみるみる変わる。やばい、物凄くやばい。絶対怒ってるよ、これ。

「ほう……命がいらならしいな」

懐からナイフを取り出すミナミ。目が本気だ、本気で殺るつもりだこいつ。

「そ、そもそもあんた達が落書きなんてするからじゃん！」

「知るか」

「うわー……自己中。引くわー」

「……」

「すみません、もうしませんからその光り物しまつて下さい」

その後ひたすら秘技、土下座で何とか命拾いした私。

「次はないと思え、小娘」

「……はい」

やはりただ者じゃない、ミナミ。

第9話：クーラー買うのもひと苦労

「暑い」

「……」

「暑いよ」

「……」

「ねえ、暑」

「次言ったら殺す」

ドスの効いた声でグンゼが言うから、すぐそこまで来ていた言葉を慌てて飲み込んだ。

今この島は常夏、周りはジャングル。にもかかわらず居間にあつたアジト唯一のクーラーが、昨夜アルという名のお茶目なクソバカによつて壊されたのだ。もちろんみんな怒り奮闘。本人曰わくりモコンの電池を変えようとしたら動かなくなり、本体を軽く叩いたらぶっ壊れたそうだ。軽くないよね、確実に。

只今私はこのサウナ状態の居間で非番のグンゼと2人、何をすることもなく暇を持て余している。アルとミナミは朝から仕事、鬼大は港町へ買い出し、飛翔はなぜか一人、朝早くにからアジトを出たようだ。グンゼが言うには女の所らしい。

まあ飛翔はバカだけど確かに顔は整ってるし彼女がいてもおかし

くない。

「飛翔の彼女か、見てみたいなあ」

「彼女じゃねえよ」

「え？」

「アイツは遊び人だからな。島の外に何人も女作って暇になれば出掛けてらあ」

「うわ、最低だよ」

やっぱりホスト面だもんな、アイツ。あんな見事に見た目通りの男初めてみたよ。

グンゼは少し笑ったあと、それでいいんだよと呟いてからソファに寝転んだ。

「殺し屋が特定の女なんか作るもんじゃねえんだ。適当に遊ぶくらいが丁度良いんだよ。女ができたら死ぬのが怖くなる。そうなつちやこの仕事は終わりだ」

「……………」

「相手残して自分一人逝くのも、耐えられねえ」

「……………」

私はその言葉に何も返すことができなかったのは、その時のグンゼがすごく悲しそうな顔をしていたから。

グンゼを見ると、ソファアの上に寝転び、じっと目を閉じ寝る態勢に入っていた。よくこんな暑い部屋で寝れるよ。

「……」

グンゼは今までそうやって生きてきたのかな。大事な人も好きな人も作らずに、自分の感情を殺して。そして多分、これからも。

(……そういえば写真)

いつかグンゼの部屋で見つけた写真の女の人のことを思い出した。可愛くて小さくて笑顔の似合う花のような人だった。グンゼにとつてあの人はどういう人だったんだろう。そしてあの女の人は今、どこにいるのかな。聞いてみたいような……少し怖いような。

そこまで考えた時、急に飛び起きたグンゼに驚いて小さく悲鳴を上げる。寝ていたはずの彼は不機嫌そうに頭を描いたあと、暑いと呟いた。あ、やっぱり暑かったんだ。

「もう我慢ならねえ」

彼は懐から自分の携帯電話を取り出しどこかに電話をかけた。

「おい、もう仕事終わっただろ。クーラー買ってこい」

乱暴な物言いで通話相手に怒鳴りつけるゲンゼ。受話器から漏れる声を聞き、電話の相手がアルだということが分かった。

「ああ？当たり前だろ、テメエが壊したんだから。知るかよ、そんなこと。金ならボスの部屋にある。いいからさっさと戻ってこい」

一方的に言ったあと、電源を切って携帯電話を放り投げた。有無を言わせぬ迫力に私も苦笑いを零す。

「汗ひとつかいてないくせに」

「当たり前だろ。美形は汗かかねえんだよ」

「うわ、自分で言ったよ」

「汗なんてかくのは貧乳でうるさいブスくらいだ」

「それ明らかに私のことだよ、私限定だよ」

「ただいま……」

力なく首をうなだれ、突然居間に入ってきたのはアル。随分早いな、と機嫌良く言うグンゼに苦笑いで返し床にペタリと座り込んだ。仕事を済ませ、太陽がサンサンと照りつける中、急いで帰ってきたんだろう。彼のこめかみを汗が一筋流れる。そして見るからに暑そうなスーツの上着を脱ぎ捨て、ネクタイを緩めながら後ろに倒れた。

「何休んでんだ」

「え？」

クーラー買いに行けよ。その為に帰って来たんだろ」

「……」

グンゼの言葉にブツブツと文句を零しながらも体を起こすアルは、クーラー代を取りに疲れた足取りでボスの部屋へと向かった。

「そういえばボスの部屋ってどこにあるの？」

「廊下の突き当たりに二階へ続く隠し扉がある。物置なんかもある二階の、一番奥がボスの部屋だ」

「まじかよ」

隠し扉なんてまるで忍者屋敷だ。今度行ってみよう、こっそり。数分後、再び居間に戻ってきたアルは両手に碁盤を抱えていた。先ほどとは違ってかわって新しい遊びを見つけた子供のようににんまりと笑う。私もグンゼもその様子に思わず顔をしかめた。

「ボスの部屋にあった」

どん、と重そうなそれを私達の目の前に置く。間違いなく、碁盤。そして箱に入った黒と白の碁石がそれぞれ同じ数ずつ。

「五目並べか、懐かしいな」

「昔はよくやってたのにな」

アルとグンゼの表情が柔らかくなる。グンゼは何かを思い出すように黒の碁石を指で転がした。

「どっした、レン」

ぼーっとしていた私の顔をアルが心配そうに覗き込んできた。慌

てて顔を上げ、何でもないと笑顔を作る。

おかしい。私は思った。碁盤を見た瞬間に妙な違和感を覚えたのだ。本当にここは、別世界なのだろうか。

五目並べも碁盤も、私の世界にちゃんと存在する。それだけじゃない、携帯電話や食べるもの、何もかもが似すぎているのだ。勿論私の世界にないものもある。例えば海面を浮く水上バイク。それに殺し屋なんて職業が表の世界で普通に成り立っているのも私の世界じゃありえない。だけど……いや。

頭の中で答えの見つからない自問自答を繰り返していると、2人の何気ない会話をキャッチした。どうやら五目並べのルールも私の知っているものとはほぼ同じらしい。

「意外に強い鬼大だよな」

「弱いのはお前だったよな、アル」

「いやいや、飛翔よりは強かったって」

「まあ、飛翔に負けたら人間終わりだろ」

「間違いないな」

「あ、あと弱いっついたらルイも……」

「……」

そこまで言って、グンゼはハツとしたように言葉を止めた。なぜかアルまで黙り込む。グンゼは何かを押し殺すように口を閉じると

「何でもない」と小さく呟いた。

ルイ。その名前が出ただけで2人を取り囲む空気agaraりと変わったことに私は戸惑いを隠せなかった。昔を懐かしむ空気は一気に冷たく張り詰めたものになってしまったのだ。

持っていた黒い碁石を箱に戻すグンゼ。アルも腰を上げた。

「クーラー買いに行ってくる」

無理矢理貼り付けた笑顔でアルは言い、静かに居間を出て行った。

「ご、五目並べしない？」

別に何か聞き出したかったわけじゃない。そりゃ聞きたいことが無いと言ったら嘘になるけど、少なくともこのタイミングで聞く勇氣はなかった。聞いても答えてくれないことは分かっていたし、私だって一応それくらいは分かる。ただ気まずい沈黙に耐えられず、とっさに思いついた台詞がこれだっただけ。深い意味なんてないし困らせたりするつもりも、なかったのに。

「お前も暇ならアルと一緒に行って来いよ」

グンゼは私の方を見なかった。

その横顔に、出て行けと言われているようで、胸が痛かった。わけもわからず泣きそうになるのをぐっと抑えて立ち上がる。

「……行ってきます」

「ああ」

居間を出る時、「悪い」とグンゼが小さく呟いた。何が悪いのか、誰に対しての悪い、なのか。私にはよく分からなかったけど、謝るグンゼが悪いわけではないことは何となく分かった。少なくとも、グンゼだけが。私にはまだまだ……知らないことが沢山あるのだ。

アルを追いかけようと、急いで外へ出た。走ろうとしたけど、その必要はなかったようだ。アルはアジトのすぐ前に立っていた。太陽の下、ジャングルに不似合いな黒いズボンと真っ白なシャツを着たのまま。ネクタイをしていない、はだけたシャツのボタン。飛翔といいアルといい、なぜこいつらがスーツを着るとホストになるんだろう。顔か、顔なのか。

私が近づくとアルは少しだけ微笑み、ゆっくりと歩き出した。

「何で私に来るって分かったの？」

「なんとなく。グンゼに行けって言われたんだろ」

「……うん」

「ごめんな、レンにまで気使わせて。グンゼはいい奴だけどさつきはその……何て言うか。俺が悪いんだ、余計な物持ってきたから」

「……」

「帰る頃にはきつといつものグンゼに戻ってるよ」

「……アルはグンゼのこと、よく分かってるんだね」

アルが立ち止まって振り向いた。「なに？」と言えば、私の目をじっと見つめたあと、真剣な顔で問う。

「もしかしてレン、グンゼのこと好きなのか？」

「え、何で？そんなわけないじゃん」

「……」

「やだなあ、私の好きなタイプはもっと優しくて暴言吐かない心の広い人だよ」

「たとえば、アルみたいな」、自分でも呆れるくらいサラリとそう言えば、彼は驚いたように「え、」と目を見開いた後再び背中を向けて歩き出した。何だ何だ、まずいこと言ったのか私。

無言のままジャングルの中を進み、そのまま砂浜をてくてくと歩

く。水上バイク置き場まで来た時、エンジンをかけながらふいにア
ルが口を開いた。

「なあ……レン」

「んー」

「さっきのって、」

「え?」

「……やっぱりいいや」

ふい、と私から目をそらすと、乗れよと短く言った。よく分から
ないけど特に聞き返す理由もない私は素直に頷き後部座席にまたが
る。アルの腰に手を回し、出発しんこーと声を上げた。

「子供かよ」

水上バイクは地面から離れ、ゆっくりと海面を揺れて行った。

着いた島は港町。いつかグンゼと買い物に来た島だ。相変わらず人が多く騒がしい。活気溢れる町中を私とアルが並んで歩く。

「港町なんて久しぶりに来たな。ここは近いし何でもあるから俺達よく来てたんだ」

「へえ」

さすがアルは迷うことなく進んで行く。

途中女の人とすれ違ったびに必ず相手はアルを振り返っていた。やっぱり彼の愛嬌あるルックスは目を惹くのだ。それを本人に伝えると、「グンゼなんかスーツ着て歩いたらもっとすごいぞ」と謙虚に笑った。さすが、よくできた子だよ。

「あ、ちょっとここ寄っていいか？」

アルが一軒の店を指差した。人通りの少ない一角にある店。言っちゃあ何だけどかなり見た目怪しい店だ。古びた建物の外壁には蔦が絡んでるし、映画なんかに出てくる幽霊屋敷のような雰囲気がある。

少しも躊躇することなく店の敷居をまたぐアル。続いて私も店内へ入った。照明は暗く、小さな壊れかけの蛍光灯のみが無造作に天井からぶら下がっている。商品らしきものも何もないそこは、お香

のような匂いが漂っていた。ただあるのは、壁に掛かったよく分からない絵や記号を書いた紙。

木でできたカウンターには、両肩に派手な入れ墨の入った痩せた男が頼杖をついていた。

「いらつしゃい」

口角を釣り上げて笑う男の声は意外に高い。顔馴染みなのか、アルはいつものように笑いながらカウンターに近づいた。

「そろそろ来ると思ってたよ、アル。いいタイミングだ。そっちの可愛らしいお嬢さんは新しい彼女かい？」

「そんなんじゃないよ、早く頼んでた品出してくれ」

男は再びニヤリと笑うと店の奥へ消えた。おかしな男だ、どこを見ていても焦点が合っていないように見えた。俺から離れるな、と低く呟いたあとアルは安心させるように大丈夫だと優しく笑う。私は言われた通りなるべくアルの近くに寄った。間もなくして男が戻ってきた。手にナイフを持っている。刃の部分が複雑な形をした、どちらかと言うと鎌のようなナイフだ。

アルはそれを受け取り、確かめるように重さを確かめた。

「どつだい」

「いいね。手によく馴染む」

「軽いし切れ味は最高。肉にくい込む感触が残らないくらいよく切れる。あんたにピッタリさ」

「いくらだっけ」

「いや、金はいらないよ」

「え？」

「それ」

男は猫背にして上目遣いでアルを見る。骨と皮のような細い腕を伸ばし、アルの左胸に人差し指を立てた。それを振り払うこともせずアルは男をじっと見る。

「アルの心臓でいいよ」

「悪いけど今はまだやれないよ」

「いいさ。時がくれば俺の方から取りに行く」

「あんたに出来るかな」

アルは器用にナイフを折りたたむとズボンのポケットに無造作に入れた。

男は爪を噛みながらチラリと私を見た。何を言うわけでもなくす

ぐに視線をそらしたあと、何事もなかったかのように話題を変える。

「ドン・ホーは元気かい？」

「ああ、相変わらず飛び回ってるよ」

「いいね。アイツはそういう男だ」

クツクツと喉を鳴らして笑う男。何がそんなに面白いのか、嬉しそうに笑っていた。

また来るよ、とアルは言い、私の背中を押して店の出口へと歩いた。

「また、っていつのことだい」

「数ヶ月、あるいは数年後」

男はまた、クツクツと笑った。

「ドン・ホーって誰？」

店を出てすぐに私は聞いてみた。

「ボスのことだよ」

「変な名前」

「いや、本名じゃない。仕事用の仮名だ。他にもスライ、ドラゴン、レッドボム、あとは……」

「幾つ名前持ってるの、あいつ」

「ボスは顔が広いし殺し屋以外にも色んな裏の仕事をしてる。素性を常に隠す為に必要な分だけ名前があるらしい」

「ふーん、じゃあ本名は？」

「昔聞いたけど教えてもらえなかった。ボスの本当の名前は誰も知らないんだ。だからみんなボスって呼んでる」

意外と謎の多い男だ、ボス。

すると、ふと背中に視線を感じ後ろを振り返った。さっきの店の入り口に、カウンターの男が立っていた。私たちを見てニヤニヤと笑う男に気味悪さを覚え、途端にぞくりと全身を鳥肌が走る。

アルが小声でレン、と呼んだ。見るなということだろう、慌てて

前を向き、アルから離れないよう急ぎ足で店を離れた。

角を幾つも曲がって人通りの多い場所に出る。安心した途端に思わず息を吐いた。

「何あの人！怖いよ！気持ち悪いよ！」

物凄い勢いで訴えるとアルは少し困ったように笑う。自分でも気付かないうちに声を荒げていたせいで、道行く人が何人もこちらを見ていた。

「あれは殺し道具を売ってる専門店。あの男自身元は有名な殺人鬼だった。殺した相手の肉を食べてたから食人鬼でもあるな。……そして今でもボスや俺達の命を狙ってる」

食人鬼？ないないないないありえない。何それ意味分かんない、つーか気持ち悪い。

「……大丈夫なの？そんな人の店に行って」

「大丈夫、こっちが隙さえ見せなきゃ。あいつも慎重な男だからさ」

「私隙だらけだったんですけど……」

「だから俺が隣りにいて、レンのこと守ってただろ」

「……」

なるほど、あの時離れるなど言ったのはそういうことだったのか。うわ、やべ。一瞬アルが物凄く素敵に見えてしまった。

当然深い意味はなかったのだろう、アル本人は既に話題からそれ、キヨロキヨロと電気屋を探し始めた。

「レン、疲れてないか？」

「うん、ありがとう」

そっか、と言ったものの、歩幅を合わせてくれるアル。本当に何でこんないい人が殺し屋なんだろうか。公務員や政治家なんていうお偉い職業の人間にもびっくりするくらい汚い人間がいるっていうのに。殺し屋らしからぬアルの振る舞いに少しだけ戸惑いを感じた私だった。

「おう、遅かったなお前ら」

夕方、アジトへ戻るとグンゼがそう言っていて私とアルを迎えた。グ

ンゼだけではなく、ミナミも鬼大もいる。意外にもグンゼは鬼大と五目並べをしていた。

うちわ片手にあぐらをかき、珍しく楽しそうな顔をするグンゼを見るとなぜか安心する。強いと噂の鬼大に負けたようで、チツと舌打ちをひとつした。

待つてましたと言わんばかりにグンゼを押しつけ、今度はミナミが碁盤に向かった。

「次は俺が鬼大と対戦する。さあ勝負だ、不細工鬼大」

「ミナミさん、激辛です……」

その様子を見て私もアルも笑う。良かった、いつもと同じ雰囲気だ。昼間のことはもう、グンゼも気にしていないようだった。そもそもあの偉そうな男が落ち込むなんてらしくないのだ。

「そついえばお前らクーラー買ってきたんだろ」

「そつだ。早く取り付けろ。こつ暑くては美容に悪い」

「どうしたんですか、2人共黙つて」

「……」

思わず顔を合わせる私とアル。

実はあのあと電気屋へ行ったものの、予想以上に高いクーラーに面食らった私たち。ボスの部屋からとってきたお金を見るとギリギリ、もうほんつとギリギリ足りなかった。それでも無理矢理買おうとするアル。「買わなきゃあいつらに殺されるんだ」と青い顔して電気屋の親父の胸ぐらを掴んでいたけど無理なものは、無理。仕方なくこうして戻ってきたのだった。

一応わけは話したけど、勿論納得なんてしていない3人。ダラダラと冷や汗が伝う。やばい、逃げようかな。

刹那、前方から碁石を箱ごと投げつけてくるミナミに湯のみをぶん投げってくるグンゼ。見事に全てアルにヒット。突然の攻撃に抵抗できず、鈍い音を立ててアルは後ろへ倒れた。

「テメエは何の為に掛けたんだコラア！五目並べして暑さ誤魔化してたこっちの身にもなれ！」

「グンゼの言うとおりだ愚か者。誰が本気で五目並べなんかするか。黒でも白でもどっちでもいいわ、こんなもん」

「え、自分普通に楽しんでたんですけど……。お2人も結構楽しそうじゃありませんでした？」

「黙れ、言つな」

どっちだよ。結局楽しかったんだ。

チンピラ代表グンゼが倒れたアルに馬乗りになる。懐から中刀を取り出すと鞘を投げ捨て鈍く光るそれをグンゼの頬にピタリと当てた。

「おうコラ、誰がクーラー壊したか言ってみる」

ドSだよ、确实。

「本当ごめんって！金がなかったから仕方ないだろ！」

「ああん？金がねえなら店の親父ぶつ殺してでも値引きしろよ。テメエ何の為に殺し屋やってんだよ」

少なくとも値引きする為ではないよね。

可哀想なアルを見ながら私は呆然と突っ立っていた。すると今度はグンゼの視線が私を捉える。

「おい、テメエも何無関係みたいな顔してんだよ、レン」

「だからあ、お金が足りなかったんだから仕方ないだろハゲ。いいからその危ない物片付けてよ。いやむしろお前の脳みそが一番危ないよ」

「何だとコラ。電気屋の親父ひとり色仕掛けできねえ幼児体型が。悔しかったら誘惑してクーラーのひとつくらい貢がせてみる、バカ」

「失礼なこと言つなよ！それに幼児体型じゃないよ！くびれだつてあるんだから！」

「よし、俺が確認してやる。逃げ」

「アンタいつか刺されるよ、ほんと」

「なら俺が確認してやる、脱ぐがいい」

「アンタも何便乗してんの、ミナミ」

ぎゃあぎゃああと騒いでいたメンバーだが、クーラーの代わりに花火を買ってきたと言えばピタリとやまった。ほら、と袋詰めになれた大量の花火を取り出し見せると、大人しくなる。好きなのか、花火。

「ねっ、これで遊んで暑さなんか吹き飛ばしちゃうおうよ」

「……別に遊んでやってもいいけど」

素直じゃないグンゼは少しはにかみながら唇を尖らす。え、なに？あんなそんなキャラだっけ？花火に心奪われるようなキャラだっけ？やばい、一瞬可愛いと思ってしまった自分がいる。

「じゃあ外が暗くになったらみんなでやりましょうか」

「そうだな。今頃女にうつつを抜かしている飛翔のバカは放っておいて、俺とグンゼとアル、そしてレン。みんなでやるか」

「ミナミさん、私の名前入ってないんですけど」

やっぱり鬼大は哀れだった。

第10話：線香花火の消える頃

時計が9時丁度を指した。その瞬間、全員が一齐に立ち上がる。アルはライター、鬼大はバケツを抱えている。夕飯も食べて、テレビも見た。待ちに待ったこの時、外は充分すぎるくらい真っ暗だ。

「早く行こうよ！」

「全く花火ごときで、レンはガキだな」

「そういうお前もしっかり花火握り締めてるけどな、ミナミ」

「お前もな、アル」

「ゲンゼさんですよ」

ほんとに馬鹿の集まりだよ。

このまま置いていたら誰が一番花火を楽しみにしていたか、という下らない討論まで始まりそうな勢いだったので首根っこ掴んで外へ出した。

出た瞬間、生温い風が頬を撫でる。真っ暗なジャングルで、椰子の木がザワザワと話し合っていた。

花火は海でやるため、鬼大を先頭に歩き出した私たち。ほとんど何も見えない為に歩くだけで大変だった。そういう時に限って後ろからわざと背中を押して「早く歩け」とせかしてくるゲンゼ。どん

だけSなんだ、この男。

「ちょっとやめてよ」

「テメエが遅いからだろ」

「覚えとけよ、あとで海に突き落としてやる」

「落とし返す」

私たちの口げんかは、ミナミの「お前らいい加減黙れ、殺すぞ」の一言によって終わった。こんな暗闇で襲われたらたまったもんじやない。大人しくしておくのが利口ってやつだ。

ほどなくして砂浜へ着いた。さらっさらの砂浜を思わず走り出し、先頭の鬼大を追い抜いた。

「レンさんは海が好きなんですね」

「うん！」

「夜の海もいいものです」

鬼大が私の斜め後ろに立ち、真っ暗で静かな海を見つめる。遠くまで広がる黒い海はすごく神秘的に見えた。潮の匂いを吸った。

ふと見上げた夜空には、一面に星が広がっていた。夜の海に星空、その完璧な組み合わせに思わず息を飲む。と、同時に胸の奥から熱

いものが込み上げてくるのが分かった。感動、というのだろうか。たとえ世界は違ってても、綺麗なものは綺麗なのだ。それに私の住んでた都会じゃ、こんな濁りのない夜空は見えない。

少し遅れてから、みんなも集まってきた。靴の中に砂が入って気持ち悪いやら、潮風は肌に悪いやら文句を垂れている。全くダラダラダラダラ本当にだらしない奴らだよ。

ミナミが私の隣に来て、自慢の髪の毛をなびかせながら言った。

「万が一、こんな海の中に落ちたりしたら終わりだな」

「そうだね。本当に人生終わるか試しに飛び込んでみてよ、鬼大」

「さわやかな笑顔で恐ろしいこと言わないで下さい、レンさん。普通に死にますから」

「鬼大は既に人生の敗北者だから今更死ぬも生きるもねえだろ」

「アンタまで何言ってるんですか、グンゼさん」

「本当のことだから仕方ないだろ」

「……私帰っていいですかね」

若干病んでいる鬼大は気にせず花火はスタートした。

みんながロケット花火やら色とりどりの花火を手にする中、線香花火を取ろうとしたアルに思わず跳び蹴りを食らわす。

「いきなり何するんだよ！レンっ」

「それはこっちの台詞だよ！花火の中で線香花火は一番最後に持つてくるって相場は決まってるんだよ！」

「知らねーよ、そんなもん！俺は線香花火が好きなんだ！」

「こっちこそアンタの好みなんて知らねーよ！」

「……俺にだけは優しいと思ってたのに、レン」

甘いね。私は誰でも平等に態度がでかいのさ。

「私には厳しいですよね、みなさん……」

ちよ、雰囲気乱すなよ鬼大。空気読めよ。と口々に言い出すみんな。最早何を言っても君はいじられキャラなんだよ、可哀想に。いや、むしろおいしいよ。

すると予告もなしにロケット花火に火をつけるミナミ。しかも何本も同時に。

「ぎゃあ！危ないって！」

「馬鹿かテメエ！」

びゅんびゅん飛び回るロケット花火達に必死で避ける私たち。身体能力の高い殺し屋たちは避けられるからいいとして、私普通の一般人なんですけど。今肩のそこかすったんですけど。普通に笑えないんですけど。

しかもこつちの世界のロケット花火は随分元気が良いようで、びゅんびゅんと加減なしに飛び回っている。

火をつけた張本人であるミナミは「俺の顔に傷ついても困る」と自己中なことを言いながら鬼大を盾に使っていた。

「そつち行つたぞ、アル」

「おつ」

アルは向かってくるロケット花火の前に逃げようともせず真っ直ぐ立つ。片手にはどこで拾ってきたのか、太い木の棒。まさか、

「死ねええ！」

甲子園球児もびつくりの特大ホームラン。木の棒でロケット花火を打ち上げたのだ。最早人間技じゃない。

そうかと思えば今度はグンゼが違うロケット花火を一瞬で蹴り落とした。無残にもロケット花火は砂浜に打ちつけられる。あんたはもう人間技とかいうレベルじゃないよ。どんだけ危険な蹴り持っているの。

「フン。俺様にたてつくなんざ百年早い」

花火相手に何言ってるの。

その後もバツタバツタとロケット花火を倒していく二人。花火と戦う奴ら初めて見たよ。ていうか危ないよ、花火よりもこいつらが危ないよ。

「ちよろいな、グンゼ」

「ああ」

殺し屋もいろいろだ。先ほどまで蹴りを連発していたグンゼの弁慶辺りを見る。ひざ下文のジャージを着ているため、肌が見えた。暗くてよく見えないけど、赤くなっている。当然と言えば当然なんだけど。痛くないのか、本人は平気な顔してアルと笑っている。

「グンゼ」

「ああ？」

ナイフかよ、お前。名前呼んだだけでそんな鋭い返事されたの初めてだよ私。

「すね、火傷してない？」

私だって少しくらいは心配するのだ。赤くなった部分を指差して
そう言えばグンゼは少し複雑そうな顔をしたあと「あー……」と言
葉を濁した。

「いいんだよ、別に。……痛くねえから」

「えー嘘だ。思いつきり火傷してるじゃん。強がりも大概にしなよ」

「はあ？痛くないつつつてんだろ」

「……うつそだあー。変な我慢してないで早く冷やしときなよー」

「うるせえな。お前は俺の保護者か」

バーカ、とグンゼは捨て台詞を吐いて余っている花火を漁りに行
った。私は言い返さずにその背中を見つめる。

「……」

わざと茶化すようにああ言ったのは、痛くないと言ったグンゼが
何かを隠しているように見えたから。グンゼは自分では普段通りに
振る舞ってるつもりだろうけど意外と表に出やすいから、何となく
……分かる。

ミナミと一緒にあって鬼大に花火を向けているグンゼを遠くから
見ているとすごく楽しそう。（鬼大が可哀想なのはともかく）だけ

どその背中にはいろんなものを背負ってるのが時々垣間見える。それが私は、すごく辛いんだ。

「ちょ、やめて下さいよミナミさん」

「いいから黙ってこの花火を食え」

「どんなプレイですか、それ。确实無意味でしょ」

「いいから食えって」

「熱っ！ちょ、待、グンゼさんん！？」

うわぁ……。本当にへビ花火食わそうとしてるよ、あのドSコン
ヅ。

傍らではアルが一人でこっそり線香花火やってるし。あの野郎、最後にやるうって言ったのに。花火奉行は誰だと思ってるのよ、全く。

でもあんまり楽しそうなアルの横顔を見ると怒る気にもなれない。何故なら私もアルと同じく線香花火が一番好きだから。

「私も線香花火しよーっと」

勝手に盛り上がるメンバーを放って、私は線香花火を一本引き抜くと少し離れた、波がギリギリ届かない場所に腰を下ろした。後ろを向けばみんなの楽しそうな笑い声と（鬼大の叫び声と）花火の火

が小さく見える。子供みたいだ、と思わず笑みがこぼれた。

「あ、ライター忘れた」

あーあ、と火のついてない線香花火をじつと見る。

諦めてぺたりとその場に腰を下ろした。規則正しい波の音を聞いてると、初めてこの島に打ち上げられた日を思い出す。あの時は焦ったな……本当に。

「おうおう、姉ちゃん。ひとりで何してんだよ」

突然聞こえた馬鹿っぽい台詞に振り向くと、偉そうに見下ろしてくるグンゼがいた。さっきまで鬼大をいじめてたくせに。

私と目が合うと、馬鹿にしたようにフンと笑う。

「何だよ。振り向いたと思ったらとんだブスだぜ」

「……っさいなあ」

1日何回ブスブス言ったら気が済むんだ、この男。そして何回言われてるんだ、私。

ふん、と目をそらして波へ視線を戻す。グンゼは何をするでもなくその場に立つたままだった。

「ホームシックか？レン」

「そんなんじゃないよ」

「じゃあ何で元気ねえんだよ」

ぼとりと私の横に何かが落ちた。グンゼが投げたそれを拾えば、ライター。私が線香花火を持つてることを知って、わざわざ持つてきてくれたのかな。

少し考えたあと、線香花火に火をつける。少し湿っていてつきにくいけど、何度もやっていたら何とか点いた。

「綺麗だねー……」

ぼーっと玉のような火を見つめると、訳も分からず切なくなってきた。わりかし早くぼとつと火は墮ちる。線香花火はあつという間にただの紐になってしまった。あーあ、とグンゼの声が漏れる。

「……」

去年の夏も家族やら友達やらで花火をした。そして今年は遠く離れた異世界でこうして花火をしている。しかも殺し屋たちと、南の島で。

膝を抱えて顔をうずめた。泣き顔を見られなくなかった。寂しい
と思ってるなんて気付かれなくなかった。

「どっしたんだよ」

「別にいい」

「言えよ」

「グンゼに関係ない」

「……ふーん」

ズキリと胸の奥が痛んだ。心配してくれてるのに関係ないなんて、
私最悪だ。

「レン」

「なに……」

「何かあるなら言えよ。俺が嫌なら、」

「……」

「アルとかでもいいからよ」

「……グンゼ」

グンゼが、珍しく優しい言葉をくれたから、

「……………帰りたよ」

だからつい、弱音なんて吐いちゃったんだ。

私の眩きに、グンゼは何も言わなかった。顔を上げる気力もない私は首をうなだれたまま時が経つのをじっと待つ。

もちろんここでの生活は楽しいよ。不満なんてない。まああえて言うなら最近鬼大の料理が手抜きだとか、グンゼの暴言がムカつくとか、ミナミのナルシストっぷりが鼻につくとかいろいろあるけど、でも毎日楽しいことには変わりない。

でもやっぱり、ふとした時に思い出すのはお母さんや妹や友達の顔。今頃どうしてるんだろう……………。

「……………」

どれくらいの間が経っただろう。ふいに口を開いたグンゼは、落ち着いた声で言った。

「探してやるよ」

「えっ？」

「お前が早く帰れるように、俺たちが方法探してやる」

顔を上げてグンゼを見る。至って真剣なその瞳について引き込まれそうになった。

「だから心配すんな」

「……うん」

ねえグンゼ。確かに私は元の世界に帰りたい。だけどね、この世界も嫌いじゃないよってそう言っただけのも、本音。

「お、そろそろアジト戻るみたいだぞ」

「あ、うん」

見れば花火に飽きたメンバー達がさっさと引き上げて行く。行こう、とグンゼは言った。

うん、と頷いて私も立ち上がった。

花火のあとに残ったこの日の火薬独特の匂いを私はきつと、一生忘れないよ。

「ありがとう……」

「ああ？なんて？」

「だから、ありがとね」

「聞こえてるよ、馬鹿」

「……ムカつく」

第11話：人違いの後の虚しさ

花火のあと、アジトに戻ると消したはずの居間の灯りが窓から漏れていた。

「まさか……泥棒？」

「まじか」

「殺し屋組織に泥棒する馬鹿はいないだろう」

ミナミは呆れながら堂々とドアを開けた。そして玄関に脱ぎ捨てられた靴をほら、と顎で指す。飛翔のものだった。

居間へ行けば、上半身裸で首からタオルをかけた風呂上がりの飛翔がソファでくつろいでいる。金色の濡れた髪はオールバックにされ、益々ホストっぽい。そして鍛え上げられた身体に少しどきりとした。違う、私は変態じゃない、落ち着け私。

「よー、帰ってたのか女つたらし」

アルがニヤニヤしながら手を挙げれば、あっ！ と飛翔はこちらを見る。

「どこ行ってたんだよ、俺をのけ者にして」

拗ねたような顔した飛翔が眉間にシワを寄せる。

花火してたんだ、と答えれば益々悔しそうな顔をした。どうやらこの住人はみんな花火が好きらしい。

ミナミはシャワーを浴びに居間を出た。鬼大はまだ家事が残っているらしく、台所へ。グンゼは疲れたから、という理由で自室にもってしまった。

するとアルが冷蔵庫からビールを取り出してきた。ぷしゅ、と蓋を開けて一口飲んだあと、再び飛翔に向き直る。

「今日はどこの女と遊んでたんだよ」

「一番目の女とこだ。前に会わせたことあるだろ、黒髪の」

「ああ、覚えてるよ。いい女だよな。軽くて誰にでも股開いてそうで、お前にぴつたりだよ」

皮肉混じりのアルの言葉に首を傾げて唸る飛翔。「それがよオ」と、飛翔にしては少し深刻そうな面持ちで呟いた。

私もなんとなく話を聞きながらテレビをつけた。この世界のテレビは殆どが砂嵐しか映らないけど、時々ニュースも映るらしい。

テレビの音が響く中、飛翔の口から溜め息が漏れた。

「ヤツちまっただよなア」

「いつものことだろ」

「いやいや、殺っちゃったのよ」

「ヤツた？」

「違う。殺った」

「……殺した？」

「そうそう、それ」

飛翔の軽い返事に対し、「はぁ!？」と声を荒げたのはアルでなく私。うるせーな、と心底めんどくさそうに耳を塞ぐ飛翔。

「だって……今殺したってアンタ……」

もうテレビなんかそっちのけ。

人が死んだという事実よりも、それを軽く受け止める飛翔にぞくりとした。だって、仮にも彼女でしょ？

アルは缶ビール片手に重い溜め息を吐いた。

「……何でまた。一番気に入ってた女じゃないか」

「……まアな」

「何かあったのか？」

暫く沈黙が流れた。言葉を濁すように唸ったあと、飛翔は溜め息混じりにこう応える。

「殺し屋だ、って初めてちゃんと言ったんだ」

「それで？」

「それでも初めは普通に受け入れて笑ってたんだけどよオ、その後女が入ってくれた飲み物に、毒が入ってた」

飛翔はその時、すごく寂しそうな表情をした。それを見た瞬間、私まで泣きそうになってしまった。

きっと飛翔は信じてたんだ。殺し屋の自分でも受け入れてくれるって。でも……

「俺を殺そうとしやがった。だから殺した。悪いか」

「……」

「3年も付き合った女だぜ。こいつなら他の奴みたいに軽蔑したりしないって思ったんだ。笑うだろ」

自嘲気味に笑ったあと、すぐに無表情になる。

やるよ、アルは短く言い、まだ一口しか飲んでいないビールを飛

翔に渡した。受け取った飛翔は迷うことなくそれを一気に胃の中に収める。

疲れているからなのか、元々そんなに強くないのか、飛翔の頬はすぐに赤くなつた。そして静かに目を閉じ、ゆっくりと体を倒す。あつという間にソファアを占領した。目を閉じたまま、飛翔は蚊の鳴くような声で呟いた。

「ルイに会いてえなあ……」

「……」

その名前を聞いた途端、私はなぜかどきりとした。

横にいるアルを横目で盗み見すると、彼は複雑そうな顔をしたあと「馬鹿だな」と言う。そしてそのまま、黙って居間を出て行ってしまった。

残された私はどうしようかと飛翔を見る。さすがにこの男も上半身裸で寝たら風邪を引いてしまうだろう。何かないかと思渡せば飛翔が脱ぎ捨てた上着があったので、それをかけてあげた。

「どーも……」

腕で目を覆っているのどんな表情をしているかは分からないけど、飛翔はそう言った。「おやすみ」と小さく言って戻ろうとした瞬間、いきなり腕を引っ張られ、バランスを崩して床に膝をついてしまう。

混乱した私は思わず腕を振り払おうと力を入れた。だけどそれよ

りも強い力で押さえつけられ、そしてそのまま抱き締められる。

「ちょっと馬鹿、痛い……」

「ルイ」

「飛翔……？」

「行くなよ、ルイ」

私は『ルイ』じゃない……。そう思ったけど、口に出して言えなかった。

今だけでいいから、と哀願するような声を聞くと無理に振り払う力もなくなってしまった。

飛翔の腕の中、自分の心臓がいやに大きく鳴っている。まだ濡れたままの彼の冷たい髪の毛が額に当たる。抵抗することをやめ、どうすることもできずにじっとしていると、次第に規則正しい寝息が聞こえてきた。何だこいつ、寝ぼけてたよ完全に。

酔いのせいかな眠気のせいかな私を『ルイ』だと勘違いしている飛翔。一瞬でもどきりとした自分を恨んだ。馬鹿馬鹿しい、と思い直し何とか飛翔の腕から逃れる。アホ面下げて眠る彼はいつもと変わりなかった。

「おやすみ、飛翔」

きつと、飛翔は殺し屋ということでも今までも沢山の差別や侮蔑の眼差しを受けてきたんだろう。そのたびに傷ついてきたに違いない。

確かに殺し屋なんてやっていい仕事じゃない。ひどい仕事だよ。だけどいつか、アルが言ってた。

『飛翔だってそうだよ。仕事の時だけ人格を変えるのは、そうでもない人と人を殺せないからだ』

その言葉を思い出し、胸の奥が締め付けられるように痛んだ。

飛翔は何故殺し屋を選んだのか、他のみんなだってこの仕事を選んだのには理由があるはず。

人格を変えてまでしなくちゃいけない仕事なのか、私には分からない。だって私は飛翔じゃない。アルでも、グンゼでもない。淋しいけど、自分じゃないことは分からない。多分、一生。

そして何より、みんながいう『ルイ』とは誰なのか。みんなにとってその人は、どういう存在だったんだろう。さっきの飛翔の態度を見ると、ただ者ではない気がする。

「私、本当に何も知らないんだ……」

それを寂しいと思ってしまふ自分が、哀れで可哀相だった。

第12話：恋の季節になりました

朝、目が覚めると隣りに変態がいた。

「うわぁ！」

寝ぼける暇もなく飛び起きる。あんまり驚いたので腰から思いつきり床へ落ちてしまった。

「痛い……」

寝起きの上に無意味なこの痛み。イライラしながらベッドの上で気持ち良さそうに眠る飛翔から布団を剥ぎ取り懇親の力を込めてみぞおちを殴った。

うっと鈍い声を漏らし、変態は目覚める。すかさず金色の髪の毛をがつつり掴み、どういふことか説明してみると迫った。

「よう、レン」

「よう、じゃないよ。何で私の部屋で寝てるんだよ。いい加減にしてよ変態」

「あー。昨日夜中に目エ覚めてよオ、寒くて死にそうだったからこの部屋来て寝たんだよ」

「何ひとつ頷けないよ。何でよりによって私の部屋なんだよ」

「ああ？だつて男と添い寝なんて気持ち悪いだろオ？」

「じゃあ自分の部屋帰りなよ」

「大丈夫だつて。何もしてねエから、多分」

「多分て何だよ、多分て」

「よく寝たわア」と呑気に欠伸なんてしながら首を2、3度鳴らす。この脳天気男が。

ふと昨夜のことを思い出して少し複雑になる。やっぱり飛翔は私と『ルイ』を間違えて抱きしめたことなんて、全く覚えていないよ。うでいつもと何ら変わらない顔で「そんな怒るなよ」とヘラヘラしながら言った。

「怒るに決まってるんだろ脳内ピンク色のド変態が」

「レンってSだよなア」

「相手がアンタだから余計にね」

私は確かにイライラしていた。だけどそれは飛翔が私の部屋に不

法侵入してきたことに対してというよりも昨日のことに対してイラついているのが自分でも分かった。何でだろう、理由はよく分からない。でも平気な顔して目の前で笑う飛翔に、これ以上部屋にいてほしくなかったのだ。

「……もういいから出てっつてよ」

これ以上怒鳴る気力もない私は、飛翔に背中を向けてベッドに浅く腰掛けた。

少しの沈黙を見送り、飛翔が部屋を出て行ってくれるのをじっと待つ。じきに背後で動く気配がした。出て行くのかと思いきや「レン」と低い声で名前を呼ばれる。わざと下を向き、不機嫌な顔をして振り向くと、予想外に近くに寄ってきていた飛翔。

「……近いよ」

「レン」

「なに」

すると飛翔は無言で私の頭に手を置いた。びっくりして目を合わせると瞳をじつとのぞき込まれ、再びそらしてしまった。

何を言っつかと思えば柔らかく笑う飛翔。意外な言葉を口にした。

「昨日は悪かったな、あんなことして」

「……え」

「昨日はあれでも結構参ってたからよオ。お前が行かないでくれて元気出たわ」

「そんなこと言って、すぐ寝てたじゃん」

「まアな」

飛翔は覚えていたのだ。間違えたことも、抱きしめたことも。馬鹿っぽく笑いながら「ありがとな」と言う。別にいいよ、と素っ気なく答えた私だったけど、嬉しかった。

「ねえ飛翔」

「あ？」

「ルイって、好きな人？」

「え、」

当たり。確実に動揺している飛翔を見て自然と笑みが零れた。口では否定したものの、無意味に首をかいたり目を泳がせたりと分かりやすいことこの上ない。第一あんな切羽詰まった声聞いたら、誰だって分かる。

「ルイはそんなんじゃないやねエよ……あいつは俺たちにとって特別って
いうか何ていうか」

「ふーん」

「まあ、今更話すことじゃねエよ」

私はそれ以上聞かなかった。聞いてはいけないことだって世の中
にはあるのだ。……気になるけど。

「この未確認歩行物体が。恥を知れ」

「……すみません」

飛翔と共に居間へ行くと、ミナミが土下座をしている鬼大の頭に
足を乗せているというスリリングな光景を目にした。なに、なんの
プレイ？朝からただけ気持ち悪いことしてんの、コイツら。す
るとソファアに腰かけ脚を組んでいたゲンゼが私を見て片手を挙げ
た。

「お、やっと起きたかブス」

「アンタも朝一でその挨拶かよ。しかも爽やかな笑顔だな、オイ。ていうかどうしたの？この状況」

「ああ、こいつら？」

聞けば朝食中、鬼大が手を滑らせ味噌汁をこぼし、それがミナミの服にダイレクトにかかってしまったらしいのだ。それだけで土下座って……脳みそレベルが6歳で止まってるよ。

「俺の服を汚すなど笑止千万。どうやら命がいらならしい」

言いながら銃を取り出すミナミ。グンゼも飛翔も誰も止めようとしないので慌てて間に入った。朝から死体なんて見せられたらたまったもんじゃないよ。トラウマだよ、引きこもるよ。

「ストロップ！落ち着きなよミナミ！」

「何だレン、邪魔をするな」

「味噌汁かかってもアンタは男前だから大丈夫だよ！」

「分かりきったことを言うな小娘。しかしここでこの馬鹿をちゃんと躡らないといつか飼い主に噛み付くようになるかもしれんだろ」

「もはや何の話をしてるんだよ。完璧犬扱いだよ」

「というわけで今から躑をする」

「だから待つてつて！銃で躑する奴いないよ！普通に死ぬよね！」

「鬼大の体は頑丈だから連射しても死なん」

「どんだけ丈夫だよ。逆に引くよ。そんな人間いないよ」

「こいつの場合永遠の眠りにつくだけだから大丈夫だ」

「だから死んでるよそれ。普通だよ。みんなそうなるよ」

カチャリと銃を構えるミナミの背中にローキックを食らわせ何とか止めた。命拾いした鬼大は何度も私にお礼を言う。

機嫌を損ねたミナミは鬼大をひと睨みするとグンゼの隣りにドカッとお尻をおろした。とりあえず平穩の訪れた居間。

鬼大はミナミの機嫌を取る為に台所へ行き、「ケーキ食べますか」とお皿に乗ったショートケーキを持ってきた。しかし……

「あ、」

何てことだろう。ミナミの目の前でカーペットに躑いた鬼大。持っていたケーキがミナミの顔面にヒットしたのは言うまでもない。この豚ゴリラ（鬼大のこと）が。せっかく私がミナミを止めてやったのに全部バーだよ。しかも顔面ケーキってコントかよ。ドリフか

よ。ネタ古いよ。何年前にタイムスリップしてんだよ。

「……」

「あああ……すみませんミナミさん……」

カラツカラに乾いた声で鬼大は呟く。顔が真っ青だ。

一方ミナミは顔にかぶさったケーキを拭うわけでもなく、ただ無言で鬼大を見ていた。それが余計に恐ろしい。

隣りに座っていたグンゼは呑気に「きたねーな」と顔を歪めた。

ゆっくりと顔のケーキを指に取るミナミ。しばらくそれを見つめたあと、再び鬼大に向いた。

「君いい加減にしないと僕もそろそろ限界なんだけど切れちゃってもいいかな」という意味の言葉を最上級に汚い言い方で言うとミナミは立ち上がった。

「死刑だ」

「ぎゃああああ！」

鬼大がピクリとも動かなくなるのに五分もかからなかった。爽やかな朝に似合わずデンジャラスな光景。鬼大を全力でフルボッコにしたミナミは布巾でケーキを丁寧に拭い、満足したように紅茶を飲む。

一方鬼大は居間の真ん中でうつぶせになって倒れていた。すると飛翔が歯磨きをしながら倒れた鬼大に近づく。

「おいミナミイ。このデカいのどうするよオ」

「太陽が爆発する時まで海に沈めておけ」

やっぱり鬼だ、ミナミ。

「けどよオ、おかしくねえか？鬼大がミス連発するなんてよオ」

「確かにそうだね」

いつもつざいくらい几帳面で真面目な鬼大だ。そして組織一慎重な男だ。ミナミを怒らせればどれだけ怖いかも一番よく分かっている。そんな鬼大が二度もミスをするだろうか。

「そついや鬼大のやつ最近何やっても上の空って感じだったな」

グンゼまでそう言った。うん、これは確実に何かあるよ。

私は意識のない鬼大の胸ぐらを掴んで無理やり起こす。2、3度容赦ないビンタを繰り返すと目を開けた。その顔の弱々しいこと。

「あ……レンさん」

「ねえ鬼大。何か悩みでもあるの？相談に乗るよ」

「胸ぐら掴まれたまま言われても……」

鬼大は私の手を離れもぞもぞと座り直す。ミナミに殴られ腫れた顔が何とも痛々しい。首をうなだれてふう、と溜め息を吐いた。苦
労人の表情だ。うーん……なんというか

「……原因ミナミじゃない？」

「馬鹿言うな小娘。俺を悪者にする気か」

「自業自得だよ」

「黙れ貧乳。俺の美しさに嫉妬して……」

「もういいよバカ」

私は再び鬼大に向き直る。どうしたの？と言えば飛翔も私の後ろ

から「どうしたんだよ」と問いかけた。

鬼大は少し困ったような顔をしたが、グンゼの「言え、殺すぞ」の一言で口を開いた。どういう相談の乗り方だよお前。

「あの、実はですね……」

「うんうん」

「この前港町へ買い出しに行った時、公園の前を通ったら……」

「なんだ、今度はどこの子供にカツアゲされたんだ」

「今度は、って何ですかミナミさん。そんなわけないでしょう」

殺し屋が子供にカツアゲされてたまるか。

溜め息をつき、気を取り直して再び説明を始める鬼大。みんな興味津々で鬼大を見つめる。

「いや実はですね、その公園で女の人が男三人にしつこく絡まれていたんで助けてあげたんですよ」

「偉いじゃん鬼大」

「やるな。俺なら確実無視してるぜ」

うん、あんたはそうだろうね、グンゼ。

「助けたあとに女の人が笑顔でお礼言ってくれたんです。その人がまた美人で……」

「つまりそれって、恋？」

「……はい」

その瞬間、ミナミが何か企むように腹黒く笑ったのを私は見逃さなかった。

彼は鬼大の肩に手を置き、屈託のない爽やかな笑顔で言う。

「安心しろ鬼大、協力してやるぞ」

「ミナミさん……？」

珍しく優しいミナミに驚く鬼大。しかしすぐに笑顔になり、それはもう心の底から

「ありがとうございます」と頭を下げた。

喜ぶ鬼大に頷くミナミ。私たち三人は分かっていた。絶対ミナミの奴、邪魔する気だ。そうとしか考えられない。だってあのミナミだよ。優しいわけがないもの。

バカな鬼大は気付いていない。「可哀想に……」と私たち三人はそつと俯いた。次のミナミの言葉を聞くまでは。

「任せておけ、俺たちに」

「……は？」

『俺たち』？

第13話：ベッタベタ大作戦

居間で作戦会議が始まった。いかにしてその相手を鬼大に向けさせるか。

すると飛翔が頭をかきながら不機嫌そうに言った。

「だいたいなア絡まれた女を助けて好きになるなんてベタすぎんだよ、ベッタベタなんだよ。綿菓子食べたあとの指よりベタベタだぞタコが。その上美人だと？どこのガキの妄想だコラア。んなうまい話あるわけねエだる気持ち悪いなテメエはよオ。しかも何でそれが鬼大なんだよ。何で俺じゃねエんだよオ。俺にも出会いくれよオオオ！」

「落ち着いてよ飛翔くん。鬼大くん既にだいぶダメージ受けてるから。あと後半若干僻み入ってるから」

随分な言われようだ、鬼大。軽くへこんだ彼は「私なんて綿菓子以下ですよね」と意味不明なネガティブ発言をしていた。

そんな悩める鬼大を余所に、ミナミが飛翔に耳打ちをする。

「あまりキツイ事を言うな。これで鬼大が諦めてしまったらどうするんだ」

「あ？それならそれでいいじゃねエか」

「馬鹿が。それじゃあフラれる様が見られなくなるだろう」

「……ほんと鬼畜だな、お前」

やっぱりね。幸か不幸か、2人の会話は鬼大の耳に届いていないようだ。早く気付いて鬼大。あんた今悪魔に心臓握られてるよ。

「私はどうすればいいんでしょう……」

「うーん……」

腕を組んだままじっと考えること数分。するとそれまで黙っていたグンゼが口を開いた。

「要するにその女に鬼大のいいところ見せればいいんだろ」

「確かに。鬼大のいいところか……料理がうまい」

「家政婦の才能がある」

「何でも言うことをきく」

「存在がネタ」

「……」

ちよつと涙目の鬼大。

それにも関わらず容赦なく話を広げていく。もはや楽しんでる。

「弁当作って持ってけばいいんじゃないの？」

「いや、いきなりキモイよ」

「『何でもします』って言ったら下僕くらいにはしてくれるんじゃないの？」

「そんな歪んだ関係見たくないよ」

「いつそ一発芸でもすれば」

「确实スベるよ」

「本当に協力する気ありますか、あなた達」

ねえよ。

「じゃあさ、いつそ誰かが不良役してその女の人に絡めばいいんじゃない？それでもう一回鬼大がそれを助けたら『え……運命じゃん、ウチら』的な展開にならない？もうよくない、それで」

「ぶつちやけレン、めんどくさくなってるだろ」

「ああ、うん。……で？」

「即答かよ」

だって何言っても鬼大ネガティブなんだもん。何かイライラするんだもん。ぶっちゃけ人の恋愛とかどうでもいいんだもん。むしろ私だって彼氏欲しいんだもん。

みんなもめんどくさいのか、言い出しっぺのミナミですら『それでいいんじゃない？』的な返事をして爪を研ぎ出した。

「……じゃあ誰か不良役したい人」

「ミナミでいいだろ」

「断る。キャラじゃない。飛翔やれ」

「何で俺なんだよ」

「顔がソレっぽい」

「……ドレ？」

取りあえず不良役一人決定。するとふいにゲンゼと視線が合う。彼はやばいというようにすぐ目をそらした。逃げようだったってそうはいかないよ。

「はい、グンゼも不良役ね」

「ああ？寝言は寝て言え。殺すぞブス」

「あんた適役だよ」

着々と役が決まる中、玄関の方でドアの開く音がした。アルが仕事から帰ってきたのだろう、居間の扉がガラツと開いた。

「……………何やってるんだ？」

居間の中央に集まってあれやこれやと話し合う私たちを見て顔をしかめた。

「あ、三人目の不良役が帰ってきたぞ」

「本当だ、不良役だ」

「ふ、不良役？」

四の五の言わせずアルも不良役に決定。これで役者は全て揃った。アルに詳しく説明すると、仕事疲れも手伝ってか彼は心底イヤそうにうなだれたあと「寝たい……………」と一言零す。鬼大は申し訳なさそうに頭を下げた。

アルも来て突然やる気満々になったミナミは立ち上がった。

「さあ、早速練習だ。愚民共」

「誰が愚民だコラ」

「……ほんとに大丈夫ですか」

「大丈夫だってば」

2人乗りの水上バイク3台が海の上を爽快に走る。鬼大の後ろにミナミ、アルの後ろにグンゼ、そして飛翔の後ろに私。

基本めんどくさがりやの私達はろくに練習もせずにアジトを出た。勿論向かうは鬼大の意中の彼女がいる港町。ミナミがやけにウキウキしているのは気のせいじゃないはず。

「ちよつと飛翔、真っ直ぐ走ってよ」

前で運転する飛翔の背中にしがみつき、文句を垂れれば隣を走る

アルが恐ろしいことを口にした。

「気を付けるよレン。飛翔無免許だから」

「はあ!？」

「うっせエなア。余計なこと言うなよ、アル」

チツと舌打ちするとハンドルを思いっきり切った。途端に傾く機体。あまりに乱暴な運転に私は思わず叫び声を上げた。飛翔はケラケラと下品に笑う。

「この野郎!ちゃんと運転しろよ!」

「びびってんのかア、レンちゃんよオ」

「無免許が運転すんな!」

「堅いこと言うなよ。実技は完璧なんだからよオ」

自慢気に言ったあと、「筆記はクソだけど……」とポツリと零した。センスがあっても頭が馬鹿じゃどうしようもないね。残念。乙。調子に乗った飛翔はスピードを更に上げ、蛇行運転で海を横断する。それに合わせて私の悲鳴も更に大きくなる。あっという間に他のメンバーが見えなくなった。

「ストップストップ！止まれっつってんだろ！チンピラー！」

「……どつちが」

「無免許男ー！殺されるー！」

「大丈夫、まだ俺スイッチ入ってねエから」

「入ってたまるか」

帰りは絶対飛翔以外の後ろに乗ろうと決めた私だった。

港町についた私たちは水上バイクを止め、地面に足をつけた。飛翔のふざけた運転のせいで気持ち悪い。

「大丈夫か、レン」

「ありがとう……」

うなだれる私の背中をさすりながらアルは言った。他のメンバーはポケットに手を突っ込んだまま、少し離れた所から声をかけてくるがどれも棒読み。心配してる風には見えない。なんて薄情なやつらだよ。

「大丈夫かア」

「お前が言っな……」

飛翔をひと睨みし、背中を伸ばす。相変わらず元気のいい太陽が反射して、海がキラキラと光っているのがよく見えた。いい街だな。こっちです、と緊張した面持ちで鬼大は歩き出した。そのあとを着いていく私たちが、どうもこう暑くてはやる気も出ない。ダラダラとだらしない足取りで鬼大について行った。

「まだかよオー。その公園ってやつはア」

「まだら歩しか歩いてないんですけど」

「見るよあの女すげえ胸。あれにしるよ鬼大」

「それあんたの好みでしょ、グンゼさん」

「俺、腹減ったんだけど」

「昨日の夜冷蔵庫の中のものつまみ食いしてたの知ってるんですよ、アルさん」

「おい鬼大、俺の肌はデリケートなんだ。こっ暑くては日焼けしてしまう」

「はいミナミさん、日傘です」

ミナミには逆らえない鬼大。どこに隠していたのか、真っ黒な日傘を素早くミナミの頭上へ広げた。長年の家政婦気質が祟ったね。殺し屋っていうか、わがままタレントのマネージャーだよ。

店が立ち並び明るい通りを外れ、人気の少ない小道を歩く。古い石段を上ると公園があった。さほど広くもなく、遊具も何もない、ただ赤いベンチがいくつか置かれている。公園というより、広場だった。

青々と生い茂るそこには足を踏み入れず、近くの建物に身を隠す私たち。

「……………いた」

鬼大が小さく呟いたその言葉を聞き逃さなかった。一斉に顔を覗かせるメンバー達の間にも無理矢理入る。

おお、と思わず声を漏らした。公園のベンチに座ってひとり本を読む美人に目を奪われたのだ。赤縁のメガネをかけ、焦げ茶色の長い髪の毛を肩まで垂らし、鼻が高く清楚な感じの美人。晴れた日の午後に公園のベンチで本を読むって……………どんだけ完璧だよ。

彼女を見ながら口々に意見を述べる一同。

「うん、なかなか可愛いな」

「そつでしよう!」

「悪いが、俺アタイプじゃねエなア」

「俺もだ。ああいう大人し目な女は付き合ったら絶対言いたいこと全部溜めるタイプだ。それで勝手に悩んで悩んで悩んだ挙げ句、後々から辛いとか言っつて泣き出すめんどくさいタイプだぜ。別れる時だつて『ずつと我慢してきたのに』とか言いながら……」

「要するにグンゼはそういう女と昔付き合ったことがあるということだな」

グンゼの昔話を途中で区切り、ミナミはニヤリと口角を釣り上げた。それはそれは悪そうな顔で。

「よし、不良共。あの女の純情という名の膜を突き破つてこい」

「目的変わってますけど」

「放送ギリギリだよ、その発言」

とりあえず不良役3人を全体的に見回す。今日は仕事がないのでスーツではない。

「……………」

だつらしいスイェットにパーカーを羽織ったアルは不良というより、女の家転がり込んでいるヒモ男。黒のタンクトップにダボダボのズボンを履き、腕に入った入れ墨を惜しげもなく見せつけているゲンゼはテキ屋の兄ちゃん。趣味の悪いアロハシャツにビーチサンダルというチンピラスタイルは飛翔。こんな統一性のない不良グループがあるか。

「……………ほんとセンスないよ」

「うるせえブス。俺たちは服なんてどうでもいいんだよ」

「普段はスーツだしな」

「はっ、まアいいじゃねエか」

本当にいいんだろうか。鬼大を見ると緊張しているのかずつと地面とにらめっこをしているし、ミナミには「何でもいいから早くしろ」と無責任に言い放たれた。

私は軽く溜め息をつき、もう一度三人を見る。まあいいか。ある意味適役だよ。

「何で俺がこんなこと……………」

「貴重な休みが……」

文句を言いながら3人は美人に近付いて行った。

第14話：美女と野獣は成立しない

「大丈夫かな、あいつらで」

「大丈夫なわけがないだろう」

「……………ですよね」

影から見守るミナミ、鬼大、私の3人。ゲンゼ達は時折後ろをチラチラと振り向きながらもベンチの女の子の方へ歩いて行った。

読書美人の目の前に立ち止まる3人。しかし誰も何も言い出せずにただ呆然と立ち尽くすこと数秒。さすがに女の子も気がついたのか、目の前の変な3人組を見上げると怯えたように肩をすくめた。

「な、なんですか」

「……………別に」

おい、なんか言えよ誰か。別にじゃないよ。用あるよ。ナンパしろよ。このままじゃ、読書最中にチラチラ視界に入ってくるちよつと迷惑な人止まりだよ。

女の子は次第に怯える様子もなく、不思議そうに3人を観察しはじめた。あの役立たず共。

「ちょっと三十三、あの緊張して突っ立ってる奴らどうにかしてよ。殺気送って喝入れるとかさあ」

「えー、殺気とか無理無理。殺し屋じゃあるまいし」

「殺し屋だよ、お前は」

いつも物凄い殺気を込めて鬼大をいじめてるくせに何言ってるんだよコイツも。仕方ないので適当に小石を拾って思いつきりぶん投げてやった。見事頭に命中したのは一番手前にいたアル。彼はすぐはこちらを振り向き、私と目が合う。

(さっさとやれよ。いい加減帰りたいんだよ)

(……)

アルは意を決して女の子の方を見る。飛翔、グンゼとアイコンタクトをとったあと、やっと口を開いた。それに続いてグンゼと飛翔も腹をくくったのか便乗してきた。

「よーよー、ねーちゃん。可愛いじゃん」

「何やってんだよ、こんな所で」

「一発やらせろやコラァ」

え、というような顔をして美人は顔をしかめる。手元の本をパタリと閉じて困ったように辺りを見渡した。残念ながら他に人はいない。

「ねえ、ミナミ。あのセリフどう思う？」

「最低だ。2点だな」

「そうだね」

棒読みの上にあのセリフ。大根役者共が。

すると美人は逃げ出そうと立ち上がる。すかさず腕を掴む飛翔。離して下さい、と少し強気なセリフを言いながら振り払おうとするも飛翔の腕はびくりともしない。

「どこ行くだよ。いいことしようぜ」

「なっ……」

卑猥なんだよ、さっきからお前のセリフ。てかあいつ本気じゃね？俺タイプじゃないとかほざいてた割には結構本気でナンパしてね？隣の2人は呆れたようにぼけっとして突っ立っているにも関わらず、最近失恋した飛翔は意外とノリノリだ。

「これ以上待ってたらアイツ本気で危険なことしそうだよ」

「そうだな。よし、そろそろ行け」

ミナミの合図に鬼大は「は、はい」と裏返った返事をし、公園へ飛び出した。ガツチガチに緊張している。できるのかな、本当に。チンピラ3人に取り囲まれている美人を前にして、鬼大は叫んだ。

「や、やめなさい!」

「……」

「ここでも敬語かよ。お母さんかよ。」

キョトンとする美人。助けにきてくれた鬼大を見ると少しだけ安堵の表情になった。

「嫌がつてるでしょう、その手を離しなさい!」

「んだとコラア」

「テメエ俺らに指図すんのかア? あア?」

「調子乗ってんじゃねえぞ」

鬼大相手だと物凄く演技上手いよ、コイツら。ていうか演技じゃないよね、これ半分本気だよね多分。

鬼大も3人の迫力に一瞬怯む。しかし怯える美人を前にいつものように土下座するわけにはいかない。ずい、と一歩踏み出して近付いて行った。

そして思い切って美人の腕を掴んでいる飛翔の顔を軽く殴る。これは台本通り。あ、でも飛翔ちよつとムカついている。

「つ、強え」

「ち……畜生、覚えてろよ！」

「え、えーつと……あ、あばよ！」

だぁーつと走り去る3人。あばよ、はないよ。あばよ、は。ていうか全員棒読みだし。

戻ってきた3人はひどく疲れた顔をしていた。芝居とは言え、いつもこき使っている鬼大に殴られた飛翔はかなりご立腹。

「後で殺す……」

「まあまあ、見てみようよ」

「ああ、鬼大が振られる瞬間を見逃しては大変だぞ」

わくわくしているミナミ。あとは鬼大次第だ。コッソリ見るといい感じに2人で話している。

「あの……この間も助けて下さいましたよね」

「は、はい」

「ありがとうございます」

にこりと笑った彼女に鬼大ノックアウト。言え、言っただ鬼大！

「あのっ、実はですね、あなたのことが……」

「え？」

「す、すすす」

「す？」

「好き……になりました！」

美人は驚いた顔を見せた。そりゃそうだろう。少しの間鬼大を見上げる。

「そらフラれるぞ、今にフラれるぞ。フれ！さああの身の程知らずの馬鹿にビンタを食らわすんだ！」

「うるせーよミナミ」

ミナミがいやに興奮している中、私たちは息を殺して2人に集中する。鬼大の心臓の音が聞こえてきそうだ。やべ、私まで緊張してるよ。

そして美人は言った。

「私なんかで良ければ……」

「ほ、ほんとですか！」

まじかよ！え、え、オツケー？まじ？あの美人が鬼大なんかに？驚いて言葉を失う私たち。一番ショックを受けているのはもちろん彼。

「なんとということだ……」

そう、ミナミである。100パーセント振られると思っていたんだろう。失恋した鬼大に罵声を浴びせる予定だったんだろう。この世の終わりとも言えるような表情で俯くそのオーラはどす黒い。鬼大の周りはピンク色だというのに。

するとアルが納得したように何度か頷いて言った。

「まあ鬼大は本当に性格いいからな。日頃の行いのおかげだろ。組織一優しい奴だもんな」

「俺は認めん！人間は見た目だ！顔に決まっている！」

「そしてお前は組織一性格悪いな、ミナミ」

「性格なんて後付けでどうにでもなるじゃないか！」

「お前のその性格は死んでも直らないと思うぞ」

幸せそうに話す鬼大と彼女を見て一件落着きといった感じで帰る準備をする一同。どうにもこうにも怒りの収まらないミナミは、帰ろうとする私の首根っこを掴んだ。いててて、指指、首に指食い込んでるから。

なによ、と振り向けば、そこには悪魔の笑みを浮かべる男が。

「そつえばレン、俺の部屋に忍び込んだことあったよな」

「えっ」

「しかも高級洗顔まで勝手に使ったよな」

「っ……」

くそ、今更そんなことをネチネチと。執念深さまで組織一だよ。帰らねーのか、というゲンゼの言葉を無視してミナミは私にあることを命令した。

「えー……嫌だよ。可哀想だし何より面倒だよ」

「そうか……そういえば最近新しくナイフを買ってな。切れ味を試し……」

「やりますよ、やればいいんだろ」

はぁ、と深い溜め息を吐き、私はミナミの命令通り公園へ。仲良く話す2人に近づいた。

先に気が付いたのは鬼大。私を見るその目までテレテレしている。あらあら、鼻の下伸ばしちやって。しかもあ近くで見ると本当に美人だよ。まさに美女と野獣だね。

鬼大が彼女を紹介しようとしたその前に、私は口を開いた。

「……誰」

「レンさん？」

「誰よ、その女。ブスね」

「えっ……」

途端に凍りつく昼下がりの公園。女の子も鬼大も私の放った言葉を聞いてカチンコチンに固まっている。言っておくけど、全てミニの考えた台詞です。決して私の意志じゃありません。私は所詮マリオネットです。

「どうもー、初めまして。鬼大の彼女でーす」

「レ、レンさん?!」

顔が真っ青だ、鬼大。ごめんよ。今度お菓子奢るからね。

信じられない、という風に彼女は鬼大を見た。付き合って数分で信用がた落ちの鬼大。慌てて否定するも効果なし。もう一度言っ、ごめんよ鬼大。

「また浮気？ほんと困った男ね、あなた」

「ななな何を……レンさん……」

「ほら、その焦りがいい証拠だわ」

「いやいやいやいやいや。ないないないない」

疑いの目を向ける彼女に涙目の鬼大。罪悪感が私の頭の中をぐるぐる回る中、第2の刺客がやってきた。その人物は私たち鬼大を見て、こう言った。

「……父ちゃん」

「……」

そりゃ無理だよ……ミナミ。

やれってか。私に母親役をやれってか。

「え、えーっと……お父さんって今……」

彼女はミナミと鬼大を見比べてあたふたしている。当たり前だ、鬼大にも私にもこんなデカい子供がいるわけない。ていうか嫌だ。これはさすがに無理があるよ、ミナミくん……。しかしミナミは相変わらず「父ちゃん」を連呼している。しかも無表情で。こんな気味の悪い子供がいるか。

「ミ、ミナミさん！？何を言ってるんですか！」

「やだなあ父ちゃん。そんな他人行儀に話さないでよ、ねえ母さん」

「え、」

私に振るなよ。無茶振りだよ。でもここで黙ってたら確実にあとで文句を言われるので取り敢えず話を合わせた。

「そ、そうよ鬼大！ミナミは私たちの可愛い子供じゃないっ」

「……」

最早言葉を失って呆然とする鬼大。説明を求める彼女の声も届いていない。

すると彼女は、今度は私たちの方を向いた。

「君が鬼大さんの子供って、本当に……？」

「ああ。そうだが何か」

「でも、どう考えてもこんな大きな子供……」

「これでもまだ十歳だ。文句あるか」

「じ……じゅっさい？」

そんなわけないだろ。最早何を言ってるから分からない。

そんなことも気にせずミナミは彼女に向かって言い放った。

「このダメ親父は遊び人の飲んだくれだ。今すぐ別れろ」

「そんなっ……………」

「……………」

なんだこの設定。

鬼大ももう諦めたのだろう。ミナミに「謝りなよ、父ちゃん」と命令され、彼女に頭を下げていた。どこまで言いなりなんだ、お前。これが何年間もマインドコントロールされてきた結果か。根っからの下僕だよ、可哀想に。

「鬼大さん……………」

「すみませんでした……………」

こうして鬼大の恋は散っていった。

「満足満足」

「そうですね……」

帰りの水上バイクの上。夕暮れの海はほんのりオレンジ色に染まっている。

私はもちろん飛翔の後ろには乗らず、グンゼの後ろへ。本当は安全第一のアルの後ろが良かったんだけど、クソ飛翔が先に乗っていたのだ。

もちろん帰りも鬼大の後ろにはミナミ。鬼大の背中がいつもより暗いのに比べ、ミナミは明るい。

思わず溜め息をついた。いつも雑な扱いをしている鬼大だけど、さすがに今日のは悪いと思った。すると運転しているグンゼが笑い混じりで言う。

「まあ、鬼大らしいっちゃ鬼大らしいけどな。いい暇つぶしになったし」

「でもなあー……せっかかうまくいったのにやっぱり悪いよ」

「ふーん……」

するとグンゼはブレーキをかけた。急に止まった機体は少し前のめりになる。

少し前を走っていた2台もどうしたかかとブレーキをかけた。

「悪い、ちょっと忘れもんしたから先帰っといてくれよ」

「忘れもの？」

「ちよつとな」

ハンドルを思いっきり切り、機体を揺らしてUターンする。突然のことに私もわけがわからずただグンゼの背中にしがみついているだけだった。

みんなの姿が見えなくなった頃、どうしたの、と聞いた。

「たまにはいいことしねえとな」

「え？」

「このままじゃ罪悪感感じたままになんたる」

「もしかして……誤解ときに？」

「ああ」

「でもどこにいるか分かんないよ。公園にはもういないだろうし」

「女の持ってた本に図書館の判が押してあった。この街に図書館はひとつだ。それに返却日は今日」

「何でそんなことまで分かるの？」

「この世界じゃ本は金と同じくらい貴重品だ。特に歴史に関しての本は一般には貸し出しされない。あの女が持ってたのはただの小説だがそれでも貸し出しはその日限りと決まってる。間違いない図書館にはいるだろう」

本が貴重品なんてやっぱり私の世界とは違うんだな、と久しぶりに感じた。理由はグンゼにも分からないらしい。分からないことだらけだと彼は笑った。

そして街唯一の図書館へ行った私たち。小さい図書館だった。誇り臭くて薄暗い空間、それがこの世界の本に対する関心を表しているようだ。

人はあまりいなかったたので、グンゼの読み通りあの美人はすぐに見つかった。しかし、隣りには見知らぬ男がいる。2人は本を読むでもなく、楽しそうに談笑していた。

顔の割れている私たちはコソコソと俯きながら彼女の後ろに座る。前の会話が耳に入ってきた。

「今日ナンパされてさあ。そしたら来たよ、昨日の大男。相変わらず不細工だったけど」

ん……？

美人の口から出たとは到底思えないその台詞に、私とグンゼは同時に顔を見合わせた。すると美人の横にいるいかにも軟派な男が下品に笑う。

「本当かよ。お前のこと待ち伏せしてたんじゃないねえ」

「やめてよ気持ち悪い」

美人は顔を歪めてそう笑った。ふう、と溜め息を吐き、頬杖をうって男を見る。

「告白されたのよね」

「はあ！？……お前それで？」

「死ぬ程貢がせて捨ててやろうと思ったんだけど邪魔が入ってね。ま、いいけど」

「この女……。私は沸々と湧き上がる怒りを抑えるのに必死だった。グンゼを見ると、彼は至って無表情。帰るぞ、と短く言って席を立つ。慌ててそれを追った。」

「ち、ちよつと。このまま帰るなんて悔しいよ。鬼大があんな風に言われてるんだよ」

「鬼大の見る目がなかったって事だろ。ミナミもたまにはいいことするな。本人は気付いてねえけど」

「でも……」

図書館を出る時、最後にもう一度美人の方を振り向いた。意地悪く笑う彼女は、もう美人には見えなかった。隣りの男も益々馬鹿っぽく見える。グンゼの方が100倍男前だし、鬼大の方がずっと優しいんだ。

(くたばれ)

心の中で呟いて、図書館を出た。

「無駄足だったなあ」

呑気に欠伸なんてしながらグンゼは呟く。太陽は沈み、オレンジだった空はすっかり霞んだ暗い色になっていた。

「酒でも買って帰るか」

「酒？」

「あの馬鹿、慰めてやらねえとな」

「……………」

そう言ってグンゼは歩いて行った。その背中を見て思う。普段冷たく見えて実はみんなのことを一番考えているのはグンゼなのかもしれない。

その証拠に彼は「この事は誰にも言つなよ」と鬼大を傷つけないように私に念を押しした。

「何ぼさつとしてんだよ、早く行こつぜ」

「あ、うん」

「ったく、トロいぞブス」

「死ねよ」

前言撤回。やっぱりムカつく。

第15話：美しい少年

「海に行きたい」

「あるだろ、目の前に。暇なら行って来いよ」

「……」

朝のバタバタした時間に言った私の提案は、見事に流された。暇なのは私ひとり。他のみんなはスーツに着替えたり髪の毛をセットしたり朝食を口に詰め込んだりと随分忙しそうだ。

「おい飛翔、俺のネクタイ知らねえ？」

「知らねエ。ちゃんと探したのかよオ」

「ああ……っておい！お前のケツが敷いてんじゃねえかボケ！」

「あ、本当だ」

朝から馬鹿だ、飛翔。

「いい加減にしるよミナミ！いつまで鏡の前占領してんだよ！」

「ちょっと待て、ここの、この前髪の部分がもうちよい……」

「なあ、もう時間ないんだけど！ お前いい加減にしろよ毎朝毎朝うぜーな！」

「落ち着け。ストレスにはとりあえず牛乳を飲め」

相変わらずマイペースなミナミに珍しく癩癩を起こすアル。

一方用意の早いグンゼと鬼大は一足先に黒いスーツをビシッと着こなし、準備万端で立っていた。

「あーあ、私は今日も留守番かー」

「レンさん……」

鬼大が申し訳なさそうに眉を下げた。対象に冷たいグンゼはぶっきらぼうに言い放つ。

「ほっとけ、鬼大。俺達は忙しいんだ」

「ただど組織一優しい男鬼大は、放っておけないと思ったのか、あ
ることを提案した。」

「そうだ、レンさん。お暇ならお使いに行ってくださいませんか？」

「お使い？」

めんどくさい、そう思った。だけど間違いなく私はこの中の誰よりも暇だし、アジトに一人いるよりは気晴らしになるだろう。

少し考えてから、「行く」と短く返事をする。

鬼大はにこりと笑うと、小さなメモ用紙に買い物リストをずらずら並べた。何でも薬の名前らしい。カタカナばかりのその紙は、何かの呪文のように見えた。どれも貴重なものだと言っ。

「これらは全部、『トレード島（貿易の島）』という所にあります。そこまで私たちが送って、帰りはちゃんと迎えに行くので待っていて下さい」

「貿易の島かあ……………」

「大丈夫です、大きな島ですいろいろなものが売ってあって楽しいと思いますよ」

「ふーん……………」

鬼大は笑ってそう言ったので信じることにした。私もこの世界に来てしまったからには、せっかくだからいろいろと見てみたいし、丁度いいや。

そしてかなりの額が入った袋を渡された。ずしりと重いそれを腰のポケットにしまう。

「それじゃあ行きましようか。送ります」

「ありがとう」

他のみんなはとっくにアジトを出て、それぞれの仕事先へ向かっていた。私はバイク置き場まで行くと鬼大の後ろにまたがる。広い背中だ。

「少し飛ばしますよ」

「うんっ」

水上バイクにもだいぶ慣れた。最初は恐くて恐くてたまらなかったのに、今じゃ手離しても余裕で乗れる。今度は運転してみたいなと密かに思った。

1時間ほど海の上を走った頃、トレード島が見えてきた。単調な海の上を1時間も走るのはとてつもなく長い時間を感じた。ただ一度だけ、近くでイルカの大群がハネたのを見た時は、びっくりして落ちそうになってしまったが、それ以上に感動した。イルカって、可愛い。

私が下りたトレード島はかなり大きな島ようだ。見渡せば、山は見えず建物ばかりが並んでいる、いわば大都会。

「それじゃあ、夕方までには迎えに来ます」

「りょうかーい」

そう言うと鬼大は仕事へと急いだ。海を走る彼の姿が見えなくなつてから、私は町へ足を踏み入れる。

正直、驚いた。港町とは比べものにならないくらい人も店も多い。島周辺には大小様々な船が止まっているし、まさに『貿易の島』。

「東京を思い出すなあ……」

東京も騒がしい街だった。まるで過去を懐かしむような言い方に、我ながら少し戸惑う。だけどすぐに考えないようにした。考えたつて、帰れるわけではないのだ。

とりあえず薬屋を探そう、とメモを片手に店を探す。歩いていると、すれ違う人と何度も肩がぶつかった。それ程人が多いのだ。

大きな荷物を運ぶ貿易商から、普通の買い物袋をぶら下げる主婦、私のようにぶらぶらしている若者。とにかくいろんな人がこの街に集まっている。よく分からない大きな建物が立ち並び、いろんな形の店があり、お祭りのように騒がしい街だ。

「……どい」

人が多すぎて薬屋なんて見つけるところじゃない。誰かに聞こうと思っただけどみんな歩くのが早すぎてうまく声をかけられない。く

そ、このままじゃお使いもできないダメ女のレッテルを貼られるところの上なしだよ。

「あの、すみませんお嬢さん」

人の多さに酔った私は、通りを外れて建物の角で一休みしている所だった。

突然後ろから声をかけられ振り向くとサングラスをかけた背の高い男がいた。

道でも聞かれるのかと不安に思いながら返事をすれば、ワンピー―ス越しに当たる腰への鋭い感触。

「え……」

ナイフだ。

心臓がどくと跳ねたあと、一瞬息が止まる。

血の気が引く、とはまさにこの事。

歩け、と男は私に向かって低い声で命令した。震えながら言われた通り歩き始める。通行人に助けを求めようにも、私の体でナイフは見えないし、叫びでもすればたちまち背中をグサリと刺されそう
だ。

ぴたりと後ろについたナイフが緩められることはない。自分を落ち着かせようと、深呼吸を何度かした。

指示に従って角を何度か曲がれば、だんだんと人通りの少ない路地へ。ヤバい、本能的にそう思った。

「あんだ、誰……？」

「教える義務はない」

汚い路地に着くと、今度はナイフを持っていない方の男の左腕が私の首に回る。

そしてナイフを喉に当てられた途端、ひやりとした冷たい感覚に背筋が凍った。それと同時に、嫌な記憶が蘇る。

そうだ。

こんな風に私も喉を刺して、あの男を殺したんだ。

初めて殺してしまった男の顔が瞼の裏に現れ、目の前が揺れた。自分の身に死が迫っている今の状況と、記憶に残るあの男の死に顔が見事に被り、カタカタと全身が震える。

「悪いが」

なぜか、サングラスの男はそこで言葉を止めた。

不思議に思い、顔だけ恐る恐る振り向けば、途端に寄りかかってくる重い身体。なにになになに、何ですか。

「うわっ……」

男の重たい身体は私の背中に寄りかかったあと、ずるりと滑り落ちた。気絶？ いや、違う。

「……」

死んでる。

私はとっさにそう思い、目をそらした。さっきまで私を殺そうとしていた男は何がどうなったのか、突然息絶えていたのだ。

サングラスのおかげで目が見えないのが救いだ。だけでもう一度見る勇気はない。

何で？ 何で急に……

自分が助かった事実よりも、この状況をどうしたらいいのか分からない。

そんな私に、誰かが声をかけてきた。

「お怪我はないですか、お嬢さん」

音もなく現れたのは1人の子供。私が路地裏へ来た時は確かに誰もいなかったのに。

15歳くらいの子だろうか。まだあどけなさの残るその笑顔は中性的で、男なのか女なのか、はつきり分からなかった。

彼、もしくは彼女は彼女は、平然とした様子で死体に近づくと、容赦なくそれを蹴飛ばす。男が死んでいること確認してから、また笑った。

まさか、この子が？

「お怪我はありませんか」

そしてもう一度同じことを聞く。その質問には応えず、「どつちやったの」と質問で返した。

「針です」

にこりと笑ってその子はそう言った。

恐れながらも、男の死体をもう一度見るとなるほど。後頭部に数十本の長めの針が深く刺さっている。

その普通じゃない光景に思わずう、と声を漏らしたものの、吐くまでには至らなかった。

「少し飛ばしただけですよ。僕のは百発百中なんです」

彼は少年のようだ。

なんて綺麗な少年だろう。雪のように真っ白な肌を際立たせるかのような黒髪。小振りな鼻と薄い唇に、猫のような瞳。下手すれば女の私なんかよりよっぽど綺麗。

だけど何の躊躇もなく人を殺した少年を見て少なからず恐怖を覚えた。

助けてくれたのは有り難いけど、と私は踵を返してその場を去ろうとする。すぐに少年の透き通った声が追いかけてきた。

「今日は一人なんですね、お嬢さん。いつもの一緒にいる殺し屋たちはどうしました？」

その言葉を聞いてぴたりと足を止めた。

何で私が殺し屋たちと一緒にいるって知って……？

「危ないですよ、一人で歩いていたら」

「あなた……」

「ねえ、レンさん」

何で名前……！

戸惑いを隠せず言葉を失った私を見て、少年は花のように笑った。

何で私の名前知ってるの？

思った言葉を口にするのが恐くて、私はただ美しい少年を目の前に突っ立っていることしかできなかった。

相変わらず人通りのない路地裏で、静かに生ぬるい風が吹く。

終始笑い顔の少年は動揺する私をじっと見つめたあと何事もなかったかのようにふいっと顔をそむけ、倒れている死体の頭から針を抜き取った。

生々しいその光景に思わず目を背ければ、それに気付いた彼は真面目な顔で謝ってくる。抜き取ったあとの針についた赤黒い血をハンカチで丁寧に拭き取ると、腰に備えていた小さなポーチにしまう。

「何故僕が貴女の名前を知っているか、気になりますか？」

「……そりゃあ」

「知ってますよ。僕だけじゃなく、色々な人間が貴女をね」

「はあ？」

立ち話も何ですから、と少年は近くの喫茶店へ行こうと提案してきた。けど私だっで見知らぬ人殺しについて行く程馬鹿じゃない。首を横に振って「説明して」と強い口調で問いかけた。心臓が飛び出るんじゃないかと思うくらい、うるさい。

少年はゆっくりと口をひらく。

「陽炎かげろうを知ってますよね」

「陽炎……？」

「貴女のいる殺し屋組織の名前ですよ」

あの殺し屋たちに名前なんてものがあつたことにまず驚いた。だつて誰も教えてくれなかつたし。まあ私も聞かなかつただけ。

「世の中には殺し屋組織というものは沢山あります。ですがその中でも陽炎はトップクラスの組織。なのに、構成員数は他の組織より格段に少ないから尚更有名なんです。注目も集まるし、その分敵も増える。知らないんですか？」

「いや、全然……」

……そんなすごかつたのか、あいつら。

「そしてここ最近、陽炎のメンバーらしき人物達と一緒に女が一人港町を歩いているという目撃情報が多数入っていました。今、あの組織に女のメンバーはいないはず。ただ者じゃない、と。」

「……」

「陽炎を潰せばそれだけ評価が高くなる、そう考える組織は多い。だけど一筋縄じゃうまくいかないし、逆に潰されてしまう可能性だって十分にある。そこで陽炎に女がいるということ、貴女を捕まえ利用しようとしているんです」

「私を利用して、陽炎の情報を引き出すってこと……?」

正解、少年はそう言って首を傾げた。

「それも死なない程度に貴女を拷問しながらね」

全く……なんてことだよ。いつの間にか私とんでもないことになってたよ。

「僕はある人に陽炎のメンバー達が仕事の間、貴女の護衛をするよ。頼まりました」

「ある人?」

「貴女たちのボスですよ」

「え、」

ボスって、あの? いいところあるじゃん、ボス。でも『貴女たち』ってというのが引つかかるよ。私別に殺し屋じゃないしね。あくまでただの居候だしね。そう言ったが笑って流された。くそ。

「さあレンさん、行きましようか」

「どこに?」

「この町、案内しますよ」

同じくらいの背丈の少年はそう言って私の手を何の抵抗もなく握った。恐るべし美少年。そのさりげなさで何人の女の子をたぶらかしてきたんだ。お姉さんもういろんな意味でドキドキだよ。

この突然の展開に戸惑っている私とは違い、迷うことなく汚い路地を抜ける少年の背中。実に頼もしい。

「君、名前は?」

「僕はキリオです」

「えーっと、キリオくん」

「はい」

「ちなみに君の職業は」

「殺し屋です」

「……」

まじやだ……。

第16話：陽炎は美少年が嫌い

「危なかった。もう少しで騙されるところだったよ」

ふう、と額の汗を拭い、建物の影に隠れていた。行き交う人を見ながらあの美少年の姿を探したがいない。

ほっと安心して一息つく。日焼け対策で羽織っていたカーディガンも、この暑さに耐えきれずに脱いだ。

そう、私は逃げたのだ。キリオくんの腕を振り解き、私を呼ぶ声も無視して、何も考えず全速力で走った。

「見つけた」

「ひいつ」

建物の影から突然現れたキリオくん。鼻が利くのか、犬か、犬なのか君は。

迷わず再び逃げ出す私を今度は彼も走って追い掛けてくる。どくんどくと動悸が早くなった。助けて助けて助けて！ 針を凶器にした作り笑顔の美少年が私を追い掛けてくるよ！

「遅い」

彼はあっという間に追いつくと私の横に並んだ。そして私の腕を

強引に掴んだ。

何故逃げるんですか、と悲しそうな顔して言うその表情は、よく見ればまだあどけなさの残る普通の少年。

「そりゃ逃げるよ！君殺し屋でしょ！」

町中でそんな台詞を叫んでしまった私を道行く人が不振そうに見える。少年はそんなこと少しも気にしていないのか、またあの作り笑顔に戻った。

「貴女たちと同業者ですよ」

「だから私は殺し屋じゃないって言うてるだろ。居候だよ。話を聞けよ」

「でも……」

「それに、あんな風に簡単に殺して……それに」

そう。キリオくんはあのサングラスの男を笑顔で殺したあと、容赦なく蹴りつけたのだ。普通の人間は……普通の良心を持った人間ならそんなことはできない。それもこんな、私よりも幾分か年下の子供が。

私がそう言っても、キリオくんはよく分からない、というように首を傾げた。

「僕は人を殺すのがお仕事ですから」

「……でももう死んでる人をあんな風に扱うなんて、酷いよ」

「え？ だって死んでるんですよ」

「……」

誰かこの子の保護者連れてきてー。私が正座させて小一時間説教するから。

複雑な顔をしていたんだろう、私の表情を見たキリオくんは笑顔はなかった。急に真剣な顔つきになり、小さく溜め息をつくど抑揚のない声音で呟いた。

「貴女の仲間も同じことをしているんですよ」

「……」

「僕だけが悪者ですか？」

責めるように、そして少し悲しそうにキリオくんは言う。途端、何だか自分がひどく浅はかで何も考えていない人間に思えた。

何も言えず黙っていると、キリオくんは慌てて、ごめんなさいと謝ってくる。そしてまた、笑顔。

「さあ、行きましようか」

「やだよ」

「どうしてですか。一人だと危険です」

「君だって私を狙う殺し屋かもしれないじゃん」

「僕はそんな低俗な真似はしませんよ。それに僕の組織と陽炎のボスさんとは結構前から交流があるんです」

「本当かなあ」

怪しい、怪しいことだらけだ。そもそもこんな虫も殺したこともないような顔で殺し屋を名乗られても全くピンと来ない。美しい少年の殺し屋とは、それはそれで奇妙なだけだ。だから信じない、という思いよりも信じたくない、という思いが強かったのかもしれない。

するとキリオくんは懐から携帯電話を取り出して電話をかけ始めた。

「……もしもし」

無表情で電話の相手と話す彼をじっとみる。あわよくば逃げ出してやろうと考えていたけど、どこか隙のないキリオくん。無防備に電話をしているようで、私への意識は緩んでいない。

「はい、今一緒にいるんです。でも、全部信用してくれないんですよ。それどころか彼女、野犬のような目で僕を睨みつけてるんですけど」

「誰が野犬だ、コラ」

「えー、でも僕じゃっぱり……」

「聞けよ」

キリオくんは電話口に向かってめんどくさそうに何度か頷いたあと、私に渡してきた。

出て下さい、と言われたので仕方なく携帯を耳に近づけると、聞こえてきた馬鹿っぽい声。

「もしもし」

「あ、レンか。俺俺、俺だけど」

「オレオレ詐欺？」

「何だそれ。ボスだよ、ボス」

「分かってるよ。で、どっしりしてよ」

ボスはキリオくんと同じことを説明した。他の殺し屋たちが私を狙っていること、そしてキリオくんのいる組織とは昔から親交があり、害はないこと。

「とにかく、キリオは若いけど頭も切れるし腕は確かだ。守ってもらえ。まあ性格に問題あるけどな……」

「アンタが言うなよ、変態。第一私のこと信用してなかったんじゃないの？」

「してないよ」

「じゃあ何で、」

「君に何かあったら、アイツらが悲しむだろう」

ボスは当たり前のように言った。悲しむ？ みんなが？ そうは思えないけど……（特にミナミ他）

すると電話は一方的に切られた。後に残るのは規則的な電子音のみ。仕方なく携帯をキリオくんに戻すと、信じてもらえましたかと彼得意の笑顔を浮かべて尋ねてきた。

「まあ、一応」

「それは良かった。じゃあ行きましょう」

少年は再び、私の手を握った。

「レンさん、何にしますか」

「……………ミルクティー」

キリオくんは、オレンジジュースと私の分のミルクティーを店員に伝える。かしこまりました、と少し堅そうな店員が頭を下げて去って行った。

ここはとある喫茶店。涼しい店内にはあまり人は居らず、何故か私はこの美少年と文字通りお茶をしている。向かい側に座る彼は何が楽しいのかニコニコと頬を緩める。それが作り笑いだということには分かっていた。

「写真で見るよりずっと可愛いですね」

「写真……………ね」

一体いつそんなものを撮られたのか。グンゼたちと町を歩いている時だろうか。どうであれいい気分はしなかった。

丸い目をした美しい少年。瞳の色は黒かと思っていたけど、よく見たら少し青がかっている、不思議な色だ。まるでモデルのようだと思った。聞けば歳は14だと言う。

「本当に殺し屋？」

「はい。但し、殺し屋専門の殺し屋です」

彼が言うには、キリオくんの属している組織は何でも普通の殺し屋とは違い、悪党のみを相手とした殺し屋組織らしい。いわば必殺仕事人的な。

「世の中には殺し屋に大切な人を殺された人が沢山います。人を騙してお金を奪い、他人の人生を弄ぶ人が沢山います。僕はそういう人達を殺す為に殺し屋をしているんですよ」

蛇の道は蛇、ということか。誇らしげに語るキリオくんを見ると何とも言えない気持ちになった。

「ただどやられたらやり返す、というのがどうも共感できない。結局は喧嘩を繰り返す子供と同じなのだ。」

「レンさんは別世界の方なんですよ。ボスさんに聞きました」

「あ、うん……」

するとキリオくんは途端に目を輝かせた。どんな世界か知りたがっているようで、教えて下さいとせがむ様はまさに少年。どう説明していいか迷っていると、耐えきれなくなったのかキリオくんの口から次々と質問が飛び出してきた。

「人はどんな暮らしをしているんですか？」

「えーっと……いろいろだよ。仕事したり勉強したり。でもこの世界みたいに殺し屋はあんまり……っていうかかなり珍しい」

「殺し屋が珍しい？ 何故です」

「何故って、捕まるからだよ」

「誰にですか？」

「警察とか、国に。人を殺すのは法律に罰せられるんだ」

「法律？」

私が答える度に首を傾げる彼は、本当に何も分かっていないようだった。まずい、法律についてなんてこれ以上質問されてもよく分からない。とりあえず人を殺せば偉い人から罰を与えられること、そして私の国では銃なんかの凶器も持っているだけで罪になる。大ざっぱに説明すればキリオくんは益々眉をひそめた。

「凶器を持たずにどうやって自分の身を守るんですか」

「え、」

「その法律とやらが守ってくれますか」

「いや。そういうのは警察が……つまりそういう市民を守る仕事の人がいるんだよ」

「見ず知らずの他人を守る仕事があるんですか」

「いや、えーと」

「自分の命を他人任せにしているんですか？」

「……」

「自分の大切な人さえも、他人に？」

私には、答えられなかった。

勿論キリオくんは純粹に疑問をぶつけているんだろう。けど何故か、自分の考え方や自分の世界を責められている気がした。信じられない、と目を丸くして私を見るキリオくんから思わず目をそらす。

すると店員がやってきた。事務的な動きでオレンジジュースとミルクティーを私たちの前に置くと、一礼して離れていく。逃げ場を見つけたようにミルクティーを口にしたあと、私は自然と呟いていた。

「それはキリオくんが……殺し屋だからだよ。人を殺すことに抵抗を感じてないから言えるんだよ」

彼は何も言わなかった。というより彼が何かを答えようとする前に、私は再び口を開いていた。

「守ってもらえないと生きていけない人もいるよ。誰かにすがりた
いって思うよ」

「……」

「君だって、守ってくれた人がいるはずだよ」

「僕は……」

キリオくんの顔が曇る。何かを言おうとしたけど、慌てて呑み込んだような印象を受けた。

やっぱりこの世界は、私の世界とは根本的ななにかが違う。どっちが正しいのか、どっちが歪んでいるのか分からないけど。

「……気分を悪くされましたか」

「え？」

「すみません。そんな風に貴女を怒らせるつもりはなかったんです」

やばい、美少年を泣かせてしまう。私は慌てて否定した。こっちこそごめん、と何度も謝る。彼はすぐにまた作り笑いをした。

「やめましようか、こっぴつ話は」

そう言って、オレンジジュースを一口飲んだ。

「何でこのガキがアジトにいるんだ……」

「お邪魔してます、グンゼさん」

只今夕方。そしてここはいつものアジト。お使いを終えた私はキリオくんのアジトまで送ってもらったのだ。アジトにはまだ誰も帰っていないかったし、ここまでしてくれたキリオくんを無碍に帰らすわけにもいかないと思い2人で寛いでいた矢先、グンゼが帰宅した。グンゼはキリオくんを見た瞬間、余計に目つきを悪くする。事もあろうか、キリオくんの胸倉を掴んで睨みつけた。それでも顔色一つ変えずに動じないキリオくんはすごいと思う。

「テメエ人んちに何勝手に上がり込んでんだ」

「やだなあ、僕はボスに頼まれてレンさんの護衛をしていたんですよ。貴方たちが頼りないから」

「ふざけんなクソガキ」

「ふざけてるのはそっちでしょう。レンさんの写真が出回ってますよ。彼女が命を狙われていることも知らずに1人で歩かせるなんて呑気な方々だ」

「何だと……」

胸倉を掴んでいたグンゼの手が外れた。彼は私を見て、大丈夫なのかと柄にもなく心配の言葉をかける。

「大丈夫。キリオくんが守ってくれたからね」

「……そうかよ」

「あれ、グンゼさん？ヤキモチですか」

「殺すぞ女顔」

「僕がそれ気にしてるって知ってるくせに何て陰険な大人だ。モテませんよ」

「腹黒いクソガキよりマシだと思っがな」

「うるせえな、オッサン」

「誰がオッサンだ、誰が」

あれ？ 何かキリオくん急にキヤラ変わったよ。爽やかボーイから腹黒毒舌ボーイになったよ。しかも顔は笑ってるし。

それにしてもグンゼも大人気ないよ。相手は幾つも離れた少年だっというのに。

「やめなよグンゼ。キリオくんが可哀相だよ」

「はっ。可哀相？ こいつが？ 頭おかしいんじゃない、お前」

「お前に言われたくないよ。美少年を虐めるなよバカ」

「俺だって美青年だろうが」

「バカの相手は疲れるよ……」

「ほんと大変ですね、レンさん」

「テメエらちよつとそこ並べ。順番に殴ってくから」

うわぁ、本気でお怒りモードだよ、オッサン。

すると玄関から明るい声が聞こえてきた。どうやら誰か帰ってきたらしい。

居間の戸が開き、最初に現れたアルはキリオくんを見て数秒言葉を無くした。その後ろにはミナミと飛翔がいる。みんな固まっていた。

「お久しぶりです、陽炎のみなさん」

「何でこのガキがアジトに……」

見事にグンゼと同じ反応だよ。あのミナミでさえも心底うんざりしたように俯いた。

すると唯一飛翔だけが笑顔でキリオくんに近づいて行く。

「何だ何だア。相変わらず可愛い顔してんなア、キリオちゃんよオ」

「汚い手で僕に触れるなよ、変態。エロ菌が移るだろ」

「性格も相変わらずだな teme は……」

やっぱりこれがキリオくんの本性なのか。でもなぜか憎めないのは何故だろう。顔か、顔が可愛いからか。

「ちょっとみんな、キリオくんにお茶菓子のひとつでも出しなよ」

「お前がやれよ」

「うるさいよ癖毛。さっさと動けよ」

ぎゃあぎゃあと言ひ合ひの耐えない私達に、いかにもうんざりするミナミ。

下らない、と小さく言い残し、居間を出て行ってしまった。

「やめて下さい2人共。どうぞお構いなく。僕はクッキーと紅茶だけがいいですから」

「全然お構いしてるじゃねえか」

グンゼの鋭い眼孔が再びキリオくんに向けられる。それを笑顔でスルーする美少年。その笑顔が眩しいよ。

自分は関係ない、とでも言うようにごろんと床に寝転ぶアル。それを無理矢理起こし、お茶菓子を出すように言った。何で俺が、と途端に顔を歪めるアル。

「めんどくさいな。それに菓子なんてあつたっけ？　なあ飛翔」

「あー……確か2年前の羊羹なら」

「僕を殺す気ですか」

「それくらいで死ぬタマじゃねエだろオ」

「ていうか、捨てるよ」

あーあ、完全にキリオくん呆れてるよ。ごめんね、馬鹿ばかりで。

キリオくんは小さく息を吐く。笑顔が消え、少しだけ目を伏せたあと低い声で言った。

「此処は本当に、相変わらずですね」

「……カリブも似たようなもんだろ」

「はは、流石に2年前の羊羹はありませんよ」

カリブ、とはキリオくんの属している組織の名前らしい。陽炎と同じくらい強く、人数は陽炎の倍以上いるのだとアルが説明してくれた。

「カリブのトップとボスが昔から仲が良いんだ。だからほんと稀に俺らもカリブの奴と同じ仕事を任される時がある」

「じゃあキリオくんとみんなが知り合いなのも仕事がつっかけ？」

私の質問にはキリオくんが答えた。ええ、と短く頷いたあと、僕が12の時です】をと付け加えた。そんなに前から知り合いなのか。

「ほんとお前あの頃から最悪だったよな」

「人聞き悪いこと言わないで下さい、アルさんまで」

「いや、俺12のガキに『足引つ張るなよ、童顔』なんて言われたあの時が初めてだったからな」

そんなこと言ったんだ……可愛い顔して。何て恐ろしい子。

「俺アてつきり女かと思ってよオ、ナンパしちまったぜ」

「ああそういえばそうでしたね。人生で最も不快な瞬間でしたよ、飛翔さん」

「だって本当に女顔……」

「ははは。殺しますよ」

あくまで笑顔は崩さないんだね。そして飛翔、アンタもその軽さは相変わらずだよ。

「つーか早く帰れよ、お前」

「グンゼさんはひどいなあ。一泊してけよ、なんていう寛大さはな

「いんですか」

「あつてたまるかクソガキ」

私は大人気ないグンゼの頭を一発叩く。この年頃のお子様は繊細なんだからもつと丁寧に扱うもんだよ、無神経め。

「いいんだよキリオくん、グンゼなんか気にせず泊まってよ」

「は？ おい馬鹿女、何を……」

「ありがとうございますレンさん。でも僕お風呂は一番風呂じゃないといけないうって決まってるんです」

「あ？ だから泊めねえっつの」

「それに敷き布団じゃなくてベッドがないと」

「それなら飛翔の部屋で寝るといいよ」

「はア？ なに言っちゃってんだレンちゃんよオオ！」

「飛翔さんのベッド……か」

「テメエも嫌そうな顔すんなア！」

「僕、アルさんの部屋なら使ってあげてもいいですよ」

「いやいや、何で俺の部屋？ 貸さねえよ、絶対貸さねえからな」

「アル、いいじゃん一泊くらい。大人気ないよ」

「そうですよアルさん。僕の若さに嫉妬ですか」

「何で俺の方が悪者に……しかも意味わかんねえし」

キリオくんが泊まることに大ブーイングのみなさん。私は楽しくていいと思うのに、心の狭い奴らだよ。

少しも気にせず当然の如くあれやこれやと注文をつけるキリオくん。すごいよ美少年。こいつらを転がすなんて将来大物になれるよ。

「とりあえず、喉が渴いたんでオレンジジュース……」

「おい飛翔、今すぐカリブ本部に連絡しろ。このガキ迎えに来てもらえ」

「了解」

第17話：さらば美少年

カリブ本部に連絡を入れてから約10分。驚くべき早さでアジトに乗り込んできたのはひとりの男。

「すみませんでしたあ！」

そう叫ぶや否や見事に土下座を決める。なに、この人……と私が引き気味でいると、今まで座っていたキリオくんが短く溜め息をつく。

きつとこの人が、キリオくんを迎えにきたカリブ本部の人なのだろう。

いやそれにしても随分と人相の悪い男だ。坊主頭で、こめかみから後頭部にかけて大きな傷がある。間違ってもかの有名な某男性アーティストグループにいるサングラスのあの方ではない。

目つきは鋭く、並大抵じゃない修羅場をくぐり抜けてきたのだからということは素人の私から見ても容易に想像がついた。

まあ、そんな方が今両手ついて頭下げてるんですけどね。

「本当にこの度はうちのクソガキが迷惑かけて申し訳ない。ここはどうかカリブと陽炎の昔からのよしみとして許して頂けたら……」

見た目とは裏腹にかなり丁寧な人だ。

そんな彼を見て、グンゼや他のみんなも仕方ないといった様子で頷いた。

するとキリオくんが立ち上がり、土下座の彼の前に仁王立ちになる。

「もういいですから、顔を上げて下さい、ツナミさん」

「てめえ、キリオ。誰の為に頭下げてると思ってるんだ、コラ」

「やれやれ。出来の悪い上司を持つと苦労しますよ」

「そりゃこっちの台詞だろうが！てめえいい加減にしろよ！少しは俺の言うこと聞けよ！」

そんな2人のやりとりを見て、思わず笑ってしまった。同じ組織の上司ですら手を焼いてるなんてかなりの大物のようだね、キリオくん。

ツナミさんと呼ばれたキリオくんの上司は、私の顔を見た途端眉をしかめた。何だろうとしばらく固まっていると、何かを思い出したかのように、ああと呟く。

「あんだ、写真の……」

どうやら私の写真が裏社会で出回っているというのは本当らしい。それにしても小娘一人の写真で騒がれるなんて、どんだけ有名なんだ、チーム陽炎。

複雑な気持ちで頭を下げれば、横からアルが入ってきた。

「この子はただの居候だ。組織には関係ない」

「ああ、だろうな」

「だから写真なんてもんが出回るのも心外だ。誰がいつ撮ったか知

「つてるか？」

「さあな。陽炎を恨んでる奴はそこら中にいるだろう。誰がやっても不思議じゃねえ。その女が大事なら、しっかり捕まえておくことだ」

そしてツナミさんはもう一度私に視線を戻してから、名前はなんだと聞いてきた。

「……レンです」

「そうか。まあいざとなれば俺たちも協力する。今日は悪かったな」

「いえ……」

見た目ほど恐い人じゃないみたいで安心した。

ツナミさんはみんなに向かってもう一度頭を下げたあと、キリオくんの首根っこを掴んで立ち上がった。背が高く、小柄なキリオくと並ぶとそれが更に強調される。

「ほら行くぞ、キリオ」

「はいはい……。じゃあレンさん、機会があればまた」

「うん、またね！」

すると後ろから心の磨れた男たちが文句を垂れ始めた。

「俺たちに挨拶は無しかよ」

「ああ、いたんですかグンゼさん」

「さっきからいただろ！」

「じゃあお元気で。残り僅かな人生楽しんで下さい」

「何で死ぬ前提なんだよ！ざけんなクソガキ！待てこら……」

グンゼの叫びも虚しく、ツナミさんとキリオくんは一瞬にしてアジトから去ってしまった。すげえ瞬身だよ。さすが殺し屋の大御所。

「ツナミも苦勞してんなあ」

静かになったアジトの中で、溜め息混じりに飛翔が呟く。全くそのようだね。

「でもキリオくん可愛いよね。美少年だし。あんな弟欲しいよ」

「俺は絶対嫌だ。一日五回は殺してしまいたいそうだ……」

「俺もストレスでハゲそう……」

「もはや疲れた」

口々にそう言うとグンゼ、アル、飛翔の3人は肩を落として自室へと戻っていく。

私はみんなが出て行った扉を、何をすることもなく、ぼーっと見つめていた。

すると突然、居間の扉が開く。驚いて肩をびくりと反応した。誰かと思えばグンゼだ。

どうかしたのかと問えば、彼は扉から顔を出したまま、あーやらえーとやら何か言いにくそうに言葉を濁した。

「なに？」

私も、もう一度聞く。

「その、お前は残念かもしれねえけどよ、」

「うん」

「もうキリオの奴が俺たちの周り彷徨かなくてもいいようにするから」

「え？」

「だからっ、あいつの力は借りねえってこと。だれの仕業が知らねえが、写真なんてのも撮らせねえ」

「……………うん？」

「あー！ 理解力のねえ女だな」

「は？ なにそれっ」

「俺達を守って、やるから。とにかく、お前は何も、心配しなくていい、から……………」

途切れ途切れに言う不器用なところがまたグンゼらしい。

嬉しかった。私なんて別世界の人間で、陽炎のみんなにとつたらどうでもいい存在のはずなのに。

グンゼやみんなだけじゃない。今日1日守ってくれたキリオくんがいたから私は危険な目に合わずにすんだ。誰かの優しさの上に生かされているという事実がこんなに尊いものだなんて、今まで考えたこともなかったんだよ。

「心配なんてしてないよ」

わざと明るくそう言うと、グンゼは少しだけ頬を緩めた。

「だってお姫様を守るのは君たちの役目でしょ！」

「誰がお姫様だコラ。頭かち割るぞ」

「あんたさっき守るって言ったばっかだよ」

「……寝る」

グンゼはただ一言そう言うと、居間を出て行った。

残された私はただ漠然とさっきの彼の言葉を思い出す。

照れたようなグンゼの顔を思い浮かべると、自然と笑みがこぼれた。

グンゼって、よく分かんない。

冷たい時はとことん冷たい。ブスやら貧乳やら容赦ない。

なのに時々、本当に優しくなるんだ。

すごく不器用で、はた目には分かりにくいけど、私には分かる。

グンゼはどうして殺し屋なの？

そう訊いたら、いつか彼は答えてくれるだろうか。

第18話：わたしの声

アジトの中は今日も平和だ。

「てめえ！ぶっ殺す！」

「望むところだ、低脳」

「んだとコラア！」

朝の居間では、茶碗やらクッションが飛び交っている。

争っているのは暴れん坊將軍グンゼと、無敵の勘違い男ミナミである。

むさくるしい男達が同居していると毎日小さなことで争いが起きる。それが気性の荒い殺し屋達だから尚更だ。

初めはその光景にびくびくしていた私だけど、今はもうすっかり慣れた。

残りのメンバーとテーブルにつき、大人しく味噌汁を啜る。うん、今日も赤味噌最高。

すぐ後ろでは、喧嘩を続ける煩い2人。朝飯前によくやるよ、全く。

「ねえアル。そもそも何であの2人喧嘩してんの？」

「簡単に言うと仕事上の意見の不一致。最近グンゼとミナミ、一緒に仕事することが多かったからな」

「ふうん。大変だねえ、殺し屋も」

「まあな」

私には関係ない。

だって私、今完全にニート以外の何者でもないし。

「私も何かしたいなあ。仕事のなこと。毎日暇だよ」

溜め息混じりに呟くと、それよりも濃い溜め息を吐いた鬼大が呟いた。

「そんなに暇なら家事をしてくれると助かるんですけどね……」

その呟きは聞かなかったことにする。

すると今度は飛翔が笑いながら私の頭を叩いた。

「じゃあ俺がレンに殺しの仕方教えてやろうか」

「嫌だよ。ありがた迷惑だよ」

「何でだよ、つまんね」

「殺し屋なんて、私には絶対無理」

あんな思いはもう沢山だ……。

俯く私を見て、『それが出来るようになるんだよなあ』と飛翔はぽつりと呟いた。

彼も初めは、私と同じだったのだろうか。

「レンは今のままでいいじゃん」

そう言ったのはアルだ。

そうかな、と私は首を捻った。

「そうだよ。島の外は危険だし、何かあるか分からない。ここにいた方がずっと安全だ」

「でも私、一生ここに在るわけじゃないんだよ」

言った瞬間ハツとした。

そっか、そうだよな、なんて言うアルの声が寂しそだったからとっさに笑って誤魔化した。

そうだよ、私、自分でも意識してなかった。

ずっとこの世界に在るわけじゃない。いつかは元の世界に帰らなくちゃいけない。

でも……本当に帰れるのだろうか。

そして、帰れるとしたら、もう二度とこの人達と会えなくなるんだらう。きつと。いや、絶対。

少し重くなった空気。後ろの2人は相変わらず言い合っている。

「まあまあ、難しいこと考えても仕方ねえし。気楽に行こうぜ、気楽によ」

こういう時の飛翔の言葉は助けになる。楽天的な彼の良いところだ。そうだよ、と私は味噌汁を飲み干した。

ミナミとゲンゼは結局仲直りしないまま仕事に行った。

他の3人も皆慌ただしくアジトを出て行く。

それを見送ってから、たまにはいいことをしようと思いの片付けをしていた私だけど、すぐに飽きてやめた。

次に自分の部屋へ行って散らかしっぱなしの服なんかをダンスに押し込める。

その時、ダンスの奥からあるものを見つけた。

「ピアスだ……」

それは、銀色に光る小さな丸いピアスだった。どこかで見覚えのあるそれを手にとってしばらく眺めてみるけど、いつどこでそれを見たのかは思い出せない。

何で誰のか分からないピアスが私の部屋のダンスにあるんだろう。

不思議に思った私は、それをベッドの脇に置いた。もしかしたら、陽炎メンバーの中の誰かのものかもしれないと思ったのだ。

みんながいない間にアジト探索をしようと立ち上がる。

いつかアルが言っていた、ボスの部屋へ続く隠し扉を見つけてやるうと思ったのだ。

飽き性の私が、一時間くらいアジトの中を歩き回ったのだけれど、残念ながらそれらしきものを見つけることは出来なかった。

再び退屈になった私は一人、鬼大の焼いたクッキーを食べながらベランダから見えるジャングルを眺めていた。ああ、虫が鬱陶しい。葉が擦れ合う音も、この暑さも、すっかり慣れてしまった。

何だかんだで、この世界に来て帰れるあてもないまま、2週間以上が過ぎてしまったのだ。

基本的に楽天家の私。だけど普段は考えないようにしていることも、一人になると考えてしまう。

朝、アルに放った『ずっとこの世界にいるわけじゃない』という自分の言葉を思い出して何だか憂鬱な気分になった。

お母さんも妹も、今頃なにしてるんだろう。
私がいなくなっただことで、私のいた世界に何か変化はあったんだろ
うか。

「どうやったら、元の世界に帰れるのかな」

そう呟いた矢先、玄関の方から物音がした。何かが落ちたような大
きなその音に、びくりと肩を震わせる。
みんなは仕事に行ったばかり。
まさか、泥棒？

私はそろりとベランダを抜け出し、廊下を渡って居間へ入る。
誰もいない。時計を見て、みんなが出て行ってまだ三時間しか過ぎ
ていないことを確認する。

どうしよう……

やはり物音の原因は玄関にあるらしい。
思い切って玄関へ続く居間の扉を開けた瞬間、ハッと声を上げた。

開けっ放しにされたアジトのドア。
そこに倒れ込んでいる一人の男。

「飛翔！」

飛翔だった。

うつ伏せになつて倒れている飛翔の元に駆け寄り、その体に触れる。真つ黒なスーツの脇腹に、赤黒いものが染み込んでいるのを見て、ひつと声を上げた。

ひどい鉄の臭い。触れると生暖かいそれは、私の嫌な記憶を呼び戻す。

(駄目だ……！)

怯えている場合じゃない。飛翔が無事じゃないことは明らかだ。金色がかった頭はピクリともしない。

飛翔が死ぬかもしれないという考えが頭をよぎる。

何があつたかは分からないけど、そんなことは今はどうでもいい。恐怖で震える腕を思いつきり噛む。震えは止まらなかつたけど、どうにか飛翔を居間まで引きずり、仰向けに寝かせる。

上着とシャツを無理矢理脱がすと、痛々しい傷が目飛び込んできた。

こんな時どうすればいいか私は知らない。混乱しながらも必死で飛翔の名前を叫ぶ。ただ彼が返事をするとはなかつた。

慌てて飛翔の胸に耳を当てる。弱々しい心臓の音が聴こえて少しだけ落ち着きを取り戻した。まだ間に合う。

「そつだ……し、止血！」

私は救急箱を見つける為に居間中を探し回った。棚の引き出しにそれはあった。
乱暴に開け、包帯を取り出し飛翔の傷口を覆うようにそれを体にくるぐると巻きつける。やり方なんて分からないけど、とにかく必死だ。

「飛翔！ 飛翔！」

パチパチと頬を叩くと、少しだけ反応があった。彼の額には汗が滲んでいる。

休むことなく名前を呼び続けた。

不安で堪らなくなり、焦りで涙が次々に零れた。それを拭うこともせず、静かな居間に私の叫び声だけが響いた。

「飛翔！」

う、と声を漏らす飛翔。眉間に皺を寄せ、薄く目を開ける。

やった！と私は思った。飛翔は気を失っていたのだ。

「飛翔！もう起きないかと……」

言い終わる前に、視界が強く揺さぶられた。一瞬何が起こったのかわからなかった。

殴られた。

そう確認したのは、床に落ちた自分の鼻血を見てからだった。

「俺に……近寄る、な」

かすれた声でそう言った飛翔の目が、いつものものではないことにすぐに気が付いた。彼はまだ、スイッチが入っているのだ。

私は途端に怖くなった。スイッチの入っている飛翔は何をするか分からない。ただ傷口を抑える飛翔があまりにも辛そうに顔を歪めるから、逃げることができない。

立ち上がるうとする飛翔に、思わず飛び付いた。

上半身だけを起こしたまま、飛翔が私を振りほどこうと腕を上げる。

「動いちゃ駄目だよ！あんた今ひどい怪我してるんだから！」

「うるせえ！俺から離れろ！」

じわ、と包帯に血が広がる。

何が何でも止めなくちゃ。そう思った私は、再度殴られようが髪の毛を掴まれようが、飛翔の首にしがみついたまま動かなかった。

「殺すぞ……この女！どけっつってんだろオ」

「死ぬのはあんだだよ！絶対行かせない！」

「んだと……いい加減に、」

「お願いだから動かないで！」

「……」

飛翔の体が止まる。

「ねえ……ねえ飛翔！聞こえるでしょう？私の声が！」

「何を」

「お願い、死なないで」

しばらく流れた沈黙のあと、飛翔は呟いた。レン、と。

どれくらいそうしていただろう。

とてつもなく長い時間を感じたその間、私は飛翔の首に回した両手を少しだつて緩めなかった。

一瞬でも力を緩めてしまえば、飛翔は私を突き飛ばし、怪我をした体のままアジトを飛び出してしまうような気がしたのだ。

ぎゅっと目を瞑り、祈るように飛翔を抱き締めた。

こんな風に誰かを抱いたのは初めてだった。

「いてエ……」

飛翔がポツリと呟く。

思わず顔を上げると、そこにはいつもの飛翔がいた。

「痛てエよ、レン」

私は慌てて体を離す。飛翔は眉をひそめて脇腹を軽く抑えた。

「飛翔……」

不安そうな顔をしていたのだろう。私と目が合うと、彼は弱々しく笑った。

安心感からか、また涙腺が緩くなる。柄にもなく顔を覆って泣きながら呟いた。良かった、と。

「俺、またスイッチ入っちゃってたな。ごめんな、レン。怖かっただろ」

「当たり前だよ馬鹿！」

「でもお前、逃げないでくれたんだな」

飛翔はそう言っただけで私の頭を優しく撫でた。その大きな手が余計に涙を誘う。

金色の髪を飛翔が片手でかきあげる。

「傷は……？痛いでしょう」

「ああ。でもこれくらいで死にやしねえよ。慣れっこってやつだな」

「何でそんなひどい傷？」

「仕事でちょっとヘマしてな。俺が殺す筈のターゲットが別の殺し屋を雇ってやがった。油断してかかったらこの様だ」

自嘲気味に飛翔は笑った。

そんな風に笑われたら、いつもは図々しい私でも、何も言えなくなってしまう。

「死に物狂いで島に帰ったが途中で意識が飛んじまったみたいだ。お前がいてくれて助かった」

そう言ったあと飛翔は何かに気付いたのか、それ、と私の顔を指差した。

私は慌てて鼻血の痕をゴシゴシと拭き取る。

これはスイッチの入ってた飛翔がやってしまったこと。仕方ないこと。

だから飛翔は悪くないのだ。

そう言いたかったのに、どっと胸に押し寄せてきた悲しみのせいで声に出せなかった。

「俺がやったんだな、それ」

「……」

「悪い。でも本当に、覚えてねえんだ」

「分かってる……」

私は俯いた。まだ鼻血の痕が残っていたら嫌だったから。

ふう、と息を吐いてから飛翔は話し出す。

「殺しの時、昔から俺は自分の感情を閉じ込めちまうんだ。そうすれば何も感じずに人を殺せるから」

「知ってるよ……」

「殺しの間は別の俺が出てきて仕事をしてくれる。その間俺は自分の様子をただボーっと眺めてるんだよ。テレビを見てるみたいにな

だから気付いた時には目の前に死体が転がってる。んで……いつも思うんだ。『ああ、また俺がやったんだな』って」

「だからよく覚えてないんだね」

「ああ。スイッチが入ってる時は何も聞こえねえし何も感じねえ。だけど……」

「だけど？」

「レンの、俺を呼ぶ声は聞こえたよ」

「……」

「お前が俺を呼んだんだ。お前が、俺を連れ戻してくれた。ちゃんと、届いてたよ」

私は何だか嬉しくて、でも素直にそれを言えなくて、飛翔の怪我のことも忘れて口元を少しだけ緩めた。すると飛翔は照れ隠しのように笑った。

「ありがとな」

殺し屋なんてやめちゃいなよ。そう言いたかった。本当は。だけど、何も言えなかった。

第19話：絡み合う心情

夕方になると、みんなが帰宅し始めた。

ミナミとグンゼの喧嘩は静まったのか、2人共朝のようにいがみ合っ
つてはいない。

みんな包帯を巻いた飛翔を見て眉をしかめる。

ミナミは、またかという表情をして溜め息を吐いた。

アルが冷蔵庫からビールを一本取り出しながら言う。

「どうしたんだよ飛翔のその傷」

「今回は随分派手にやられたな」

アルのあとにそう言ったのはグンゼだ。いつものことなのか、さほ
ど心配した様子はない。

飛翔も下品に笑いながら、だよなアと人事のように答えた。

「でも今回はレンチちゃんが付きつきりで見病してくれたから大丈夫
だぜ」

「そつだよ全く。有り難く思っ
てよね」

グンゼがふうんと唸った。

「だから包帯の巻き方が下手くそなのか」

「うるさいよ、キミ」

「まあたまには役に立つじゃねえか。たまには、な」

ほんと嫌みな男だよ。こういう男が婚期逃すんだ、絶対。

私はグンゼを睨み付ける。その時今まで意識していなかったあることに気が付いた。

「グンゼ、それ……」

グンゼの左耳に光る銀色のピアス。髪の毛の間から顔を覗かせている。そう、あれはきつと私の部屋にあったピアスと同じものだ。どこかで見た記憶があったのは、グンゼがいつも付けていたからなのか。

ちょっと待ってて、と私は居間を出た。そしてベッドの脇に置いたままのピアスを握り締めて再び居間に駆け戻る。

グンゼは不思議そうな顔をしたままソファーに寝転んでいた。

「これ、グンゼのでしょ」

グンゼの目の前にピアスを突きつける。

彼はそれを見つめたあと、どこにあったんだと低い声で呟いた。

何故だろう。このピアスを見せた瞬間、空気ががらりと変わった気がする。

誰も何も言わない。

「私の……タンスの奥だけど」

「……ふうん」

「グンゼのピアスでしょ？」

「いらねえ。俺のじゃない」

無表情のままグンゼは私に背中を向けた。むっとした私は、横向に寝た彼の前に再度ピアスをちらつかせる。

「絶対そうだよ！だってあんた今同じやつしてるじゃ、」

「いらねえつつてんだろ！」

途端に叫ぶグンゼ。私は驚いてピアスを落とした。コロコロと転がったピアスは近くにいたアルの足元で止まる。

グンゼの声はどこか切羽詰まってるようにも感じた。

何も言えずに私はただ一言ごめんと呟く。悪いことをしたのかわからなけれど、それしか言葉として出て来なかったのだ。

しん、と静まり返る居間。

捨てておけ、とだけ短く言うと、グンゼは立ち上がって居間を出てしまった。

残された私はただ呆然とソファの前に立ち尽くす。不穏な空気を

破ったのはアルだった。

アルは足元のピアスを拾うと、しばらく眺めたあと、苦笑いをした。

「気にするな、レン。グンゼにもいろいろあるんだよ」

「そう……」

私は何だかその場にいるのが耐えられず、黙って居間を出て洗面所へ行った。

顔を洗って鏡に写った自分の顔を見るとなんと情けない顔をしている。

馬鹿みたい。

何も知らないのに、ずかずか入り込んで。

別に私が、陽炎ってわけじゃないのに。

いつもの夕飯の時間になってもグンゼは部屋から出て来なかった。

鬼大がグンゼの分の器を冷蔵庫に片付ける。

みんな特に何も言わなかった。グンゼが部屋から出て来ないのは私のせいだとも。

私は終始上の空で、オチのない飛翔の馬鹿話も頭に入ることなくただだ器の中の野菜を口に運んでいた。

「おいレン、人の話聞いてんのかよオ」

「うるさいよ。脇腹刺されたばっかのくせに元気過ぎるよ」

「俺ア不死身だからなア！」

「はいはい、おめでとう」

するとそんな私を心配したのか、アルが顔を覗き込んでくる。

「レン、大丈夫か？」

「大丈夫だよ!.....ありがとう」

「そっか。ならいいけど」

「.....」

「なあレン。飯食ったらちよつと」

「え？」

ご飯を食べ終わったあと、アルに連れられてアジトの外に出た。星空が綺麗だ。私は上を見上げたまましばらくじっとしていた。真つ暗なジャングルも、今は怖くない。生温い風が頬を撫でた。

アルはポケットからあのピアスを取り出すと、私に見せるように手のひらを広げた。

恐る恐る、なに？と聞けば、彼はゆっくりと話し出す。

「気になったままじゃ、眠れないだろ。グンゼにも接しにくいだろうし」

優しいアルはそう言った。

私は正直に頷く。

「気になる、すごく」

だって、グンゼがあんなに怒ったんだ。

それに、捨てとけと言いつつ放った時の彼はすごく悲しそうだった。

アルは手の上のピアスを見つめる。何かを思い出すかのように目を細めたあと、口を開いた。

「もう3年になるかな。ルイがいなくなったのは」

『ルイ』

その名前を聞いた瞬間、私の胸がざわつく。みんなが度々口に出すその名前。そしてその名前を言葉にしたあと、みんな必ず辛そうに俯くんだ。

だから触れてはいけない名前なんだと思ってた。

私だってそれくらい分かる。

「陽炎には昔、ルイっていう女のメンバーがいたんだ」

「その人も殺し屋なの？」

「ああ。ルイは元々ボスが連れてたらしい。俺が陽炎に入った時にはもういたよ」

「アルより先輩ってこと？」

「そうなるかな。俺は3番目のメンバーだから。先にいたのはボスにグンゼにルイ。他の奴らはその後に入ってきたんだ」

アルは続けた。

「ルイは俺たちの中心だった。特別だった。あんな女は世界中どこ探したっていないよ」

「……」

その言葉に僅かな嫉妬を感じた自分が嫌だった。何に對しての嫉妬なのかは分からないけど。

「……じゃあ、そのピアスはルイさんのもの？」

「これは、グンゼとルイがいつも付けてたやつ。どつたがどつちにあげたものかは分からないけど」

「大事なものなんだね……」

グンゼは捨てろと言った。

でもそんなこと本当は思っていないんだ、きっと。そして私は、一番気になっていることを聞いた。

「ルイさんはどこに行ったの？」

アルの目に悲しみの色が浮かぶのを確かに見た。

「ルイは……3年前のある日、仕事に出たきり戻って来なかった」

「……」

「俺たちは探し続けたよ。だけど半年経った頃、ボスが言ったんだ。ルイは死んだって」

「死んだ……」

「どこからの情報なのかは教えてくれなかったけど、俺たちを集めてそう言い切ったんだ。だからもう、ルイのことは探すなど。みんな

な納得したのかは分からないけど、少なくとも納得したふりはした。この仕事やってたら、死はいつも隣り合わせだからな。みんなそれを分かって殺し屋をやってる。そんな俺たちだからよく心得てることがある。人は簡単に死ぬ。自分達だけは例外なんて、有り得ないって」

「……」

のほほんと毎日を生きていた私は、死を意識したことがない。愛犬が死んだ時も、おじいちゃんが死んだ時も、悲しみはしたもののどこかで他人ごとだった。

死について深く考えたこともないし、考える必要のない生き方をしてきたから。

でもみんな違うんだ。どんなに馬鹿やったって、いつも死を身近に感じてる。

いつかゲンゼが言った言葉を思い出した。

『相手残して一人逝くのも耐えられねえ』

あれはつまり、言葉のまま、そういう意味だったのだ。悲しい生き方だ。私は思った。

深く考えずに生きて方がよっぽど楽に決まってるのに。どうして彼らは、そういう生き方を選んだのだろう。

殺し屋というのは、なんて切ない生き物なんだろう。

「ルイは死んだ。みんなそれを分かっているからルイの話を避けるんだ。だけど、グンゼは今でも信じてる。口には出さないけど、ルイが帰ってくるんじゃないかって思ってるはずだ。本人は気に入っているだけだって言うけど、あのピアスを外さないのが何よりの証拠なんだ」

「グンゼは、ルイさんのことが好きなんだね」

「……グンゼだけじゃないよ、ルイのことが好きだったのは」

アルの言葉に重みを感じた。

ああ、彼もその一人だったのか。

アルが手のひらのピアスをポケットにしまう。そして彼はいつもの愛嬌ある笑顔を見せた。

「俺はグンゼをルイから手放してやりたいんだ。いつまでも引きずってちゃいけない。グンゼはまだルイの影に縛られてる。もしかしたら一生そうかもしれない」

私は何も言えずに俯いた。

グンゼの中で生き続けてる誰かがいる。

忘れて欲しいとは思わないけど、救われて欲しい。

死んだと聞かされた時の彼の……彼らの心は、どれだけ辛かったのだろう。

私には分からない。

だけどそれでも、分かりたいと、思う。

「俺さ、レンならできると思っんだ」

「なに？」

「レンならさ、グンゼの心の中に入っていける気がする」

「そんな……私なんていつもグンゼに馬鹿にされてばっかだよ。それに、別世界の人間だし」

「関係ないよ」

アルは繰り返した。

「別世界とか、関係ない」

そう言われると、何も言えなくなってしまっ。だけどアルが言うような自信は私には全くといっていいほどなかった。

「レンだからそう思っんだ。これが他の女ならこんなこと言ったりしないよ」

私は何だか照れくさくて、うれしくて俯いてしまった。

「グンゼを救ってやってほしい」

「でも……どうしたら」

「特別なことなんてしなくていい。レンのそのままグンゼのそば

にいてやってくれ」

「それは……」

ん？とアルが首を傾げる。

「私に、グンゼを好きになれってこと？」

自分でもびっくりするような言葉を口走っていた。

慌てて『今の無し！』と訂正するが、アルの表情は固かった。

少しの沈黙を見送ったあと、彼は言う。

「それは、レンに任せるよ。レン自身の気持ちが最優先だろ。でも、

「でも？」

「もし本当にそうなら……俺は後悔するかもしれないな」

アルが切なげに笑うから、出てくる言葉が見つからなかった。

ねえアル。それってどういうこと？

そう聞きたかったけど、何だか怖くてやめた。

アルがピアスをポケットにしまいこむ。

アジトの中に戻ろうとドアを開けた時、彼は笑った。

「冗談だよ」

「……」

夏の夜は暑い。

けれど、それよりも熱い何かが、私の胸を刺した。そう、確かに。

居間には誰もいなかった。

各々、部屋に戻ったのだろう。まあ部屋で何してるのかは知らないけどね。

アルと私も部屋のドアの前で別れた。

おやすみと言って。

「……………」

ベッドに入って目を閉じる。

だけど少しも寝れる気なんてしなくて、少し迷ってから立ち上がる。目指したのは隣りの部屋。グンゼのいる部屋。

ドアの前で何て声をかけようか考えていた。静かな廊下に一人、無意味に緊張して突っ立っている私。

元気？と声をかけてみようか。それともちょっとシリアスっぽい感じがいいかな。ああでも寝てるかもしれないし……起こしたら絶対機嫌悪くなるタイプだしあいつ……。

一人でブツブツと作戦を練っていると、急にドアが開いて言葉をな

くす。どうやら私は黙って考え事ができない人種らしい。
出てきたのは当然グンゼ。それも、ものすごく不機嫌な顔で。
やばい、と思ったのも束の間、彼は低い声で言った。

「うるせえ」

間違いない。正解。

私は苦笑いを浮かべて、ですよねと答えた。

「人の部屋の前で何ブツブツ言ってるんだ。ガキはさっさと寝ろ」

「何その言い方！人がせっかく心配してきたのに……」

「心配？」

「そっだよ……」

グンゼは頭を掻くと、ああ、と私を見ずに言う。

「ピアスのことなら気にすんな。お前には関係ねえよ」

関係ない。

グンゼの放ったそのたった一言が、一瞬にして私という存在を宇宙の果てまで飛ばしてしまった。

私は、そっか、と視線を足元に落とすことしかできない。傷ついた顔は見せたくなかったのに、情けないくらい声は小さかった。

それに気付いたのだろうか。グンゼは続けてこう言った。心配してくれてありがとな、と。

「グンゼ」

「あ？」

「私、グンゼのこと嫌いじゃないよ」

「はあ？いきなり何を……」

「だから、」

『だから』、その先に続く言葉が見つからない。私がいるよ、なんて口が裂けても言えない。だってそれを言うには、私はグンゼのことを知らなすぎる。それに、どういう気持ちでそんなことを言うのかも自分自身からない。

「その……」

戸惑う私に、ゆっくりと沈黙を破るグンゼ。

「アルに何か聞いたのか」

「え……」

顔を上げて見たグンゼの顔は、怒ってはいなかった。
うん、とゆっくり頷けば、ふうんと彼は唸る。

「ルイさんのこと、少しだけ」

「あいつはお節介だからな」

「アルもグンゼのこと心配してるんだよ」

「お前もお節介だしな」

「……うるさいな」

そこで初めてお互い笑顔になった。

「俺なら大丈夫だ。お前じゃねえんだし、何年も前のこと思い出してめそめそ泣いたりしねえよ」

私は、何故か余計に切なくなってしまった。
じゃあ、ピアスは？

クローゼットの奥にあったあの写真は？
写真の中、グンゼとアルに挟まれるようにして笑っていた女の子は
きっと、いや間違いなくルイさんだ。

「泣いても、いいと思うよ」

私は小さく呟いた。グンゼは何も言わない。

「どれくらい時間が経ったって、ルイさんの事がなかったことになるわけじゃないんだよ」

「だって、キミは、生きてるんだから」

「だから、泣いても、いいんだ、よ」

途切れ途切れになった私の下手くそな言葉をグンゼは黙って聞いてくれた。

この言葉が彼の心に届いたのか、それとも表面を撫でただけでしかないのか、それは分からないけど、最後に彼は言った。

「いくら泣いても、あいつは戻らなかった」

……少なくとも私には、その言葉がグンゼの、ルイさんのいなくなったこの3年間の叫びに聞こえた。

目頭の奥がじんと熱くなる。何故だろう。自分じゃないのに。

もう平気だ、そう言って笑ったグンゼの顔が、私には泣いているように見えたのだ。

第20話：おめでとう

朝起きていつものように居間へ行く途中、廊下でアルに会った。

おはよう、と挨拶を交わして一緒に居間に入ると、鬼大がアルに向かって『おめでとございます』なんて言うからつい首を傾げた。それに鬼大だけじゃなく、みんなが口々に同じ言葉を発する。

「よおアル。めでてえなア」

「サンキュ」

何が何なのか分からない私は一人眉をしかめる。するとそれに気付いた鬼大が説明してくれた。

「アルさん今日、誕生日なんですよ」

「ええ！そうなんだ！おめでとう！」

アルは口の中で卵焼きを頬張りながら無表情でサンキュ、と短く答える。

「いくつになったの？」

「21。多分」

「多分て何だよ、多分て。ていうか21とかリアルだよ」

「何だよ、それ」

アルが笑う。21歳初の笑顔はとても輝いて見えた。
私より3つ年上か……。それにしても童顔だな。なんて思いながら
朝ご飯を食べた。

殺し屋も誕生日パーティーをするらしい。

その夜、珍しくアジトに帰ってきたボスは片手にケーキ、片手にシ
ヤンパンを持っていた。

世界は違っててもやることは変わらないらしい。

相変わらずの黒装束に身をつつみ、いつものポーカーフェイスでア
ルに近づく。

「誕生日おめでとう、我が息子よ」

「誰が息子だ、誰が」

心底呆れたようにため息をつくアル。だけどやっぱり、ボスが帰っ
てきてどこか嬉しそうだ。

うっん。アルだけじゃない。みんな仕事で疲れてるはずなのに、柔
らかい表情をしてる。あ、ちなみに私は一日中寝てました。

「これはプレゼントだ」

アルは受け取った包みをゆっくり解く。
中から出てきたのは、腕輪。

「普通の腕輪じゃないぞ」

そう言っただけは自分の袖を捲る。ボスの腕にも、同じデザインの腕輪がついていた。黒くてシンプルなプラスチック製のものだ。

「どんな腕輪だよ」

「抜群に記憶力がよくなる腕輪だ」

へえ、とみんな腕輪を覗く。

それは飛翔にあげた方がいいと思うよ。とは言わなかった。
アルはインチキでも見るような目でボスを見る。

「これをつけてから俺は本当に記憶力が良くなったんだぞ」

「へえ……昨日の夜なに食べた？」

「……鳥、みたいなやつ……だったかな？」

「……」

それ確か、記憶力良くなるんですよね……。
やっぱり馬鹿だ、ボス。

完全に月が上った頃、アルの誕生日パーティーが始まった。

「あれ？ケーキのろうそくは？」

私がそう言つとみんな不思議そうな顔をする。

どうやらこの世界では歳の数だけろうそくを点けるという習慣がないらしい。

軽く説明すると、鬼大が即興でろうそくを用意する。

「あの、レンさん……これしかなかったんですけど」

「仏壇用持ってきてどうすんのよ。何ひとつめでたくないよ」

だけど仕方なくその仏壇用をひとつケーキに差す。アルは少し照れながらもそれを吹き消した。

「誕生日おめでとう！」

「おい、もう一回火点ける。俺もやってみてえ」

「黙れ飛翔。子供か」

「おい、いいから飲もうぜ。鬼大、酒」

「はい、グンゼさん」

誕生日パーティーという名の酒盛りが始まる。酒の弱い私は巻き込まれないようそそくさと端っこの方へ移動する。こいつらのペース

に乗せられたらたまったもんじゃないよ……。

飲み始めること一時間。主役のアルはボスの買ってきた変なパーティーハットを頭に乗せられている。くそ、ちよっと可愛い。すると悪のりをした飛翔がとんでもないことを言い出した。

「俺様の裸が見たい奴ー！」

アホだ……。

みんな見事に無視。鬼大に至っては疲れているのか早々に寝転んでしまった。

「お、レン。見たそうだな」

「そんなわけないだろ馬鹿。察しろよこの空気」

「そうかあ！そんなに見てエか！」

「ぎゃー！汚いモン見せんな変態！死ね！」

嫌がる女子に痴態を見せつけるなんてもうあんた終わってるよ。

飛翔が自分のスボンに手をかけた瞬間、それまで普通に飲んでいたグンゼが後ろから飛翔の背中を蹴り飛ばした。

派手にソファァーに突っ込む飛翔。ヘラヘラと笑っている。

「ったく。酔いすぎだつて」

呆れたように言うグンゼは少しも酔っていないようだった。珍しい。いつもは飛翔に負けず劣らず飲みまくってるのに。すると突然、酔ったアルがグンゼに抱きつく。どうやらミナミヤボスに飲まされまくって非難してきたらしい。

「助けてくれグンゼ！あいつら鬼だあ！」

「暑苦しい！離れる！」

「嫌だあ！」

「これでも飲んどけ！」

そう言いながらアルの口に酒ビンを突っ込む。うん、鬼畜だね。

もう暴れまくる奴らのせいでテーブルの上のご馳走もぐちゃぐちゃだ。唐揚げが私の顔面にヒットした。

「少しは静かに飲んでよ！特にミナミ！食べ物投げんな！」

「黙れ小娘。ちなみにお前いくつだ」

「18だけど……なに」

「18でその体型か」

「どついう意味よ」

「幼児体型だという意味だが何か」

「テム。コノヤロ」

この無神経男は死んでも直らないだろうな、きつと。こうなりややけだと思いい、つがれたグラスを一気に飲み干せば胃がじんわりと熱くなってきた。

いい感じに酔っ払った私は、アルと共に寝ている鬼大の顔に落書きをする。低レベルな遊びも何だか今はすごく楽しい。

やがて鬼大いじめに余念がないミナミが参戦し、マーカーのペンを鬼大の鼻に突っ込んだ時に時計の針が0時を指した。

「俺そろそろ眠い」

アルがそう言っつて欠伸をする。

働いているみんなとは違い、一日中ゴロゴロしている私は無駄に有り余った体力を発散しなかった。

だけどアルに続き、飛翔やミナミまで寝ると言い出す始末。

ボスは私達が鬼大で遊んでいる内にそそくさと部屋に戻ってしまったようだ。

各々部屋へ戻ろうとする一同。つまらん。

「ねえミナミ、鬼大どうすんの？全然起きないよ!」

「知らん。飛翔が水上バイクの筆記試験に受かる日が来るまで海底へ埋めておけ」

「一生来ないよ」

みんな居間を出て行った時、私は気付いた。

グンゼの姿がない。彼がいつ居間を出て行ったのかも覚えてない。

まあいいか……。

まだ眠くない私は一人、こっそりと廊下に出る。昏間よくひなたぼっこをするお気に入りのベランダに出ようと足を踏み出す。そこには予想外にグンゼがいた。

「あ、」

「あ？」

振り返った彼はあぐらを掻いてドカツとベランダに腰を下ろしている。後ろ手に重心をかけ、何をするでもなくただ夜風に当たっていた。

私は遠慮してグンゼと少し距離を置いて体育座りをする。緑と潮の匂いが風に乗ってきた。夏の夜は気持ちがいい。

グンゼは何も言わない。

憂いを帯びたようなその横顔は、どうしても放っておけない雰囲気がある。

月明かりに照らされたグンゼは、綺麗だった。

「……ここは空が広いね。私の住んでた世界とは大違いだよ」

「そうか」

「うん」

「あいつらは？」

「もうみんな寝てる」

「……ふうん」

そしてまた沈黙。

耐えきれなくなった私は、素直に疑問をぶつけた。

「グンゼ、何で元気ないの？」

別に、などという素っ気ない返事が返ってくるんだろぅと思って
いた。

だけど違った。少し間を開けたあと、彼は小さく口を開く。

「元気ないように見えるか」

「見えるよ。アルの誕生日、嬉しくないの？」

「……俺もまだまだ子供だな」

「え？」

その意味が分からず聞き返した。グンゼは自嘲気味に笑ったあと、
真剣な表情になる。

「お前、誕生日いつ？」

「9月24日だけど……」

「そっか」

私はじつと次の言葉を待った。

「……俺、自分の誕生日を知らねえんだ」

夜のジャングルに、グンゼの声が吸い込まれた。

私はすぐには言葉を発せず、ただ真っ直ぐにグンゼの横顔を見つめる。

少し俯いた彼は行き場のない迷子のように弱々しく見えた。

「自分がいつ生まれたのか分からない」

「……」

「子供の頃、親に捨てられたんだ。野良犬みたいな生活してたから誕生日なんてもん自体知らなかった。ボスに拾われたのは何年も後だ」

「そんな……」

初めてグンゼが自分のことを話してくれた。だけどその内容があまりにもショックで、私はただただ眉間に皺を寄せるばかりだ。抱えた自分の両膝をぎゅっと寄せた。

私には家族がいる。でも父親がいない。それだけでも幼い頃は寂しかったのに、グンゼは私なんかよりももっと寂しい想いをしてきたんだ。

「だから誕生日を迎えるって、どんな気分なんだろうって思う。なあ……笑うだろ」

「……そんなことない」

そんなことないよ、ともう一度繰り返し返したあと、奥歯を噛んだ。グンゼは黙ったまま、正面に広がる闇をじっと見つめていた。

「……捨てるくらいなら生まないで欲しかった」

グンゼの目が少しだけ潤み、声が微かに震えた。こんな弱気な彼は初めてだった。

「グンゼは、生まれてきたこと後悔してる？」

「……たまたに思う」

「あのだ、」

私はグンゼの方に近づき体を向けて座り直した。グンゼは怪訝そうに眉をひそめて私を見る。構わず彼の腕を掴んだ。握手をするよりも強く、自分の両手で彼の手を包み込む。啞然としたまま片手を差し出す彼は、あどけない少年のようだった。

「おい、何を」

「今日がグンゼの誕生日にしよう」

「は、」

「アルと1日違いね。来年からは2人の合同誕生日会だよ」

「何だよ、それ。お前馬鹿だな」

「グンゼ」

「あ？」

「誕生日おめでとう。生まれてきてくれてありがとう」

「……馬鹿だろ」

「本気だよ。だって私はこの島で、グンゼに拾われたんだから」

「拾ったつもりはねーよ」

「だからもう二度と」

「おい。人の話を、」

「生まれてきたこと後悔してるなんて思わないで。だって君は」

「聞けよ……」

「君は、こんなに優しいじゃない」

「……」

優しい？とグンゼが聞いた。
私は頷いた。

彼はよく分からないというように首を捻ったあと、私の手を雑に振りほどき、素早く立ち上がる。

「いらねーよ、誕生日なんか」

「ダメ。みんなにも言っとくからね！今年は急すぎて無理かもしれないけど、来年は絶対グンゼの誕生日会を、」

「いらねって。だってお前、来年はここにいないだろ」

「……」

頬をぶたれた気がした。

グンゼは冗談で言ったんじゃない。グンゼの言うとおり、来年の今頃私はこの世界にいないかもしれない。どうしてそんなこと言うの？と責めたかった。言葉にならなかった。

「いるよ！」

「はあ？」

「私、来年もいる。グンゼの誕生日会一緒に祝う。もし明日、元の世界に帰れたとしても、グンゼの誕生日には必ずここに帰ってくる」

グンゼはしばらく突っ立ったまま私を見つめた。

私の方も意地だった。

しばらく無言のまま時が流れる。

「……無理すんなって。別にそういつつもりで話したんじゃない」

「そんな、」

「でも、ありがとう」

「……」

寝るわ、と一言呟いてから、彼は背伸びをした。

グンゼがテラスを出て行く直前、引き止めるようにもう一度言葉を放った。

「誕生日、おめでとう！」

すると彼は今まで見たこともないような笑顔で、ああと頷いた。

胸が痛い。自然と目頭がじんと熱くなる。思わず唇をキュッと結んだ。

グンゼのお母さん。あなたは今、どこにいますか？どうして彼を捨てたんですか？

一度でいいから、彼を抱き締めて欲しい。

グンゼは今まで何度そう願ったことだろう。

途方もない願いがある。叶わない想いもある。

それでも人は、夢を見るのです。

私は、本当は抱き締めたかった。彼を。

だけど、出来なかった。

私なんかグンゼの力になれるのか、そう考えることすら浅はかに

思えて。

あなたならこういう時、どんな言葉でグンゼを慰めた？
ううん。きつと、何の迷いもなく抱き締めるんだろう。彼の為に流
す涙も隠さずに。

ルイさん。私には、どうしてもできないの。

第21話：初めての留守番

アルの誕生日から3日。
ある日の陽炎。

常夏の島、殺し屋達のアジトにて、大の男達が揃いも揃って、朝からそわそわと落ち着かない様子だった。

「よし、俺は今日も完璧。美しい」と、ミナミ。

「やべつ。髪の後ろハネてるわ」と、飛翔。

「う、緊張してきた……トイレ」と、アル。

「おうコラ、俺のスーツにアイロンかけとけって言っただろーが」と、ゲンゼ。

「すみません！ただ今あ！」と、家政婦。

いつも見た目も中身も果てしなくだらしない男達も、今日は皆真剣だ。

やけにめかしこみ、身だしなみのチェックに余念がない。

私はひとり、鬼大の焼いてくれたトーストをかじりながら冷めた目でそれらを見ていた。

「おいミナミ。ヘアスプレー貸せ」

「断る」

「断るんじゃないよ。いいから貸せ」

「触るな飛翔。妊娠する」

「スプレーが妊娠するか！」

「お前の遺伝子だけはごめんだ」

「テメーがすんのかよ、妊娠」

「うるせえよ、てめえら！今俺は精神統一中だ」

こいつらがいつもと違うのには、ある理由があった。

ある依頼人から届いた一通の手紙。

今回は護衛の依頼だった。

そしてその依頼主というのが、アカル大陸というこの世界で3番目に大きい大陸を仕切っている王女様だというのだ。

王女様が賊に狙われているらしく、蛇には蛇をということに殺し屋組織でも有名な陽炎が指名された。

その王女様、噂によると絶世の美女だとか。

スリーサイズは上から90、58、70だとか。

でもその王女様は人前に姿を表さないの、見た者はごく僅かだと言っ。
生きる伝説的美女が今回依頼人なのだから、男達の気合いが入るのも当然だろう。

「王女様口説いて逆玉に乗ればこんなクソみたいな組織からはおさらばだ……」

さつきからブツブツと馬鹿な夢見事を呟いているのは飛翔だ。

「そんなすごい王女様が、アンタみたいな下品な男選ぶわけないだろ。頼むから性犯罪だけは辞めてよ」

「おいおいレンちゃんやきもちかあ？心配しなくても俺あ一夫多妻制だから大丈夫だぜい。ま、王女様が許してくれたらただけどなあ！ギャハハ！」

「あー、ここに馬鹿がいるんですけど。くそポジティブな大馬鹿がいるんですけど」

「無視しろレン。王女のハートを射止めるのはこの俺様だ」

「あ。ここにも馬鹿」

「ああん？次期王子に向かってなんだブス」

吠えているグンゼを放って、冷蔵庫の牛乳を飲んだ。

「ねえ鬼大、その王女様の護衛って全員ですか？」

「ええ、一応全員と聞いてます」

護衛だからきつと何日かかかるだろうし。

と、いうことは……私一人でしばらく留守番！？そんなの嫌だ！餓死しちゃうよ！

私は鬼大の服をぐつと掴んで見詰めた。

鬼大は何か予感を感じ取ったのか、嫌な苦笑いを見せ、何ですか？と聞いてきた。

「私を一人にしないよね……鬼大」

「えっ」

「私を一人にしないよね……鬼大」

（大事な事なので二回言いました）

私と鬼大が見つめ合っている所へ、ミナミの声が飛んできた。

「誰が貴様のような足手まとい連れて行くか。お前は一人で囲碁でもやってる」

「一人じゃ出来ないよ！寂しくて死んじゃうよ！」

「仕方ない。ぬいぐるみ買ってやるから我慢しろ」

「お気の毒すぎるだろ、私」

しかし鬼大やミナミだけじゃなく、グンゼや飛翔にまで邪魔者扱いされた私。

まあ確かに私みたいなか弱い女子を連れて行くのは心配で仕方ないのかもしれないけど……。
すると、アルがトイレから戻ってきた。もう彼しかない。
私は真っ直ぐアルの体に突進する。

「アル！」

「わっ。どうしたんだ」

「私一人で留守番なんてヤダよ！大人しくするから連れてって！邪魔もしないし足手まといにならないように気をつけるから！」

「レン……」

アルが困ったように私を見る。

その光景を見ていた鬼大が『まるで親に捨てられる時の子供みたいですね……』と零した。

アルの手が私の頭を撫でる。それこそ子供を諭すような声音で彼は言った。

「ごめんな、レン。任務には連れて行けないよ。この前みたいな事が起きたら傷付くのはレンだろ？」

「……」

初めて任務に同行した、あの日の事が脳裏をよぎった。

泣き叫ぶ人の声と、私が殺した男の顔。

忘れたわけじゃない。でも思い出さないように、あの記憶を隠していたのも事実。

「でもレンを一人にするのも可哀想だしなあ」

そうですねえ、と鬼大。

すると、低い声でグンゼが言った。

「あんまり甘やかすんじゃないよアル。ガキじゃあるめえし。いいか、レン。俺達は遊んでんじゃないねえ。これは仕事だ。お前を庇いながら戦えばそれだけリスクを背負うことになる。もしお前が敵に捕まり盾にでもされたら、俺は間違いなくお前を殺すぜ。手段は選べねえからな」

「……」

キツイ言葉だ。でもそれは本当だろう。

俯く私に視線を合わせ、庇うようにアルが言った。

「じゃあ……そうだな。俺も一緒に残るよ」

「えっ」

はあ？と全員の声が合わさった。

「オイオイ、何言ってるんだアルちゃんよオ。王女様に会えるチャンスだぜ？」

「そうだアル。頼んでも写真なんか撮って来ないぞ」

「それに命令は『全員で』との事ですし……」

しかしアルは笑顔で言った。

「別にいいんだ俺は。レンの方が心配だから」

その言葉に不覚にもどきりとした。

な、とアルがこちらを向く。

私は素直に頷けず、眉間にシワを寄せて彼を見た。嬉しいけど、本当にいいのかな……。

準備ができ、皆がアジトを出て行く頃、私とアルは外まで見送りに出た。

あとでボスにどやされますよ、と鬼大が心配そうに言う。

「俺の分まで働いて来いよー」

「はっ。これが最後かもしれねエなア。なんせ俺は王女とあんな事やこんな事……」

「分かったから行くぞ変態」

「行ってえ！引つ張るなよミナミ！」

ミナミに引きずられて行く飛翔。

最後尾のグンゼがこちらを振り向いた。

「本当に残るつもりか、アル」

「お、心配してくれてるのか？」

アルがおどけて言うとかさず、うるせエとグンゼが言い返す。
この二人は仕事でチームを組む事が多い分、特別仲が良いんだろう。
ふと、グンゼの視線がこちらに向いた。
また文句を言われるのだろうかと思わず身構える。
しかし彼の言葉は意外なものだった。

「……さっさと仕事終わらせて、すぐ帰ってくるからよ」

「グンゼ……」

危うく、行かないでと言いつづになった。慌てて言葉を喉の奥に押し込んだものの、その表情は読み取られたかもしれない。
ふい、とグンゼが顔を背けて歩き出す。
濃い灰色の髪の毛がふわりと揺れた。

「だからあー、仕方ないだろ！レンを一人になんてできねーよ」

電話口に向かってアルが怒鳴っているのはボス。

アルだけ仕事に行かなかったことを責められているのだ。

私は何だか申し訳なくて、ソファアの上で正座してじっと大人しくしていた。

アルは相変わらずボスとの言い合いを続けている。

「え？何でだよ。別にいいじゃん、俺が好きでやってる事なんだから……ってバカそういう意味じゃねえよっ！は？代わらねーよ！つか給料払え！」

しばらく同じような台詞を繰り返してから、アルが溜め息を吐いて私に電話を渡す。

受け取ると、ボスが話したいって、と短く言った。

「もしもし……ボス？」

「ああ、レン。お前なあ、アルの事あんまりたぶらかすんじゃないぞ。あいつ純粹なんだから」

「いや、何の話……」

「とにかくな、組織にとって今回の仕事はかなりデカいんだ。王女を狙う程の賊だ。今分かってるだけで、敵さんこちらの5倍以上の人数だ。ただでさえ俺達は少数だしアルは大事な戦力だ。レンには分からないかもしれないけど、ガキの遊びじゃないんだよ」

「うん……」

「だから、アルに王女の元へ向かうようにレンから説得してくれないか？頼む」

ボスの真剣で、どこか威圧的な低い声。

私、やっぱり馬鹿だ。

邪魔する為にここにいるんじゃないのに……。

電話を切ったあと、私はアルに言った。
アルは、心配そうな目で私を見ていた。

「ねえアル。ごめんね。私のせいで仕事休ませて」

「気にするなよ。レンのせいじゃないし」

「でも……アルはみんなと一緒に仕事へ行つてよ。今から追えば間に合うし」

「馬鹿言つなつて。ボスに何か言われたんだろ？」

「ううん。違うよ」

「飯どうするんだよ。もしこのアジトに敵が来たら……何か、万が一の事があつたら誰がレンを守るんだよ。レンは俺達とは違う、普通の女の子なんだ。何日かかるか分からない仕事に出て、レンはその間ずっと一人だろ。知らない世界に一人にされて……そんな俺は嫌なんだよ」

アルの優しさが胸を刺した。

アルの言葉はいつも優しい。でも、もうこれ以上甘えるわけにはいかない。

「ご飯は、自分で何とかする」

「冷蔵庫にあるもんが無くなつたらどうやって海の向こうまで買いに行くんだ」

「それでも……何とかする。敵だって、普通はこの島には辿り着けないから大丈夫だよって、アル言ってたじゃん」

「そうだけど、」

「お願い。邪魔したくないんだ」

暫くの間、どちらも言葉を発さず時間だけが過ぎた。居間の空気が重い。

みんながいたから私はこの世界でも生きてこられた。本当に一人で大丈夫なのか、不安だけどこればかりは仕方ない。

ボスの言葉を聞いて、私は気付かされた。

私は君たちのお荷物になりたいんじゃないんだよ。仲間になりたいって、思ったんだ。

みんながいない間、アジトの留守を守る仲間に。

「……分かったよ」

先に折れたのはアルだった。

そして彼は、脱いでいたスーツのジャケットに袖を通した。

「せめてこれ持っててくれ」

そう言って渡された携帯電話をぎゅっと握り締めて強く頷いた。

「気をつけてね……アルも、みんなも」

「おう。すぐ帰って来るよ」

太陽に照らされたアルの笑顔が、ジャングルの向こうに消えて行った。

一人になった私はまず、冷蔵庫を開けて中身を確認した。よし、鬼大の素晴らしい家事センスのおかげでかなりの食材が入っている。元々大食らいの男所帯。

これくらいあれば私一人で2週間は持つだろう。

少し安心した私は、アジトの掃除をすることにした。こんな時くらい役に立たないとね。

掃除道具を探しに廊下に出る。

しんと静まり返った暗い廊下は、やっぱり寂しかった。

その奥を進み、物置を見るけど肝心の掃除道具が見当たらない。

「もー。どこにあるのかな」

と、突き当たりの壁に手をついて体重をかけた瞬間、壁が開いてガクンと体が下がった。

「えっ」

突然の事に叫び声すら出せず、突いていた手を引つ込める間もなくそのまま倒れた。

これが噂の忍者屋敷のからくり扉ですか？

「いたた……」

強く打った肩をさすりながら見上げると、そこには階段が姿を表していた。

これってまさか……前にグンゼが言ってた二階に続く隠し階段？絶対そうだ。そしてその上には、ボスの部屋があると言ってた。

ゴクリ、と生唾を飲んだ。

私の中の好奇心が疼き出す。何か、予感がした。

もう痛みなんてどこかへ行ってしまった。

私はぎゅっと拳を握り締め立ち上がると、一段一段、ゆっくりと階段を上り始めたのだ。

第22話：ふつつかものですがお世話になります

「これがボスの部屋か…」

二階の奥には確かに部屋があった。鍵はかかっておらず、ドアを開けると嫌な音が響いた。

ホコリ臭いその部屋には机がひとつとベッドしかない。しかも大量に積まれた書類でそれらも埋め尽くされている。

適当にそこら辺の書類を拾って見てみたけれどどれも暗号のような独特の文字で読むことができなかった。

「つまんなーい」

この部屋を見るとボスが多忙なものも納得がいく。

そういえば、殺し屋以外にも色んな仕事してるって聞いたしなあ…

何気なく机の引き出しを開けてみた。

「本…？あ、手帳か」

深い緑色の小さな手帳だった。

好奇心が先に立って、恐る恐る手を伸ばした。

どうせ読めない文字が書いてあるんだろうと思ってパラパラと中をめくってみたが、何も書いていなかった。

随分古いのか、紙は茶色く変色しているし、破れたりもしている。

ふと、途中のページに何か書いてあるのが見えた。どうせまた読めない文字だろうと思ったけれど、それは私のいた世界と同じ文字で書かれた文章だった。

今日、久しぶりに彼女の夢を見た。

彼女と離れてもう三十年ほど過ぎただろうか。もう忘れてしまった。今彼女は結婚しているのだろうか。それとも二度と還らぬ俺を待っているのか。

今更、何者にも未練は無いが、願わくばもう一度逢いたいと思う。夢のおかげで懐かしい名前を思い出した。あやのこと、そして杉原達也という男が生きていたということは、一生忘れないでおこう。

「日記、かな」

ボスが書いたのだろう。あやって誰かな。それに、

「杉原達也……」

私の住んでいた世界にいそうな名前だ。妙な胸騒ぎがした。いろいろと引つ掛かるところがある。

三十年、とボスは書いている。でもどう見てもボスの見た目は20代だ。若作りだったって限界がある。なのに【あや】と離れて三十年、というのはおかしい。

何か分かりそうな気がするのに、今一つぼやけている。

「戻るっ……」

何だかここにいちゃいけない気がした。急にこわくなって、私は慌ててボスの部屋を飛び出した。

居間に戻って少し経った頃、アルに渡された携帯電話がけたたましく響いた。驚いて電話に出ると、いつか聞いた透き通るような声。

「レンさん、僕です、キリオです」

「え、なんで？」

思わぬ人物に、私の声は1オクターブ上がった。

「話はあとです。今すぐアジトの外へ出てください」

「え？あ、はい」

携帯を片手に言われるがままに玄関を開ける。その瞬間、私の頭上に被さる大きな影。見上げると、上空にはくそデカイ飛行船（のような飛行機のような）

あんどりと口を開けてそれを見ていると、誰かがこちらに向かつて手を振っていた。まさか。

「レンさん!」

今度ははっきり聞こえたりアルなキリオクんの声。携帯の通話は知らぬ間に切れていた。

「え、え、急に?なんで?」

私も負けじと叫び返す。

「アルさんから連絡があつたんです!レンさんが一人だから、迎えに来ました!」

「アル……」

心配性のアルが、私を一人にしないようにキリオクんに頼んだんだ。それを思つと、彼の優しさに泣きそうになつた。

「レンさん、着陸するんでこの木とかジャングルとかちよつとどかして下さい」

そんな無垢な顔で言われても。

「そりゃ無理だよあんた」

「えー、じゃあいつたん、砂浜に戻ります」

しびしび、といった感じで、キリオクンに乗せた飛行船は大きな音

をたてながら離れて行った。

私はアジトの扉を閉めてからそれを追いかける。ジャングルをかき分けた先の真っ白な砂浜に、銀色で楕円形の飛行船が、海をバックに着陸していた。え、これが噂のUFO？

その中から出てきたのは宇宙人ではなく、黒髪の美少年。初めて会った時と同じ、純粹そうな笑顔が太陽の日を浴びて異常に輝いている。

私はキリオくんのそばまで駆けて行った。サンダルにまとわりつく砂が鬱陶しい。

キリオくんは嬉しそうに私の手を取り、飛行船へ乗り込もうとする。

「キリオくん、アルに言われて来てくれたの？」

「いえ、アルさんには、レンさんがしばらく一人でアジトにいてことしか聞いていません。今ここにいるのは僕の意味ですよ」

う。恐ろしい少年。お姉さん危うく心持ってかれそうになったよ。

引っ張られるがままに中へ乗り込む。銀色の船体の中はひんやりと涼しかった。

「よう、また会ったな」

操縦席にいたのはツナミさんだ。強面のキリオくんの上司。

私とキリオくんが後ろの座席に座ると、自動的にドアは閉まった。そしてゆっくりと動き出す。

小窓から外を見下ろすと、小さくなっていく陽炎たちの島。空を飛ぶような感覚に、つい興奮する。それを見てキリオくんは目を細めた。

「可愛いなあ、レンさんは」

「……」

これじゃ、どっちが年下か分からない。

「レンさんは陽炎たちが戻るまで、カリブで預かります」

「それってまさか、キリオくんたちの組織？」

なんてことだ私。殺し屋組織をはしごしちゃうよ。まさかの二件目だよ。

「ええー……でも、悪いよ」

前にカリブは大きな組織だって言ってたし、なんか気使いそう。陽炎はあんなだからいいけど。

私の不安を読み取って口を開いたのは、キリオくんではなくツナミさんだった。

「大丈夫だ。うちは陽炎ほど血の気が荒い奴ばかりじゃねえよ。それにうちのボスにも、陽炎のメンバーにももう話をつけてある」

「え、そうなの？」

「奴等もその方が安心して仕事に打ち込めるだろ」

ツナミさんは、顔は恐いけど優しい人みたいだ。
キリオくんは私の隣で、そういうことです、と微笑んだ。

「あの、なんか……重ね重ねすいません」

「レンさんは謝らなくていいですよ。女の子を一人で放っておく
あの人達が悪いんです」

「でも、」

「大丈夫です。あとで陽炎のボスからたんまりお小遣いもらいます
から」

語尾にハートマークをつけてキリオくんは言う。さすがちゃっかり
してるよ。将来が楽しみだね、こりゃ。

「ツナミさん、ちんたら運転してないでもっとスピード出して下さ
いよ」

「上司を顎で使うんじゃないよ。始末書書かせるぞ女顔」

キリオくんにとってのタブーをさらつと言ったよこの人。
キリオくんは一瞬氷のように冷たい視線をツナミさんに送ったあと、
またすぐに笑顔になる。

「レンさん、ツナミさんは昔陽炎に入りたかったんですよ」

「え、そうなの？」

操縦席から、ツナミさんの怒鳴り声が響く。相当触れられたくない過去のようだ。

ツナミさんには悪いけど、気になる。

「でもね、ツナミさん人相悪いから陽炎のボスに『何睨んでんだこのクソガキ』ってボコボコにされたらしいんです。笑えますよね」

うん、それは恥ずかしいね。確かに触れられたくないわカツコ悪いわ。

「キリオてめえ、二度とその口きけねえように歯全部抜き取ってやるるか」

「いいですけど、そんなことしても過去は変えられませんよ」

「いいんだよ俺は！別に陽炎みたいな無給同然の貧乏組織に入らなくても！今はカリブで満足してんだ！」

「はい。知ってます。僕もツナミさんとカリブで働けて幸せですよ」

キリオくん、可愛いこと言うなあ。

ツナミさんも少し戸惑っている。

「な……なんだよ急に。いきなり素直だな」

「だって冗談ですもん」

「殺す。絶対いつか殺す」

飛行船を降りた島には、見上げるほど大きな建物がどっかりと腰をおろしていた。コンクリートで作られたお城のようだ。

「ようこそ、カリブへ」

確かに、陽炎の組織とは大違い。ていうか、本来アジトってこうあるべきじゃね？あそこ、普通の家じゃん。

大きな門の前には二人の若い男が椅子に座って話していた。ツナミさんとキリオくんに気付くと話を止めて挨拶をする。

「あ、ツナミ様、キリオさんちーっす」

「今お帰りッスかあ。ご足労したあ」

え……ヤンキーですか？

一人は短髪で無精髭が生えている。もう一人は金髪で前髪が長い。気だるそうな雰囲気は同じだ。

「あれえー、女の子だ」

「マジツスか。今からしげこむんスか」

これツスかこれツスか、と言いながら短髪は小指を立てた。どこのエロ親父だよ。

ツナミさんが溜め息を吐きながら私を紹介する。陽炎から預かった女の子だと。

どうやらこの若い男達は門番らしい。何ひとつ守れそうにないよ。軽いノリで誰でも中に入れちゃいそうだよ。

門番が門を開け、中に入る。建物の入口まで、また随分歩いた。陽炎とは金のかけ方が違う。

すれ違う人達は、ツナミさんとキリオくに頭を下げていく。二人は適当に流しながら歩き続けた。

どうやら、カリブ内での二人の地位は高いらしい。

ツナミさんはともかく、キリオくんはまだ子供なのにすごいな。

建物の中は、飛行船と同じく銀色だった。壁も床も天井もだ。ピカピカに光っている。

「わー、なんか滑りそうだね」

「その時は僕が支えます」

キリオくんが私の手を握る。どうしてこの子はいちいち私をドキドキさせるのだろう。

まずはボスに挨拶、ということ以最上階へ。

エレベーターの最上階と、カリブのボスの部屋は直結しているらし

い。
チン、と音がしてエレベーターは止まった。私は二人に挟まれるようにして立っている。
う、緊張してきた。

「エス、連れてきました」

ツナミさんが始めにその部屋に入った。やはり銀一色。半円型の部屋は、これこそ宇宙船のような印象。机も棚も何もかもが銀色。趣味なのだろうか。
エス、と呼ばれた人物は巨大な水槽の前にいた。こちらに背中を向けて立っている。

「あの、はじめまして」

私がそう言うと、その人はゆっくりと振り返った。
黒い髪に浅黒い肌で瘦型。歳は40代前半といったところ。穏やかに微笑むその人の片目は白く濁っていた。
この人が、カリブのボス。なんだか物凄いオーラを感じる。

「はじめましてレンさん」

彼が一言喋るだけで周りの空気が大きく歪む。私は少し怖くて、つい後退りしてしまった。
それを見て、彼は笑う。

「感受性の強いお嬢さんだ。あの陽炎達の仲間だから当然なのかな」

「あの……」

「身構えなくていいよ。とって食ったりはしない。うちも陽炎には世話になってる。安心して羽を伸ばしてくれ」

以上、とエスが言うと、両脇にいた二人が同時に頭を下げた。キリオくんもツナミさんも初めて見る真剣な顔。私もつられて頭を下げる。

約一分弱で、その部屋をあとにした。

「あー！緊張したあ」

「ふふ、エスはレンさんを気に入ったみたいですよ」

「え、そうなの？」

「ええ。何となく分かるんです。ねえ、ツナミさん」

キリオくんが言うと、ツナミさんも頷いた。なんだか分からないけど、取り敢えず良かった。

「そうだレンさん。レンさんにとっておきのものを見せてあげますよー」

第23話：かなしいけども

「わー！すごい」

眼下に広がるのはどこまでも続く海原。暖かい風が私の髪を撫でた。穏やかな波が、キラキラと宝石を散りばめたように輝いている。キリオくんが連れてきてくれたカリブ本部の高台からは、それがよく見渡せる。

地平線をじっと見つめていると、隣に立つキリオくんが呟いた。

「これをレンさんに見てほしくて。僕の大切な場所なんです」

「綺麗だね」

キリオくんは嬉しそうに笑った。それは紛れもなく、14歳の少年の屈託のない笑顔。とても殺し屋には見えない。

「この海の間には、僕の生まれ故郷の島があるそうなんです。見えないけど……」

今度は少し寂しそうだ。

そっぴいえば、キリオくんの家族はどこにいるんだろうか。無神経な私が何も考えずに尋ねると、明るい声で彼は言った。

「死にました」

「え、」

しばしの沈黙。言葉が見つからずに、固まった。しまった、思ってももう遅い。

けれど悲しみひとつみせないキリオくんは、私よりもずっと大人だ。小さな声で、聞いてくれますか？
と言っ。

「小さな島の、小さな村に僕と、僕の家族は住んでいました。だけどある時、金目当てのならず者達に村は襲われた」

キリオくんの瞳には何の色も見えない。憎しみも、悲しみもない。少なくとも、今この瞬間は。

「その時、偶然その村に立ち寄った若き日のエスが、ならず者達を皆殺しにしてくれたんです。村は襲われた後でしたが。僕の母親は僕を抱いたまま、瓦礫の下敷きになっていた。エスが母の腕から僕を抱き上げた瞬間、母は安心したように息を引き取ったそうです」

「それで……キリオくんはエスに拾われてカリブにいるんだね」

「はい。僕は当時1歳くらいで、母の記憶はほとんどありませんが、エス曰く優しい目をした女性だったと」

自慢気に話すキリオくん。

私はなぜか泣きそうになってしまった。

「母は自分の命を犠牲にしても僕を生かしてくれた。こんな誇らしいことありません。僕はエスが拾ったこの命を、大切なものを奪われた人たちのために使っんです」

キリオくんが、なぜ進んで殺し屋をやっているのか分かった気がし

た。

カリブは殺し屋専門の殺し屋。

彼は母親の弔い合戦をしているのだ。
きっとそれは、死ぬまで続くのだろう。

「前にレンさんは、僕に教えてくれましたね。レンさんの世界にある、ホウリツということを」

法律。ああ、そんな話もしたような……。あのとき私は一方的に、キリオくんの意見を否定したっけ。

「僕はあれから考えたんです。もし、この世界にホウリツというものがあれば、僕の母は殺されなかっただろうか」と

「……どうだろう。分かんない。法律は、絶対じゃないから」

殺されていなかったかもしれないし、殺されていたかもしれない。警察や法律があったって、人は人を殺す。暗いニュースは毎日新しく入れ替わる。

もう私には、何が正しいか分からない。

「でも、私にだって、これだけは分かるよ。キリオくんのお母さんは、キリオくんのことをすごく愛してたんだね。その真実は、誰にも殺せないよ」

キリオくんの瞳が猫のように丸くなった。そして私を見つめる。
何をするかと思えば、その細い腕に抱き締められた。

「レンさん、」

「え、どうしたの、いきなり……」

「レンさんはどうしてこの世界に来たの」

「いや、どうしてって……事故？」

パツとキリオくんは体を離す。そして私の目を再び見つめたあと、いたずらっぽくニヤリと笑う。なんて魅力的な表情をするのだろう。その彼の視線は、ゆっくりと地平線の向こうへ。

「僕もいつか、レンさんの世界に行ってみたいな」

キリオくんの横顔は、今日一番の太陽だ。

高台から中へ戻ると、銀色の廊下に腕組みしたツナミさんが立っていた。

キリオくんが深い溜め息を吐く。

「ストーカーですか」

「馬鹿か。ジョーから呼び出した」

ツナミさんの言葉に益々険しくなるキリオくんの顔。

「やだなあ、面倒だよ。多分また任務のことで説教だし。ツナミさん代わりに行ってきて下さいよ」

「断る」

「はあ、せつかくレンさんがいるのにな」

名残惜しそうな表情を見せてから、キリオくんはその場を立ち去った。

私はツナミさんと二人きりなり、若干気まずい。それは相手も同じなようだ。

「……キリオが戻って来る前に、中を案内するよ」

「あ、はい」

早足のツナミさんに置いていかれないよう追いかける。その間も組織内の方々からツナミさんへの挨拶は途切れることはなかった。どれだけ人数多いんだ、カリブ。

「キリオくん、まだ子供なのにしっかりしてるね」

「ま、性格歪みまくりだが頭はいいな。あいつはカリブ期待のホーブだし。相当あんなになついているな」

「ええ、有りがたいことに」

「あいつ、ガキの頃から殺しの英才教育ばっか受けてっし才能もある。あの歳で今の地位まで上り詰めたのは異例だよ。カリブは上下関係が厳しい実力主義だから、あいつを蹴落とそうと企んでる奴は組織内にゴマンというけどな」

「なかなか……過酷だね」

「ああ。だから心休まる時つつーもんがねえのさ。大抵殺し屋になる奴なんてのは元々ならず者や盗賊の端くれだ。俺もカリブに入る前は、盗みを繰り返して気ままに生きていた。だがキリオは違う。殺し以外の生き方を知らねえし友達もいねえ。だから余計に、仕事以外で関わってくれるあんたが嬉しいんだろう。俺は、あいつのあんな子供みたいな表情、初めて見るよ」

ツナミさんは、何だかんだでキリオくんのことを気にかけているのだ。見せない優しさってやつだね。感動的だよ。

「私も、キリオくんとなると弟ができたみたいで嬉しいよ。いつか私の住んでる世界にキリオくんを連れて行って、思いつきり遊びたいな。殺しとか、仕事とか、そういうのがない所で」

キリオくんは男の子だから、スポーツ観戦なんか好きかもしれない。遊園地とか、ジェットコースターとか、ね。

私が妄想を膨らませていると、いつの間にか立ち止まっていたツナミさんが、少しだけ笑った顔を見せた。

「それ、あいつの前で言っちゃってくれよ」

「ツナミ様！」

エレベーターに乗り込もうとした時だった。

慌てた様子で走ってきた一人の少年が、ツナミさんの前で急ブレーキをかける。

キリオくんより少し年上だろうか。鋭い目をした少年だ。

彼は私の存在など視界に入っていない様子で、ツナミさんをじっと見つめる。

「なんだ、ゼロ。騒々しいな」

「ツナミ様！次期の幹部会で、キリオが総隊長に昇格するというのは本当ですか？」

「ああ。俺の推薦だ。不満か」

「あいつに集団行動はどうかと。それもいきなり隊長なんて。いくらツナミ様の推薦でも隊員は戸惑います。」

「そうは言ってもなあ……」

ツナミさんは困ったように頭を掻く。

「他にもそう思っているメンバーは何人もいます。もう一度考え直して下さい。では」

それだけ言って彼は早足に去っていった。
なんか、堅そうな子だな。

エレベーターに乗り込んだあと、私はツナミさんに尋ねた。

「総隊長つてなに？」

「え？ああ、うちの形態だ。上からボスのエス。次にボス直属、幹部と続く。その下が一軍から七軍までで構成されている。一番下は見習い。総隊長はその一軍から七軍まで全てをまとめる役。ほとんどのメンバーはその軍に振り分けらるているが、今までキリオだけは特別枠だった」

「特別枠？」

「逸材だからな。どの軍にも属さず、好きに仕事して下さいってやつだ」

なるほど。キリオくんは特別なのか。だからあんなに自由な子に育つたんだな。納得。

「ま、あいつももうすぐ15だ。チームワークは学んだ方がいい。あいつはどうも協調性に欠けるし。これからのカリブの将来を見据えてだ。で、俺をはじめとする幹部達で話し合った結果、キリオを全軍総隊長のポストに置くことにした」

「じゃあすごい事なんだね」

「ああ、あの歳で総隊長になる奴はまずいねえだろう。キリオ以外は」

でもなあ、とツナミさんは溜め息を吐く。

「キリオのことをよく思っていない奴は確かに多い。荒れるぞ、こりや」

ツナミさんも大変だ。苦勞が顔に出ている。

陽炎はそういうのがないから全員特別粹みたいなものだけど。まああいつら誰かに従うようなタマじゃないしな。あ、一人いたわ家政婦。

ていうか、元気かなあいつら。

「さっきの子は？」

「ゼロか。あいつもまだ16のガキだが、一軍の特攻を務めてる。自分より年下のキリオに越されて気に食わねえのさ。あんたんとこはいいいな、気楽で」

「そうだね。あいつら基本的に自分以外には興味ないから」

「だろうな」

順調に上っていたエレベーターが急に止まった。ドアの向こうにいたのは、キリオくん一人だった。

「レンさん、ツナミさん。どうしてここへ？」

驚いたように目を丸くしている。
答えたのはツナミさんだ。

「お前こそ、もう話は終わったのか。俺は今から中を案内しようと思つてたところだ」

「そうですか、ご苦労様でした。ここからは僕が引き受けるのでツナミさんはとっとと仕事にでも行って下さい」

「てめえ……」

いつか、殺す！と叫びながら去っていくツナミさんの背中を笑顔で見送るキリオくん。

再びエレベーターに乗り込み、今度はゆっくりと降り始めた。

「レンさん、疲れたでしょう。カフェでお菓子でも食べませんか」

「食べる！」

キリオくんはまた嬉しそうに笑う。この子、以外に尽くすタイプだな、と思つていると、またエレベーターが止まった。まあ、これだけ人がいるんだから当たり前か。

しかし、乗り込んできたのは先程

ツナミさんに抗議していたゼロだった。彼はキリオくんを見ると、鋭い目に光を宿す。敵意ムンムンといったところか。

一気にエレベーターの中がピリピリとした雰囲気になる。

ゼロが言った。

「ふん。いい気なもんだな。女を連れ込んで呑気にデートか」

む。嫌な言い方だよ。絶対こいつ性格悪いよ。

それに対して、キリオくんは冷静に返した。

「この人は陽炎からのゲストだ。お前が失礼な口をきいていい相手じゃない」

「恐いねえ。さすが次期総隊長は迫力が違うわ」

「僕に嫉妬するのは勝手だけど、自分の実力不足も自覚したらどうだ」

ゼロの目付きが変わった。物凄い剣幕でキリオくんを睨む。平和主義な私はハラハラしながら二人を見つめることしかできない。

「調子に乗ってんじゃねえぞ、キリオ。絶対引きずりおろしてやるからな」

エレベーターが止まり、ドアが開く。キリオくんは私の手を掴み、出ようとした。そして去り際に、彼得意の綺麗な笑みをゼロに見せる。

「キリオ様、だろ。二度は言わない。次は殺すよ」

ゼロが言い返す暇もなく、ナイスなタイミングでドアが閉まる。私はほっと息を撫で下ろした。

「ごめんなさい、レンさん。嫌なところ見せちゃいましたね」

すぐにいつものキリオくんだ。

私は首を横に振って笑った。

何だか別人みたいだった。とても14歳には見えないその貫禄。少し怖いと思ってしまったのも、事実。

キリオくんはずっと、こういう環境で生きてきたんだ。

遊ぶことも知らないまま、彼は順調に歳と殺しの経験を重ね、大人になっていくんだろうか。

(……そんなの嫌だな)

そうは思っても私にはどうすることもできない。これが、キリオくんの生き方なのだから。彼もそれを十分受け止めている。

だけど…

『僕もいつか、レンさんの世界に行ってみたいな』

悲しみを含んだ瞳でそう呟いた彼の言葉も、真実だと思うんだ。

第24話：三度目の正直

すっかり日も沈んだ頃。

私はキリオくんと組織内にあるカフェにいた。

キリオくんが私の世界のことをやけに聞きたがるので話していたら、あっという間に数時間が過ぎていたのだ。

キリオくんは私の言葉に目を輝かせる。

彼が特に気に入ったのは、学生の象徴、体育祭の話だった。

「へえー、体育祭かあ。楽しそうなことをするんですね。ガッコウという組織は」

「めんどくさい時も多いけどね」

「たとえば？」

「んー、まず毎朝起きるのがめんどくさい！」

「あはは。それガッコウ関係ないじゃないですか。面白いなあレンさん」

「えー、関係あるよ。遅刻したら怒られるもん。他にもいろいろ決まりがあつてさー。楽しいけどほんと、めんどくさい」

「分かります。組織ってそういうものですよ。カリブでも、規律を乱した者は3日間独房に入れられて拷問を受けるんです」

「ごめん。怒られるとか甘えたこと言ってまじごめん」

カリブに比べたら、学校は保育園です。すいませんでした。なんかすいませんでした。

すると、ツナミさんがこちらへ歩いてくるのが分かった。
あ、と言うと、キリオくんもつられてツナミさんの方を見る。

「キリオ、ちょっといいか」

「なんですか、ツナミさん」

「いいからこっち来い」

仕方ないなあとかぼしながらキリオくんは立ち上がる。

私に向かって微笑んだあと、すぐに戻りますと言いつつ残してツナミさんとカフェを出ていってしまった。

一人残された私。

カフェには数人ほど他にもいるが、誰も私の存在など視界に入っていない。

仕方なく待っていると、十分くらいしてからキリオくとツナミさんが戻ってきた。

いつも冷静なキリオくんの表情に、何だか焦りが見える。

「レンさん、僕と一緒に来て下さい」

「え？あ、うん」

カフェを出て、廊下を早歩きで進んでいく。

エレベーターで一番下までおり、建物の正面出入口から外に出て、二人は門の方に向かった。私も黙ってついていく。

「ねえ、どこに行くの？」

「実はさっき、この内部に侵入しようとした男がいて。門番がそいつを捕まえたんですが……」

門番？あのチャラそうな門番が？意外にやるな、あいつら。

でも、どうして私まで？

考えているうちに門の近くに着いた。

確かにそこでは、短髪の方の門番が一人の男を足蹴にして押さえている。短髪の下で力なく倒れているのは木の枝のように瘦せ細った男だった。

しかし、その手には鈍く光るナイフが握られている。

「あ、こいつツスよ、こいつ。あー、侵入者とか久しぶり。マジ焦ったツスわあー」

「いいからこいつが持っていたものを見せろ」

ツナミさんが言うと、もう片方の門番があるものをツナミさんに渡した。

「これだ」

ツナミさんがそれをキリオくと私に見えるように突き出す。私は思わずあつと声をあげた。

「これ……私の写真！」

そう、いつかキリオくんが見せてくれた私の盗撮写真。え、でもよく見たら可愛い。この私、ちょー可愛い角度で撮られてる。誰が撮ったか知らないけどカメラマン、ナイス。

キリオくんは顔をしかめて写真を見つめたあと、倒れている男の髪の毛を乱暴に掴んで引き上げた。

「どういっつもりだ。なんでお前がこの写真を持つてる」

ひどく冷たいキリオくんの声。

男は見た目が子供だと油断したのか、ニヤリと笑ってから、ペッと地面に唾を吐いた。

キリオくんはそれを見てから、男の髪の毛を掴んだまま思いつきり地面に打ち付けた。男が叫び声を上げると同時に、男の額から血が吹き出す。

痛々しい姿は見ていられなかった。

「よく考えて返事をしろ。二度は言わない」

男はすっかり怯えきったようだった。震えながら血塗れの顔を上げる。

「俺は頼まれたただけだ！その女を連れてくるように」

「誰に」

「女だ」

「女？」

「ああ……女、いや、男だったかな？」

「おい、ふざけてると……」

男は急に高笑いをはじめた。気が狂ったように同じ言葉を繰り返したあと、飛び出しそうなくらい目をカツと開く。そしてぐったりと首をうなだれ、動かなくなった。全てが一瞬だった。

キリオくんは冷静に男の首筋に指を当てた。

「死んでますね」

その言葉を聞いて私は反射的に目を瞑る。

それに気付いたツナミさんが私の肩を支えて離れた場所に移動させてくれた。

「多分、自白すると死ぬように何らかの仕掛けをされていたんでしよう。薬かな？ツナミさん、こいつ一応解剖班に回しましょうか」

「そうだな。おい、あと頼んだぞ」

門番は軽いノリで返事をする。そして、私たち三人は、その場から離れた。

私とキリオくんはカフェに戻り、一休み。ツナミさんはふらっとどこかへ行ってしまった。

私はテーブルに突っ伏したまま動かなかった。

「レンさん、すみません。怖い思いをさせてしまって」

優しいキリオくんの言葉も、今は何だか遠くに感じる。

この世界に来て、人が死んだ瞬間を見たのは三度目だ。私はショックで、しばらく口がきけなかった。

死ぬ直前、男の開かれた眼に自分の姿が写っていたことが恐ろしい。そして男に対してひどく残酷な目をしたキリオくん。彼の冷たい声には、一切の感情が込められていなかった。

初めてキリオくんに会った時にも感じた、あのねばりつくような恐怖。それを再び間近で見てしまった。

やっぱり、この子は、殺し屋だ。

きつと今更、普通の中学生のようにサッカーをしても野球をしても私の隣で微笑む少年が最後に行き着く場所は結局同じなのだろう。

次に私が顔を上げたとき、ガラス張りの窓から見える外には月が出ていた。

「え、夜!？」

「そうですよ」

キリオくんは変わらずに微笑む。どうやら間抜けな私はそのまま眠っていたらしい。何てことだ。

「ごめん！起こしてくれたら良かったのに！」

「いえ。嫌なことがあった時には、寝るのが一番ですから」

そんなことを真面目に言つてのけるキリオくん。やはり大人だ。少なくとも私よりは。

「レンさんの寝顔も見れましたしね」

「……よだれ垂らしてなかった？」

「……いえ。別に」

おーい。何で目を反らしたの？ねえ何で？

すると、電子音がどこからか聞こえてきた。どうやらキリオくんの携帯電話のようだ。

彼は電話に出てすぐ、ものすごく嫌そうに美しい顔を歪めたあと、携帯を切った。そして溜め息。

「はあ……」

「ど、どつしたの？」

「実は門番からまた侵入者が来たとの報告を受けたんです」

「え！」

「しかも迷惑なことに、僕の名前を出してるみたいで……」

今度はキリオくんを狙った輩？本当に殺し屋組織って大変だな……。

「……って、お前らかーい」

門番のもとへ行くと、五人の馬鹿面が見事にズラリと並んでいたことに驚いた。

そう、門番がキリオくんに報告した侵入者とは、陽炎達のことだったのだ。

しかしみんなえらくボロボロ。揃いのスーツは破れや汚れが目立つ。いつになくだらしない。

門番二人が困ったようにこちらをみる。

「あー、キリオさん。どうかしてくださいよ、こいつら」

「なんかー、キリオさん育てたのは俺だとか言ってんすよ」

誰がだよ。

「おー、レンちゃん。俺に会えなくて寂しかっただろー」

飛翔が下品に笑いながら言った。

「いや、あんたのことなんかまじで１ミリも考えてなかったよ」

すると、今度はグンゼがふてぶてしく言った。

「おうブス。迎えに来てやったぞ」

「開口一番がそれかい」

ミナミは眠そうに目を擦り、鬼大はにこにこ笑っている。アルは私を見て安心したようだった。

「しぶとく生きてたんですか、みなさん」

キリオくんが素晴らしい笑顔で皮肉る。さすがだよ。

「しかし初めて来たなあ。カリブ本部」

「そうでしょうね、別に来ていただく用事もなかったの」

「お前はとことんムカつくな、キリオ」

大人げないよ、陽炎。

するとそれまで黙っていたミナミが口を開いた。

「せっかく来てやったんだ。晩飯食わせろ」

「頼んだ覚えはありませんが」

「火つけるぞ」

「新手の嫌がらせですか」

キリオくんは濃い溜め息を吐いたあと、分かりましたと頷いた。

そして、なぜかカリブの夕飯にご一緒させて頂くことになった一同。鬼大は、久しぶりに人の手料理が食べられると喜んでいた。健気なやつだよ。

それを見ていた門番二人が不思議そうに訪ねる。

「もしかして、キリオさんの友達っすか」

「僕にこんな下品な友達はいない」

「はあー？こっちこそ願ひ下げだよ、なあゲンゼ」

「たりめーだ。俺らを誰だと思ってやがる。天下の陽炎だぞ」

ゲンゼは得意気に髪をかきあげる。

門番はマジっすかマジっすかとうるさい。

「そういうことで、俺ら次から顔パスな」

「うちの門番に変なこと吹き込まないで下さい、ゲンゼさん」

こうして迷惑な大人たちは、門をくぐった。

第25話：おうちに帰ろう

キリオくんのはからいにより、私たちには大きな部屋が用意された。馬鹿どもが騒いでも大丈夫なようにと。

建物全て銀色で統一されていたのに対し、ここは壁も天井も普通のクリーム色。大きな丸テーブルが中央にあり、備え付けのチェアは細かな装飾が施され、豪華だった。

「こんな普通の部屋もあつたんだね！」

私はぐるぐるとその部屋を見渡して歩く。

「ええ。空き部屋なんです。すぐ料理を持ってこさせますね」

そしてますます調子に乗りはじめる飛翔。

「おい、アル。キリオの部屋探しに行こうぜ」

「めんどくせーし何より興味がねー」

「おまつ……！この女顔がエロ本見てんのか見てねーのか興味ねーっていうのかよー！」

「ねーよ」

アルが呆れたようにイスに腰掛ける。

ミナミは既に席に着き、難癖つけて鬼大をいじめている。

「飛翔さん、出口はあちらですよ」

「おい、露骨に帰そうとすんな」

「……チッ」

こいつらといると、キリオくんの腹黒い部分が露になってくるよ。

「ていうかさあ、君たち仕事は？王女様のハート誰が射止めるか争ってたんじゃないの？」

私も席についた。するとアルが笑う。

「レンが心配で、みんな超特急で片付けてきたんだよ」

「そうそう、コイツが早く帰るってダダこねるからよオ。なあ、グンちゃん？」

そう言いながら、飛翔がグンゼの肩に腕を回す。グンゼの表情が途端に不機嫌になる。

「はあ！？ふざけたこと言ってんじゃねーよ！触んなー！」

「照れんなくて！心配だったんだろオ？」

「誰がこんな女心配するか。おい、てめーも勘違いしてんじゃねーぞ、ブス」

するわけないだろ、癖毛。

「で、王女様はどうだったの？誰が射止めたの？まあ、どいつも無理だと思っけど一応聞いとくよ」

すると、それにはミナミが答えた。

「あんなもんだの噂だ。実際は真逆だった。どうやら婿が欲しくて王女の側近が流したガセらしい。俺の方が百倍美しかったというのはわざわざ言うことでもないな……」

「本当に言うことでもないよ」

ああ、でも納得。だからこいつら仕事切り上げたのか。これだから男って……。

「そうなんだよオ。せっかくくどく気満々だったのによオ。しかもすっげー態度わりーんだ、これが」

「ふーん」

こいつらにも一応、好きなタイプとかあるんだろうか。まあ、絶対に興味ないけど。

すると、部屋の扉が開いた。

入ってきたのは、三人のシェフ。

みんなそれぞれ、たっぷり料理の乗ったワゴンを押している。いい匂いが鼻をかすめる。随分豪勢な。

すると、後ろからはツナミさんが現れた。

「よう。エスから目一杯もてなせと言われてな。カリブ自慢のシェ

フが腕を奮ってやったぞ」

「さすが金持ち組織のボスは違うな」

「ああ、うちのボスなら足を踏み入れた時点で金をとっているところだ」

「でしょうね」

手際のよいシェフたちによってテーブルにズラリと並べられた美しい料理。餓えた男たちはみんな肉に目を光らせている。

ついでに、とキリオくとツナミさんも席についた。

シェフが、召し上がってくださいと言いつつ終わらないうちに手をつけるみんな。恥ずかしい奴らだよ。
でも……

「うめー！こんな良いもん食ってんのかカリブ！」

「うちは万年鬼大の手料理だからな」

「なんですかその言い方。たまにはみなさんも作ってくださいよ」

「愚かな。料理などすれば俺の手が荒れるだろう。そんなことも分からないのかクズめ」

「……そうですね」

「あ、グンちゃん。そっちの皿取ってくれよ」

「その呼び方やめろ。殺すぞ」

「骨が！喉に刺さったあ！」

「慌てて突っ込むからだる馬鹿」

「大丈夫ですかアルさん」

いつも通りのみんな。すっかり見慣れたやりとり。それを見るだけで、こんなに安心するなんて。

「ん？どうした、レン。食べないのか」

なんとか骨を取って少し涙目のアルが尋ねてくる。続いて鬼大も

「早く食べないとなくなっちゃいますよ」

「そっだぞ小娘」

「うん……あのさ」

みんなが私の方を見る。とても不思議そうに。

「その、ありがと、ね」

言った瞬間、恥ずかしくってうつむいた。ぼかんと口を開ける一同。

部屋は少しの間静寂に包まれた。

「別に礼なんて……」

「そうですよレンさん。いきなりどうしたんですか」

「いや、なんとなく。なんかさ、家族、みたいだなーって」

「嬉しいこと言うじゃねエか。レンちゃんよオ。なんなら今夜一緒に寝てやるつかア」

「黙れよ変態。いちいち卑猥なんだよお前」

「つれねえなア」

飛翔が下品に笑った。つられて私も、笑った。やっぱり私は……みんなと一緒に馬鹿な話してるのがいいや。

「そういえばキリオ。お前総隊長に就任するんだってな」

食事の途中でアルが言うと、キリオくんはチラリとツナミさんを見てから曖昧に頷いた。

「どこでそんな情報仕入れたんですか」

「さっき門番の二人が話てんの聞いた」

「おいおい、こんなガキに総隊長なんてやらして大丈夫なのか。カリブも相当人手不足だな」

こんな嫌みを言うのはグンゼだ。それにはツナミさんが答える。

「お前らんとこほどじゃねえよ。キリオは適任だ。この俺が推薦したんだからな」

キリオくんは苦笑いを溢す。私はそれとなく尋ねてみた。

「キリオくん、あんまり嬉しそうじゃないね」

「……僕は今まで通り自由にお仕事するのが楽で良かったんですけど。ツナミさんも余計なことしてくれましたよ」

「そう言うなキリオ。これはお前の為でもあるんだ」

「はいはい。分かってますよ」

そしてキリオくんは急に真面目な表情を作るとおもむろに持っていたフォークを置く。

呑気に食事を続ける陽炎たちに向かって言った。

「みなさん……実は、」

何事かと全員キリオクんに注目を集めた。どうしたんだろう。

「実は今日、レンさんを狙う男がカリブ本部に侵入してきました」

「なんだと？」

グンゼが怪訝そうに顔をしかめる。

「レン、怪我は」

アルが青い顔して尋ねてきた。

「あ、うん。だいじょう……」

言い終わらないうちに再びキリオクんの声。

「大丈夫じゃありません。敵はレンさんのことを調べあげています。もしレンさんが一人で陽炎のアジトにいたら……今頃どうなっていたか分からない」

その言葉に陽炎たちは口をつぐんだ。キリオくんは少し怒っているようだ。ツナミさんも何も言わない。

私は自分が狙われている明確な理由も分からず、この重苦しい雰囲気にお口お口するしかなかった。

でも、確かにキリオくんの言う通り、一人だったら殺されていたかもしれない。カリブにいたから、助かったのだ。

そう思うと、じわじわと恐怖が沸き上がってきて少し目眩がした。

「……そいつはどこにいる。俺がぶっ殺してやるよ」

「早まらないで下さい、グンゼさん。男は自殺しましたよ。多分、そうするようには操られていたのでしょう」

「ということは、黒幕がいるということか」

今度はミナミが言う。彼はどんな時も冷静だ。
キリオくんはゆっくり頷いた。

「悪かったな、キリオ。お前に連絡して正解だった。助かったよ」
アルの言葉にも、キリオくんの表情は少しも緩まなかった。

「僕はこれから、仕事が増えます。お節介な上司のおかげで。今回のように、あなた方の代わりにレンさんを守ることができないでしょう」

キリオくん……

「だから、約束して下さい。二度とレンさんをひとりにはしないと」

キリオくんの強い言葉に、みんなは少し戸惑っている。
しばらく沈黙を見送ったあと、先に口を開いたグンゼ。

「分かったよ」

続いてアルや他のみんなも、

「約束する」

「しゃーねえなア！ま、レンちゃんの為だ」

「今後全員での長期任務はどうしましょうか」

「任せたぞ、鬼大」

「いや、殺す気ですかミナミさん」

キリオくんと目があつた。

彼は頬をゆるめると、少しだけ目じりを下げて微笑んだ。

宴もタケナワということ、おいとますることにした。

お腹一杯になったみんなはだらだらと部屋を出ていく。

私もたらふく食べたから苦しい…。鬼大の手料理以外のもの久しぶりに食べたよ。

再び銀色の廊下を歩き、建物を出る。キリオくんとツナミさんは、門の近くまで見送りに来てくれた。

「じゃあな、また飯食いに来るわ」

「分かりました。命に代えても入らせないよう門番に言っておきま

す

「笑顔で言うんじゃないよ」

あーあ、とキリオくんが溜め息を吐く。

「レンさんが、陽炎じゃなくてカリブに居候してたら良かったのに」
キリオくん……なんて可愛いこと言うんだろう。

「なんだキリオ、お前こんなブスがタイプなのか」

癖毛バカ（グンゼ）とは大違いだよ。

みんなは先に、カリブ本部の近くの港にとめてあるという水上バイクを取りに行った。
キリオくとツナミさんに深々と頭を下げてみんなのところへ行こうとした。

「レンさん」

「ん？」

「しばらく会えないかもしれないですけど、気を付けて下さいね」

「あ、そっか。キリオくんこれから総隊長だもんね。忙しくなるのかあ」

「ええ………空気の読めない上司を持つと苦労しますよ」

「そりゃ俺の台詞だコノヤロウ」

「陽炎に飽きたら、いつでも遊びに来て下さいね。今度はツナミさんがいない時にでも」

「降格させようかな…」

ツナミさん、終始キリオクんのペースに振り回されっぱなしだよ。

「キリオくんも、頑張ってるね。その、辛いことも、あるかもしれないけど……」

そう言うとは、花のように明るく笑って握手を求めてきた。照れながらも差し出された手を握る。温かい、男の子の手だ。

「じゃあね！二人とも今日は本当にありがとう！」

「お気をつけて」

手を降ってから、背中を向けて走る。

私を待つ、五人の馬鹿の元へ。

「あいつらが羨ましいか、キリオ」

「いえ……僕にはツナミさんがいますから」

「お前、」

「嘘ですよ気持ち悪い」

「……」

「あー、今回の仕事は疲れたなーしかし」

「飛翔さん途中でヤル気なくして寝てたじゃないですか」

「愚かな。ボスにまた給料減らされるぞ」

「そうでなくても安いのにな」

「つか、今月の給料まだかよ」

「そろそろじゃないか？」

「あ、レン。おーい、遅いぞー！」

港には、もう既に水上バイクに跨がって私を待っているみんなの姿が。

「乗れよ」

グンゼが顎で後ろを指す。うん、と大きく頷いてから私はグンゼの背中に腕を回した。

バイクは一斉に浮き上がり、海の上へと出る。生温い潮風が心地よい。

ふと振り返ると、さっきまでいたカリブ本部がもう随分と小さくなっていた。

「……………」

「なにポケットとしてんだ。振り落とされても知らねーぞ」

グンゼにそう言われ、慌てて前を向く。こいつなら本当に落としかねないよ。

「それにしてもレンさん、本当に大丈夫だったんですか？」

前に行く鬼大が心配そうにこちらを見た。

続いてミナミも。

「どづいことなのだろう。レンを狙う敵とは」

「コソコソと悪趣味な奴らだ。こつなりや本格的に探しだしてぶっ殺してやるよ」

「おう、レンちゃん俺が守る。あ、惚れた？」

「惚れるか変態」

でも……ありがとう。

素直にはなかなか言えないけど。

みんなの優しさが、痛いくらいだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8196/>

きみの物語

2011年12月30日00時52分発行